早稲田大學第二十二回

文學科講義錄

萬葉集東歌義

別所正美

315-229
1200701771169
315
229

文學士 岡田正美述

萬葉集講義

早稲田大學出版部藏版

大正
6. 5. 17
製本

萬葉集講義目次

緒言……一
總說……三

卷第一

雄略天皇御製歌……一七
舒明天皇登香具山望國時之御製歌……二一
舒明遊獵內野之時中皇命使間人連老獻歌……二三
中大兄三山歌……二七
天智天皇詔內大臣藤原朝臣競憐春山萬花之艶秋山千葉之彩時額田王以歌判之歌……二九
額田王下近江國時作歌……三二
天武天皇御製歌……三五
天武天皇幸于吉野宮時御製歌……三七
持統天皇御製歌……三九

柿本朝臣人麿過近江荒都時作歌……四〇
持統天皇幸于吉野宮之時柿本朝臣人麿作歌……四五
藤原宮之役民作歌……五一
藤原宮御井歌……五八
大寶元年辛丑秋九月太上天皇幸于紀伊國時歌……六三
二年壬寅太上天皇幸于參河國時歌……六五
山上臣憶良在大唐時憶本鄕歌……六七
大行天皇幸于吉野宮時歌……六八

卷第一

磐姬皇后思天皇御歌……七〇
內大臣藤原卿娶采女安見兒時作歌……七四
大津皇子竊下於伊勢神宮上來時大伯皇女御作歌……七五
大津皇子贈石川郎女御歌……七七
石川郎女奉和歌……七八
舍人皇子御歌……七九

舍人娘子奉和歌……八〇
柿本朝臣人麿從石見國別妻上來時歌……八一
柿本朝臣人麿妻依羅娘子與人麿相別歌……八八
有間皇子自傷結松枝歌……八九
天智天皇聖躬不豫之時大后奉御歌……九一
天智天皇崩御之時倭大后御作歌……九二
天智天皇大殯之時歌……九三
大后御歌……九五
石川夫人歌……九七
日並皇子尊殯宮之時柿本人麿作歌……九八
皇子尊宮舍人等慟傷作歌……一一二
明日香皇女木瓦殯宮之時柿本朝臣人麿作歌……一一五
高市皇子尊城上殯宮之時柿本朝臣人麿作歌……一二八
柿本朝臣人麿妻死之後泣血哀慟作歌……一四七
吉備津采女死時柿本朝臣人麿作歌……一六二

柿本朝臣人麿在石見國臨死時自傷作歌……一六九
柿本朝臣人麿死時妻依羅娘子作歌……一七一
志貴親王薨時作歌……一七四

萬葉集講義目次 終

萬葉集講義

文學士 岡田正美講述

緒言

一この講義は平易にして明瞭ならんことを期す。

一この講義に於ては萬葉集の歌四千四百九十六首の内より最も有名なるもの、又、最も必要なるもの、若干を選びて、解釋を加ふ。

一萬葉集の歌は寛永版、又は、寛永版の萬葉集(卽ち、所謂流布本)を取りて本文とするが從來の例なれども、此等の版本は今は世に殘れるもの多からず。よりて、茲には、博文館の發行したる日本歌學全書第九編第十編第十一編に收めたる萬葉集を取りて本文とし、僧契沖の『萬葉集代匠記』賀茂眞淵の『萬葉考』、並に、鹿持雅澄の『萬葉集古義』等の說を參考とす。

一枕詞の解釋は賀茂眞淵の「冠辭考」、上田秋成の「冠辭考續貂」、鹿持雅澄の「枕詞解」等に讓りて、こゝには委しくは說かず、たゞ、その場所に於けるその枕詞の役目と効用とを明かにして、止む。

一歌の組立方、句の排列方を委しく説きたるもの、從來少し。その甚しきは、その歌を尊重する餘りにや、語脈の混亂したる處、思想に缺陷のある處、等は或は凡て看過し、若しくは、辯護的庇護的の態度を以て説明し去りて、爲に我々をして慊ざる思をなさしむるもの甚だ多し。この講義に於ては、さる場所は聊かも假借せずして之を指摘し、又、力めて詳細に分析し總合して以て前後の關係を明らにして、快刀の亂麻を斷つ思あらしむ。

一この講義は大凡左の順序によりて講ず。

(一)文字の異同。

(二)人名、地名、事實、場合、等の解釋。

(三)訓讀。

(四)語釋。

(五)歌意。

(六)句法。語句の文法上、並に、修辭上の整理。

(七)批評。

萬葉集總說

題號

この集を萬葉集といふにつきて古來兩説あり。一説は萬の言葉の義とし、一説は萬世の義にて、萬世の後まで傳はれとの意を以ってつけたるなりとす。僧契冲、賀茂眞淵は前説を取り、鹿持雅澄は後説を取れり。何れにしても自己のよしと思ふ方を取りおきて可なるべし。予は前説を取る。

撰者

この集の撰者につきても古來種々の説あり。古今和歌集には(假名序、漢文序、並に、歌などに)平城天皇侍臣に命じて撰ばせ給ひし由記したれど、これはあとかたもなきことなり。仙覺は聖武天皇の勅命を奉じて橘諸兄撰し、後に大伴家持續撰したるものなりとし、契冲は勅撰にあらず、諸兄の撰にもあらず、大伴家持の見聞くまゝに書き集めたるが部類も整へざるまゝにて傳はりたるものなりといひ、賀茂眞淵は所謂萬葉集は今の二十卷にあらず、諸兄公の撰ばれたる萬葉集は今の一、二、十一、十二、十三、十四、

の六卷にして其餘は家々の集にて萬葉集にあらずといへり。鹿持雅澄は、これに對して、此の說眞に理あるに似たれども、忝くも勅命を受けて彼の大臣の撰びたるものならば、今少しく際異(キハコト)に傳へ來るべきことなり、僅かの間にかの如く錯簡(マキル)るべきにあらず、やはり契冲の說の如く、家持の草案のまゝにて傳はりたるものといふ方穩(オダヤカ)なりといへり。

本書につきて檢するに、右契冲說眞淵說いづれも理あり。且つ、古傳を妄(ミダ)りに排斥するは極めて危險なり。されば、諸兄公のともかくも集めおかれたるものに家持卿の書き集めおかれたるものが加はりて、順序錯亂(ジユンジヨサクラン)して、今の如き體となりたるものと見おくが穩當なるべし。

賀茂眞淵の改め正したる卷の順序左の如し。

卷一今のまゝ	卷二今のまゝ	卷三今の十三	卷四今の十一	卷五今の十二
卷六今の十四	卷七今の十	卷八今の七	卷九今の五	卷十今の九
卷十一今の十五	卷十二今の八	卷十三今の四	卷十四今の三	卷十五今の六
卷十六今のまゝ	卷十七今のまゝ	卷十八今のまゝ	卷十九今のまゝ	卷二十今のまゝ

漢字の遣ひ方

この集の書きあつめられし頃は未だ通用の假名なかりし故に、漢字のみを種々に用ゐたり。阿をアに用ゐ、伊をイに用ゐ、宇、有をウに用ゐ、衣をエに用ゐ、於をオに用ゐ、加、可をカに用ゐ、伎、支をキに用ゐ、久をクに用ゐ、介をケに用ゐ、古、己をコに用ゐたる類(漢字のかくの如く用ゐたるを萬葉假名といふ)、並に、天をアメに用ゐ、地をツチに用ゐ、山、川をヤマ、カハに用ゐ、男、女、兄、弟をヲトコ、ヲミナ、アニ、オト、に用ゐたる類、此等は漢字を用ゐる上に於ては尋常のことにして、何人にも容易に夫と解しえらるゝことなるが、雲をウに、應をオに、君をクに、既をケに、高をコに、柴、草、積をサに、信、式、水をシに、難をナに、柔をニに、農をヌに、芳、泊をハに、尾、民をミに、昧をメに、目、木をモに、移をヤに、欲をヨに、烈をレに、用ゐたるはやゝ解し易からず。嗚呼をアに、馬聲をイに、猿をサに、石花をセに、十、庶をソに、速をトに、魚をナに、負をニに、蜂音をフに、牛鳴をムに、海藻をメに、村をレに、用ゐたるは更に解し易からず。湯鞍干をユクラカニ(閑に)に、各鑿をカクノミ(斯く而耳)に、極をコゴシ(嶮しに、黃土粉をハニフニ(丹生に)に、用ゐたる類はいよ〳〵解し難し。此の外に、アリ(有り)を蟻とかき、イカリ(惱り)を碇とかき、ウシ(大人)を牛とかき、カク(如此)を闕とかき、コガレ(焦れ)を粉枯とかき、シラニ(不知に)を胡粉とかき、ツヽ(乍)を筒とかき、

ナガラ(乍)を長柄と書きたる類もあり、又、アラシ(嵐)を冬風とかき、ウ(鵜)を水鳥とかきカタブク(傾く)を西渡とかき、カモ(鴨)を青頭鷄とかき、ヨドム(淀む)を不通とかき、ヤマシロ(山城)を開木代とかき、ヨコクモ(横雲)を東細布とかきたる類もあり、又、更に甚しきは二二とかきてシとよませたるもあり、並二とかきてシとよませたるもあり、二五とかきてトヲとよませ、八十一とかきてククとよませたるもあり、三五月とかきてモチヅキとよませ、色二山上復有山者とかきてイロニイデバとよませ、三伏一向夜とかきてツクヨとよませ、中一伏三起とかきてナカコロとよませ、向南山とかきてキタヤケとよませ、毛人髪三とかきてコチタミとよませ、大王、義之などかきてテシとよませ、諸手、左右手、又は、略して左右と書きてマデとよませ、追馬喚犬とかきてソマ(杣)とよませたるなどの類も多く、剩さへ、古書の常にはあれど、字典に見えざる異體の字を多く遺ひたれば、この意をよく知りたるものならでは容易に訓讀しがたく、又、解しがたし。されば、この集の編集以後僅に百三四五十年にして(橘諸兄は孝謙天皇の天平寶字元年正月に薨去。萬葉集卷二十の末には天平寶字三年正月の歌あり。天平寶字三年より宇多天皇寛平五年菅原道貫が新撰萬葉集を撰びし時まで百三十四年。同じき天平寶字三年より村上天皇天暦五年源順等が梨壺に於て萬葉集に訓點を加へし時まで

百九十二年。桓武天皇延暦五年大伴家持の薨去せし年より寛平五年まで百七年、同じき延暦五年より天暦五年まで百六十五年なり。而して、新撰萬葉集の撰ありし頃には萬葉集は業(スデ)に已に十分に訓みとほすこと能はざりしが如きこと見えたれば、まづは百三四五十年にして、といふことを得べし。殆んど訓むこと能はず解することは能はざるものとなり了りたり。

訓點

是に於て、村上天皇の天暦五年、やまと歌選ぶところを梨壺(昭陽舍)におかせ給ひ、源ノ順、大中臣ノ能宣、清原ノ元輔、坂上ノ望城、紀ノ時文の五人(是を梨壺の五人といふ)に命して、萬葉集に訓點(即ち傍訓(ヨミ))を加へさせ給へり。この時に加へたる訓點を古點といふ。その後、藤原道長、大江佐國、藤原孝言、大江匡房、源國信、源師賴、藤原基俊、等各々訓點を加へたり。之を總稱して次點といふ。その後、鎌倉の仙覺律師後嵯峨天皇の寛元年中より龜山天皇の文永年中に至るまでに數多の異本を對校して誤れるを正し、訓點の未だ施してあらざりしもの(長歌短歌旋頭歌合せて凡そ百五十二首ありきといふ)には新に訓點を加へたり。この時の點を新點といふ。今の流布本の訓點卽ち是なり。

爾來僧契冲、賀茂眞淵、富士谷御杖、橘千蔭、本居宣長、荒木田久老、橘守部、鹿持雅澄、その他數多の先達の熱心なる研究によりて、從來明瞭ならざりしものも明瞭となり、誤れりしものは正されて、今日にては殆んど遺憾なきまでになりにたり。予は萬葉集を繙く毎にいつも此等の先達の功績を讃歎(サンタン)し、その恩賴を拜謝せずはあらざるなり。傍訓は、歌學全書本は漢字の右側に細字片假名にてかきたり。(これは流布本の萬葉集にならひたるものなるがこれ亦梨壺の舊例なりと詞林采要抄にいへり。今日殘存せる古寫本(貫之筆又は順筆といひ傳へたる桂宮舊藏の萬葉集、公任筆といひ傳へたる金澤切萬葉集、並に、藍紙萬葉集、天治本萬葉集、行成公任其他の名筆の書といひ傳へたる元暦校本萬葉集、及び類聚萬葉集、その他を見るに、いづれもまづ本文をかき終り、次になみの大さの平假名にて訓讀を書きたり。『略解』はこれをまねて、短歌は本文を書き終りて、次の行に、訓をなみの大さの平假名にて書き、長歌は本文を適宜(テキギ)の間隔をおきて書き下し、その本文に對する訓をその次の行になみの大さの平假名にて書きたり。萬葉研究者には漢字の右側に夫々(ソレ〳〵)の訓をかきつくる方都合(ツガフ)よし。

雜歌、相聞、挽歌、譬喩歌

雜歌はクサグサノウタとよむ。又、ゾーノウタともよむ。種々の歌といふ意味なり。相聞はアヒギコエとよむ。又、ソーモンともよむ。心の中を歌にのべて互に知らすとの意味なり。『古義』には之をシタシミウタとよむべしといへり。少しむつかしき心地す。挽歌はカナシミウタとよむ。又ベンカともよむ。悲しむ心をのべたる歌といふ意味なり。譬喩歌はタトヘウタとよむ。又、ヒユウタともよむ。ものにたとへて己が心をのべたる歌といふ意味なり。この四種は歌を意趣の上より見て類別したるわかちなり。

短歌、長歌、旋頭歌

これは歌の形式の上の類別なり。短歌はミヂカウタとよむ。五七五七七の三十一字の歌をいふ。長歌はナガウタとよむ。五七、五七、五七、五七、……五七七の形の歌をいふ。五七の句の數はいくつありてもよし。されば、短きは一首にて五十五字なるもあり、(變則なるは四十八字なるもあり)、長きは一首にて九百字ばかりなるもあり。旋頭歌はセドーカとよむ。『古義』にはフタモトウタとよむべしといへり。五七七、五七七の三十八字の歌をいふ。

反歌

長歌の次に反歌とかきて普通の短歌を擧げたるがあり。こはカヘシウタ又は、ハンカとよむ。長歌にのべたる心を今一度くりかへしてのぶるとの意よりいへるなるべし。されば、反歌の内には、長歌の内にいへるを總括(ソウクワツ)していま一度いへる樣なるが多し。されども、また、長歌の内にえ盡さゞりしことを補はんとして、あとに短歌をそへたるもあり。されば、意趣はともあれ、形式よりいひて、長歌の終にそへたる短歌は皆反歌といふと心得べし。反歌とかくべきところを、短歌とかきたるところもあり。これはその歌の形の短歌なるより妄(ミダリ)に短歌とかきたるものなるべし。反歌とかくを正しとすべし。

和歌

古今集以後に於ては歌を和歌といふこと、つねのことゝなりたれども、萬葉集に於ては歌のことを妄りに和歌といふことなし。その和歌といへるは、その前に漢詩ありて、その漢詩と區別する爲に殊に和歌(やまとうた)といふ場合、又は、他人の歌に唱和し。てよみたる場合に、和歌といふなり。たゞの歌のことと思ふべからず。

歌數

萬葉集に收めたる歌の數は『古義』の計算によるに、合計四千四百九十六首なり。この内長歌は二百六十二首、短歌は四千百七十三首、旋頭歌は六十一首なり。

歌の年代

萬葉集の歌四千四百九十六首の内にて最も古き歌は仁德天皇の皇后磐姫(紀元一千〇七年(今年大正三年より千五百六十八年前)に崩御)の御歌なり。之につぎたるは反正天皇の皇子木梨輕皇子(紀元一千百十三年(今より千四百六十二年前)に薨去)の御歌、之に次ぎたるは雄略天皇(紀元一千百三十九年(今より千四百三十六年前)に崩御)の御製なり。最も新しきは淳仁天皇の天平寶字三年春正月一日因幡國廳に於て國郡司等に饗を賜はりし時の宴歌なり。而して、この天平寶字三年は紀元一千四百十九年にして今より千百五十五年前なり。されば、この萬葉集には千百五十五年以前凡そ四百年間の歌四千四百九十六首が載りたるものと知るべし。

古萬葉集

本集を中古の書に古萬葉集と記したるがあり。これは菅原道實が寛平五六年頃に、寛平五年皇后の宮に於て行はせられたる歌合の歌を採りて撰びたる新撰萬葉集(一に菅家萬葉集ともいふ)の、その後、もてはやさるゝやうになりて、此と彼とを區別せんが爲に、本集を殊に然かよびなしゝものなり。

版本

寛永二十年に出版したる萬葉和歌集二十卷あり。同一の版木を用ゐて寶永六年に出版したるものあり。普通に之を流布本といふ。これは漢字の右側に細字の片假名にて傍訓(バウクン)を施したり。傍訓は清音の假名のみを用ゐ、濁音の假名なし。又、句點もなし。又、勿論、解釋もなし。專門家は普通にこの本を正本とすれども、專門家以外の人には極めて不便なるものなり。

享和三年に出版したる萬葉和歌集校異二十卷あり。普通に校異本といふ。諸書を校合(ケウガフ)して、異同のあるところをその行の欄外(ラングワイ)に頭書したるものなるが、その校合(ケウガフ)は極めて杜撰(ズサン)なるものなりといふ。本文のさまは大體流布本に等し。傍訓はやはり清音假名のみにて、濁音假名なし。句讀もなし。又、勿論、註釋もなし。紙面の體裁は流布本よりも遙に立ちまさりたれど、やはり專門家以外の人には極めて不便なるものなり。

明治二十四年に博文館より出版したる日本歌學全書の內に萬葉集二十卷三冊あり。この本は大體の體裁(テイサイ)は流布本によりたれども、一頁の行數、流布本は八行にして、校異本も之にならひたるに、この本は一頁を十行としたるが故に、歌のありどころ流布本と變りて「何卷の何枚目にあり」などいひても、全く搜索する便を失ひたり。專門家の爲には誠に遺憾なりといふべし。傍訓には清音濁音兩假名を用ゐたれど、句讀點はなし。この本、體裁流布本に似たる上に、欄外に種々の註釋を列記し、且つ、容積も小く、價も廉なれば、普通の人には極めて都合よし。但し、誤植(ゴショク)の多きは遺憾なり。

註釋書　參考書

注釋書、參考書はその數百以上あり、一々に列記(レッキ)し難し。その內にて重要なるものは、釋契冲の萬葉集代匠記四十五卷總釋三卷雜說一卷枕詞釋二卷拾遺三卷、北村季吟の萬葉集拾穗抄三十卷、賀茂眞淵の萬葉考六卷別記四卷、富士谷御杖の萬葉集燈五卷、本居宣長の萬葉集玉の小琴二卷、加藤千蔭の萬葉集略解三十卷、鹿持雅澄の萬葉集古義

百四十一冊、池永泰良の萬葉集見安補正十卷、木村正辭の萬葉集美夫君志八冊等なり。この内、萬葉集二十卷首尾全備し、注釋もあり、購求も難からざるものは、萬葉集代匠記、萬葉集略解（リヤクゲ）、萬葉集古義なり。特に『略解』は木版本も少からざる上に、先年大阪にて活版にて出版したるがあり、又、近年國民文庫刊行會にて活版にて出版したるものあり、その上に又、近頃博文館より數多の頭注を加へて同じく活版にて出版したるもあれば、購求せんといとたやすし。されども『略解』は名稱の示せるがごとく略解にて、注釋極めて粗く、且つ誤も多し。されど、原版は千蔭が自から版下を書きたるものなるが故に、誤は卽ち著者の誤と認め得べく、我々は安心して讀むことを得べきを、大阪版は活版の誤植非常に多く加はりたれば、誤と見ゆるも印刷の誤か、著者の誤か判らず、剩（アマッ）さへ、活字も用紙も印刷も製本も極めてあしくて、見るからに不快の念を起さしめ、爲に萬葉集の價値を損すること甚だ多し。萬葉集を尊重する人、又、せんとする人は、須らく千蔭自筆の木版本を購ふべし。國民文庫本は校正も印刷もよく、紙面の體裁も製本の工合も立派なれば、活字本を讀みつけたる人々には最も適應せる略解本なり。博文館本は紙面の體裁も校正も國民文庫本には劣れども、諸先達の考說を數多頭注として掲げたれば、單に萬葉集の注釋書として見る時は、國民文庫本よりも普通の人

には便利なること幾分か多かるべし。代匠記は先年早稻田大學出版部より活版印刷に付して發行したるものあり。流布本の異字誤字をも凡て原のまゝにして本文を補ひたれば、專門家には極めて都合よき貴き本なり。されど、普通の人には便利ならず。

拾穗本は訓讀を平假名書きにしてこれを本文とし、漢字は傍に細書して傍訓の如くにしたり。樣子餘りにかはりたれば、取らず。

注釋の最も詳細なりと稱せらるゝものは『古義』なり。この書、實に詳しきことは詳しきに似たり。されども、中にはくだ〳〵しきふしもあり、なほ足らぬところもありて、完全なるものとはいひ難し。近頃國書刊行會より活版にて出版して、以前よりは大に得易くなりたれども、なほ、價高く、卷帙浩瀚に過ぎて普通の人には適せず。

普通の人にはやはり博文館の歌學全書本最も都合よかるべし。そは本文の流布本のおもかげを存せるが上に、鼇頭に列擧したる地名人名物名難解の語等の注釋は、大抵『略解』の要用なる部分を凡てぬき取り、之に『古義』の說を若干取り添へて掲げたるものなれば、一書にして正文と注釋書とを兼ね、然かも容積小に價も低きこと先にいへるが如くなればなり。俗本としては博文館の略解本最も優るべし。

釋春登の著せる萬葉用字格といふものあり。美濃版紙數四十枚ばかりの一冊もの
にて、手輕なる書なり。萬葉集中につかひたる語を五十音に類別して、さて、夫を用ゐ
方によりて、正音(例へばシに志をつかふ)、略音(例へばシに信をつかふ)、正訓(例へば、シに爲
を、シルシに表を、シバシに片時をつかふ)、義訓(例へば、シに所を、シカに雄鹿を、シロクカハリに
變白髮をつかふ)、略訓(例へば、シに足、石を、シラガに白髮をつかふ)、約訓(例へば、シミヅに清水
をつかふ)、借訓(例へば、シに知、磯、羊蹄を、シラニに白髮を、シグレに爲暮、をつかふ)、戲書(例へば
シに重二、並二、などをつかふ)、などに分類して列擧したり。おもしろく、且つ、益多き書
なり。見るべし。

萬葉集總說 終

萬葉集卷第一

雜歌

泊瀨朝倉宮御宇天皇代

〔解釋〕雄略天皇の御代なり、今より凡千四百四五十年前なり。

天皇御製歌

籠毛與、美籠母乳、布久思毛與、美夫君志持、此岳爾、菜採須兒、家吉閑、
名告沙根。虛見津山跡乃國者、押奈戸手吾許曾居、師告名倍手吾己
曾座。我許者、背齒告目、家乎毛名雄母。

〔文字〕家吉閑は家告閑の誤なりといふ說あり。師告名倍手は師吉名倍手の誤。我
許者背齒告目は我許曾者云々の誤なりといふ說あり、又、我乎許曾背跡齒告目の
誤なりといふ說もあり。

〔訓讀〕籠、カタマと訓む說あり。家吉閑ならばイヘキカナと訓み、家告閑ならばイ
ヘノラヘと訓む。吾許曾居師告名倍手をワレコソヲラシノリナベテと訓む

説あり。今採らず。●吾己曾座、ワレコソマセと訓む説あり。●我許者云々、前説を採れば、齒をトシと訓みてワレコソハ、セトシノラメ、と訓み、後説に從へば、アヲコソ、セトハノラメ、と訓む。

〔語釋〕籠、カゴのことなり、コと訓みてもカタマと訓みても、物に變りはなし。今はコの方を採る。●毛與は感動詞、籠をとり立てゝいふ、呼び上げていふ意をあらはしたる丈のもの。●美籠の美は美稱の語といひて、たゞ物をほめていふ時にそふる語なり、みよしの、みくまの、みさむらひ、などのみと同じ。美しき、といふ意味にはあらず。●布久思、掘る串といふこと。●採須、摘むといふ語を敬意を含めていひたるもの。おつみなさる、つんでいらっしゃる、といふこと。●兒、こゝにては妙齡の女子なるべけれども、親愛の意をもつて子、兒、といはれたるなるべし。●家吉閑、キカナは聞かなにて、家をきゝたいものであるといふこと。家告閉、告閉はのれに敬意を含めていひたる語にて、のれはおっしゃいといふことなれば、ノラへは、まづ、おっしゃいませ、などいふに當るべし、こゝにてはノラへといふ方よからん。●告沙根はのれに敬意を含めていひたるのらせに更に親愛の意を含めていひたるもの。おっしゃいませな、などに當るべし。●虛見津、やまと(大和)に添ふ枕詞。●押奈戸手、一體におしつけて、一體におしなびけて、などの意。●師告名倍手、おしなべてと意同じ。●座、ヲレと訓めば、たゞをることなるが、マセと訓むときは敬意入りて、入らっしゃるといふに同じくなる。自分のことに、上にはをるといひ、下には入らっしゃるといふは、少しくをかしきやうなれど、上には居の字を書き、下には座の字を書きたる處を見れば、こゝはマセとよむ方よからんか。●我許者、前説を採りてワレコソハと訓みても、意は我をこそ、といふことなり。後説のアは我といふことにて、我をこそ、なり。即ち意味に於ては二説とも異なることなきなり。●許曾、上にも二つあり。テニヲハのこそなり。上の語を強くさしていひたるまでのものなり。●背齒告目、夫としておっしゃってよからうといふことなり。セトシノラメのシはテニヲハにてぞに似たるもの、セトハノラメのハもテニヲハのハにて、兩者とも甚しき差なし。

〔場合〕この歌は、天皇の一日野邊に出で給ひて、籠と串とを持ちて若葉を摘みゐる女を見たまひて、汝、わが妻になれよ、我はえらき者ぞよと云ひ掛け給ひしものなり。

〔歌意〕籠を持ち、掘串を持ちて、此處の岳の上で若菜をつんで入らっしゃるお娘よ。あなたの家をおっしゃいませ、お名をおっしゃいませな。」大和國は一體に私が

おしなびけて支配してゐるのだ。」（私はさういふ立派な身分のもので、あなたの夫としてはづかしからぬものであるから）私をこそ夫として家も名もいってよからう。」――昔は猥りに他人に我が家、我が名をいふことはなかりしなり。

〔句法〕長歌の普通の句法は五七、五七、……なり。然るに、この歌は、初句三字、第二句四字、第三句五字、第四句六字等にて、句法整はず。是れ時代の古くして未だその整ふべき時代に達せざりしによるものなり。妄りに古雅なりなどいひて尊重して、この體をまねるなどは愚なるしわざなり。

左にこの歌の句法を圖解す。

こもよ、
みこもち、
ふぐしもよ、
みふぐしもち、　この岳に　なつます子。
いへ　のらへ、
な　のらされ。」

そらみつやまとの國は
おしなべて　我こそをれ。
しきなべて　我こそませ。」
我をこそは　せとしのらめ、いへなも
な　なも。」

高市岡本宮御宇天皇代

〔解釋〕舒明天皇の御代なり。今より凡千二百七八十年前なり。

天皇登香具山望國之時御製歌

〔解釋〕香具山は大和國十市郡に在り。西に畝火山あり、北に耳梨山ありて、鼎足の形をなす。古來有名なる三山是なり。香具山の北麓に埴安の池あり、香具山の西北より東北にかけて餘程廣かりしやうなり、今字南浦といふところに纔に殘れり。●望國、高き處に上りて、下の山川田畑村落の樣子等を眺むることなり。

山常庭村山有等、取與呂布天乃香具山、騰立、國見乎爲者、國原波煙立籠、海原波加萬目立多都。阿怜國曾、蜻島八間跡能國者。

〔文字〕立籠●は立龍の誤なりといふ說あり。

〔訓讀〕立籠の方をとらば、訓はタチコメとよむべし。

〔語釋〕山常、大和國のこと。●庭、テニヲハのにはなり。●村山、群山なり。數多の山といふことなり。●取與呂布、取は接頭語にて、殆んど意義なし。たゞ意味をつよむる位のものなり。與呂布は鎧をヨロヒといふと同樣、備を十分に具足することなり。こゝにては、樹木などのよく繁りて山の形の立派なるをいひたるなり。

●國原、見渡したる平地のこと。●煙立籠、ケブリタチタツと訓めば、この煙は人家の炊煙などのことゝとらる。タチタツは幾條(イクスヂ)も幾條もあちらこちらに立てるさまをいへる語なればなり。されど、もしケブリタチコメの方をとらば、その煙はあながちに炊煙(スキエン)のみのこととすべからず、霧、霞などのことをも取るべし。古くは、霧又は霞を概してけぶりといひしこと常なればなり。こゝにては炊煙と見る方よからん。●海原、埴安(ハニヤス)の池をさしていへるならん。●加萬目、鷗(カモメ)のこと。●恫怜、ウマシ、今いふ、うまいと同じ語、よい、いい、の意の語なり。●蜻島、秋津洲とも書く。大和國にそへたる枕詞。

〔歌意〕大和國には澤山(タクサン)な山があるが、その内で草木繁茂(サウモクハンモ)して山の形の最もよき天香具山、この山に、今、我が上りて、あちこち見渡して見ると、山の麓の方の平地にはあつちにもこつちにも炊煙が盛に立ち立ちしてをり、向ふの埴安の池の上には鷗が立ち立ちしてゐる。嗚呼、我が大和國は誠にいい國である。

〔句法〕この歌の句法を圖解すれば左の如し。

大和には群山あれど、
とりよろふ天の香具山、上り立ち國見をすれば、
國原は煙立ちたつ
海原は鷗立ちたつ。」
うまし國ぞ、蜻島大和國は。

天皇遊獵(スメラミコトノミカリシタマヒ)内野(ウチヌ)之時(シトキ)、中皇命(ナカチビメノミコト)使(シテ)間人連老(ハシヒトノムラジオユ)献歌(タテマツラウタ)

〔文字〕中皇命●は中皇女の誤なるべし。●歌の上に御の字おちたりといふ説あり。

〔解釋〕内野、大和國宇智郡に在り。●中皇女は舒明天皇の第二女、後に孝德天皇の后に立ち給ひて間人の皇后と申せり。●間人連老、皇女の御養育掛の老といふ人なり。●歌の上に御の字おちたりといふ説に從へば、中皇女がこの歌を詠み出でたまひて、それを老をして天皇に献らしめたまひしものとなる、歌は皇女の御作なるが故に御歌とあるべしといふ。御の字なしに解釋する方に從へば、皇子皇女の御歌にして御歌といはざるもの、集中に例なし。これは御の字なくて例に違へるものなれば、皇女の御歌と見るべからず、皇女の老をして詠ましめたまひて、それを老をして天皇に献(タテマツ)らしめられたるものなり、歌は老の作なる故にたゞ歌とのみ書くと、いふ。間人連老と使者の名を明記したるところを以て見るに、この後の說の方適(カナ)へるが如し。今はこれに從ふ。たゞし、勿論、代作のことな

れば、歌の上にては作者は中皇女なり。

八隅知之我大王乃、朝庭取撫賜、夕庭伊縁立之、御執乃梓弓之、奈加弭之音爲奈利。朝獵爾今立須良思、暮獵爾今他田渚良之。御執梓能弓之奈加弭之音爲奈里。

反歌

玉刻春内乃大野爾馬數而、朝布麻須等六、其草深野。

〔文字〕奈加弭は奈利弭の誤にてナリハズと訓むべしといふ説あり。然るべし。● 御執梓能弓は御執能梓弓の誤。

〔訓讀〕伊縁立之、イヨリタタシシと訓むべしといふ説あり。

〔解釋〕八隅知之、この語、又、安見知之ともかく。大體は天下を治めたまふといふやうなる意義の語なれど、委しきことは、漢字の宛て方によりて夫々に説あり。たゞ大王にそへる枕詞なりと心得おきて十分なるべし。● 朝庭、夕庭の庭は、前の歌にあるのと同じく、テニヲハのにはなり、庭園にはあらず。● 取撫、手に取りて愛撫すること。● 伊縁立之、伊は發語といひて、たゞ音調をとゝのふる爲にそへたるのみのもの、意義なし。縁立之、ヨセタテシと訓む時は、天皇が御身近く寄せ立てたといふことゝなる。この語は敬意を含みをらず、上の取りなでたまひに對する語としてはちと如何なり。イヨリタタシと訓む時は、イは發語にて意味なく、ヨリタタシは寄りたちたまひしといふこと、卽ち、天皇の方より寄り行きたまひて傍に立ちたまひしことゝなる。敬意は含まれたり。天皇の方より寄り行きたまふといふこと、如何とは思はるれど、朝といひたるに向へて夕といひたるに對して、特更に取りなでたまひに向へていよりたゝしといひたるかとも思はるれば、今は暫くその一説に從ふべし。實はイヨリタタスといひたきところなり。● 御執、天皇の御手に取りたまふところよりいふ。とらしは取るに敬意を含めたるいひ方なり。佩刀のことをみはかしといふと同じさまのいひ方なり。● 梓弓、梓の木にて作りたる弓なり、梓の木にて作りたる弓は、力ありて極めてよきものと當時定りたりしなり。● 奈利弭、鳴り弭なり。弓の上端に鳴るべきものをつけおきたるが、弓を射る毎に音高く鳴りたりと見ゆ。この鳴る弭を鳴り弭といひしなり。● 奈利、このナリは詠歎のナリなり、指定のナリ、斷定のナリよりは意味輕し。● 朝獵、暮獵、今天皇の出でたまはんとするは、次の反

歌によりて見るに、朝獵なり。然るに、此に朝獵(カリ)に夕獵(カリ)にと並べたるは聊か如何なるやうなるが、これは古の長歌の常例にて、かやうの對句(疊句といふ方こゝには適せり)には上下語をかへていふことの必要なる上より、春の場合にも秋といひ、ひるの場合にも夜といふ例、常に多し。こゝもその一例なれば、夕獵の方はただ形式をとゝのへたるまでのものとして、意味を極輕(ゴクカル)く取りておくべし。●立須良思、タタス、お立になる、お出立遊ばす、といふこと。ラシは今、日常につかふらしいなり。お出かけになるらしい、お出かけになるやうだ、なり。●玉刻春、ウチといふ音をいひ出すための枕詞。●内乃大野、宇智の大野なり。●馬數而、馬を並べてなり。従者を引連れて、共に馬を並べてなり。●布麻須等六、踏み給ふらん、お踏みになるだらう、なり。●草深野、草深く繁茂せる野なり、宇智野のことなり。

〔歌意〕我が父天皇の朝夕に手に取りたまひ自からもそばへより給ひなどして愛したまふ梓の弓の鳴り弭の音がするよ。是に由て考ふるに、父天皇は今朝獵に出かけ遊ばすらしい。アレあのやうに梓の弓の鳴り弭の音が盛にするよ。宇智の大野に馬を並べて、あの草の繁茂せる大野を此の朝踏みたてゝ御獵を遊ばすであらう。

〔句法〕此の長歌は句法誠にめでたく、古來歌範(カン)として人々の尊重し來れるものなり。左に圖解して示す。

やすみしゝ我が大君の　朝には取り撫でたまひ夕には御執の梓の弓の鳴弭の音すなり。」
朝獵に今たゝすらし夕獵に今たゝすらし　御執の梓の弓の鳴弭の音すなり。」

後崗本宮御宇天皇代(ノチノオカモトノミヤニアメノシタシロシメシスメラミコトノミヨ)

〔解釋〕齊明天皇の御代のことなり。今より凡千二百五六十年前なり。

中大兄(ナカノオホエ)　三山歌(ミツヤマノミウタ)一首

〔文字〕中大兄の下に命の字あるべし、と『代匠記』にも『考』にもいへり、然るに『古義』には、大兄卽ち皇子なれば、要らずといへり。中大兄の下の七字は後人の書入なれば削れり。三山の下に御の字あるべし。一首の二字、なきを可とす。

〔解釋〕中大兄は天智天皇のいまだ皇子にておはしましし時の御名なり。●三山とは香具山、畝火山、耳梨山のことなり。

高山波雲根火雄男志等、耳梨與相諍競伎。神代從如此爾有良之、古昔母然爾有許曾、虛蟬毛嬬乎相格良思古。

反歌

高山與耳梨山與相之時、立見爾來之伊奈美國波良。

〔文字〕孀は孀の誤、格は挌の誤なり。

〔語釋〕高山、香具山のことなり。●雲根火、畝火山のことなり。●男志、愛しなり。いとしく思ふ意なり。●等、とてなり。●良之、推量する意の助動詞なり。今のラシイなり。●然爾有許曾、しかなればこそといふこと、さうである故にこそ、といふことなり。●虛蟬、あて字なり。現身とかくを正しとす。うつせみともうつしみともうつそみともいふ。現在といふことなり。●孀、妻なり。●相挌、アヒウツと訓む訓はとらず。妻を奪ひあふ、といふことなり。●良思吉、助動詞らしの古き活用形なり、上のこそその結となりゐるなり。●相之、立ち向ひて爭ひしといふことなり。●伊奈美國波良、印南の國原といふことなり、印南は地名、國原は廣き原野の意なり。

〔場合〕この歌は、先輩の普通の說にては、播磨風土記に在る三山の鬪爭の故事を詠じ給ひしものなりととく。予は、この歌は、然る簡單なるものにはあらず。これは天皇が或る人(天武天皇か)を或る婦人(額田女王?)をとりあひ給へりし頃、鬪らずも三山の爭の話をきかれて(若しくは、播磨印南野に行幸したまひて、そこにて)御自らが心に思ひあたらるゝところありて、今我等が妻をあらそふも無理ならぬことなり、との意をもらしたまひしものなるべしと思ふ。

〔歌意〕昔、香具山(男山)が畝火山(女山)をいとしいとて、耳梨山(男山)と相鬪爭したことがあつた。神代から既にかくの如きことがあつたらしく、古もそんなことがあつた樣であるからして、現世に於ても人々が妻をとりあつたりするのらしい。

香具山と耳梨山と鬪つた時に(出雲國に居られた阿菩大明神といふ神がこの鬪爭をきかれて、二山を和睦させやうとして、出雲から)出かけて來られて(この印南郡まで來られたところが、爭が既にやんだときゝ給ひて、そこに乘つて來られた船を覆せて)鎭まりましたといふ、その印南の國原よ、といふことなり。

近江大津宮御宇天皇代

〔解釋〕天智天皇の御代のことなり。今より凡千二百四十餘年前なり。

天皇詔内大臣藤原朝臣競憐時額田王以歌判之歌。

春山萬花之艶秋山千葉之彩

〔解釋〕藤原朝臣は大織冠鎌足のことなり。●額田王は鏡王の女なり、正しくは額田女王とあるべし。この女王この時は、天智天皇の妃にておはしきと見えたり。

冬木成春去來者、不喧有之鳥毛來鳴奴、不開有之花毛佐家禮杼、山乎茂入而毛不取、草深執手母不見。秋山乃木葉乎見而者、黃葉乎婆取而曾思奴布、靑乎者置而曾歎久。曾許之恨之。秋山吾者。

〔文字〕冬木成、成は盛の省字なり。●不取、取は聽の誤、キカズと訓むべし。●恨之、恨は怜の誤、タヌシ、又はオモシロシと訓むべし。

〔語釋〕冬木成、春をいひ出す爲の枕詞。●春去來者、春が來れば、春になれば、といふことなり。春されば とのみもいふ。去の字を書きたれど、字面になづむべからず。●不喧有之、冬の間鳴かざりし、なり。●佐家禮杼、咲きをれど、咲いてをれど、なり。●山乎茂、これは當時の一種のいひかたなり。意譯すれば、山が茂くて、又は、山が茂いので、といふ意になる。●入而毛不聽、山に入つてきゝもせず、山に入つてきくことも出來ず、なり。●草深、草がふかくて、又は、草が深いので、なり。●執手母不見、花を採りても見ず、なり。●黃葉乎婆、紅葉になるをモミヂ、モミヅといふ。紅葉になりたるをば、なり。●取而曾、手に折り採りて、なり。曾はテニヲハのぞなり。●思奴布、偲と普通にかく。思ふことなり。こゝにては賞翫することなり。●置而曾、折り採らで、木の枝におきて、なり。●歎久、こゝにては歎賞するなどの意にとるべし。●曾許之、そこは其處、しはぞ、なんなどと同類のテニヲハ。そこが、それが、といふことなり。●怜之、たぬし、樂し、又は、おもしろし、なり。●秋山吾者、秋山の方私は、吾は秋山の方勝れりと思ふ、といふことなり。

〔歌意〕春が來ると、冬の間鳴かなかつた鳥も來て鳴き、(奴は輕く見て、たゞ來てなき、とりておく。) 冬の間咲かなかつた花も咲いてゐるけれど、春山は木が生ひ茂つて一寸はひりにくいので、山にはひつて、その鳥のなく聲をきゝもせず、又、春山は草が深く茂つてふみ込むこともしがたいので、花の枝を手に折り取つて賞翫したりなどもしない。然るに、秋山になると、さやうなことがないから、秋山の木の葉を見ては、紅葉したのをば手に折りとりて賞翫し、靑葉の分をば折り取らずして枝において、之をも賞翫する。そこの處がどうもいかにもおもしろい。であるから、春山と秋山といづれがまされるといふならば、私は秋山の方が勝つてゐるといはう。

〔句法〕この歌の句法も後世の模範とせるものなり。圖解すれば、左の如し。

冬木もり春さりくれば、
なかざりし鳥もきなきぬ、
さかざりし花もさけれど、
山をしみ入りてもきかず
草ふかみ執りてもみず。」

秋山の木の葉を見ては、
もみつなばとりてぞしぬぶ、
青きなばおきてぞなげく。」
そこしうらめし
たぬしき。」
秋山、吾は。」

〔追記〕この歌の端詞に鎌足のことを大臣藤原朝臣と書きたれども、當時鎌足は未だ内大臣にあらず、藤原の氏も賜はらず、又、勿論、未だ朝臣にてもなく、内臣中臣連鎌足にてありしなり。卷二の初にある内大臣藤原卿も然り。思ひ誤るべからず。

額田王下近江國時作歌

〔文字〕作歌の下に井戸王卽和歌の六字あれど、あるべきならねば削れり。●この歌、この歌の左注を案ずるに、額田女王の歌にはあらず、天智天皇、又は大海人皇子の御歌なるが如し。然らば作歌は御製歌、又は、御歌とあるべきものなり。

味酒三輪乃山、青丹吉奈良能山乃、山際伊隱萬代、道隈伊積流萬代爾、委曲毛見管行武雄、數數毛見放武八萬雄、情無雲乃隱障倍之也。

反歌

三輪山乎然毛隱賀。雲谷裳情有南畝。可苦佐布倍思哉。

〔文字〕山際の下に從の字おちたるべし。

〔語釋〕味酒、三輪をいひ出す爲の枕詞なり。味い酒のみわ(みわは酒といふことなり。卽ち、味い酒なるみわの酒といひつゞくるところより枕詞になりたるなり。●青丹吉、奈良にそひたる枕詞、青丹は青土なり、綠青なるべし。古へ、綠青の奈良の名產なりしより、然かいひつゞけて、奈良の枕詞となりしものなり。●山際從、山の間より、なり。ゆは古きテニヲハにて、より、といふことなり。●伊隱、イは接頭語の内の發語と稱するものにて、音調の便宜の爲め、又は、勢をそふる爲にいひそへたるまでのものにて、意味なし。●道隈、隈は道の曲り手などにて、こなたよりはかくれて見えぬ處をいふ。●伊積流、イは發語。みちの曲隈がいくつもいくつも重なり積るなり。●委曲毛、漢字面の如し。くはしくといふこと。モは感

動詞にて、意味なし。●見管行武雄、道を歩きながら山をみい、みい、して行かうものを、なり。●數々毛、度々なり、モは上のと同じく、感動詞なり。●見放武、遠く眺むること、天の方遠くながむる意。●情無、なさけなく、無愛相に、なり。●隱障、かくし邪魔することなり。●倍之也、べしは助動詞のべし。ヤは反語のテニヲハのやなり。かくすだらうか、イヤ、かくしはしまい、なり。實際かくしてゐるを見て、歎息して、いつまでもかくてあるべきか、イヤ、今直きに散ずるならん、といへるなり。●然毛、ああもなり。モは歎息の意をあらはす。●隱賀、カは歎息の意をあらはす感動詞なり、今いふカナアなり。●雲谷毛、せめて雲でも、なり。●有南畝、あつてくれよかし、あつてほしいものだ、あつてもらひたいものだ、なり。凡て、先方の斯々あらんことを此方の希望する意をいひあらはす語なり。自分の云々せんことを願ふにはあらず。誤るべからず。

〔歌意〕三輪の山、あの三輪の山が奈良の山の間から隱れてしまふまで、又みちの曲りめ〳〵の數多く重なりつもるまで、あの三輪の山を始終くはしく〳〵見ながら行かうものを、又、數々眺望しようと思ふ山であるものを、その三輪の山を雲めが無情にも隱さうや、イヤ、無情なる雲も我が切なる心をくんで、さやうになきけなく隱しはしまい。

あの雲は、我が見つゝ行かうと思つてゐる三輪山をあもかくすのかナア。いくら無情な雲だとても、せめてあはれみの心はあつてほしいものだ。あの雲はいつまでもかくさうや、イヤ、さうかくしはしまい、今直にはれて、なつかしき三輪の山の姿を見せてくれるであらう。

〔句法〕この長歌の句法を圖解すれば、左の如し。

うまさけみわのやま、
あをによし奈良の山の山のまゆいかくるまでに
みちのくまいつもるまで
つばらにも見つつ行かんたしばしばもみさけん山たに
心なく雲のかくさふべしや。

明日香清御原宮天皇代

〔文字〕宮の下に御。宇の二字おちたり。

〔解釋〕天武天皇の御代なり。今より千二百二三十年前なり。

天皇御製歌

三吉野之耳我嶺爾、時無曾雪者落家留。間無曾雨者零計類。其雪乃時無如、其雨乃間無如、隈毛不落思乍叙來、其山道乎。

〔訓讀〕耳我嶺、吉野にミミガといふ山なし、御金峯のことにてミガネノタケと訓むべきならんといふ說あり。然るべし。●間無、マナク、と訓む說あり。●來、クルと訓む說あり。コシの方適へり。

〔語釋〕時無、間斷なく、絕間なくといふこと。●間無、これも、上の語と同じく、間斷なくといふこと。●隈、すみの處、曲り處、山道の曲り〳〵てゐるその曲り處。●不落、おとさず、漏さず。その隈々毎にといふ意。●思乍、何を思ひつゝか。此處にては、汝を思ひつゝ、なり。●來、斯くしつゝ吾はその山道を來たぞよ、といふこと。

〔場合〕此の歌は、吉野の奧におかれたる女あり、そこへ天皇の通ひ給ひけるが、或る時行き着き給ひて詠み出で給ひしものなるべし。（思ひつゝぞ來る。その山道を、の方を採るとすれば、この歌は、その通ひ給ふ途中、女の家にやゝ近づき給ひたる頃詠みたまひしものと見るべし。）

〔歌意〕三吉野の耳我の嶺には間斷なく、雪が降つてゐる。間斷なく雨がふつてゐる。（間斷なくといはんが爲に間斷なきものの例として途中の景物を取り來れるなり。歌意の上に重き意あるにあらず。）その雪の間斷なきが如く、その雨の間斷なきが如く、間斷なく、山道の曲角曲角ごとに、のべつに、お前のことを思ひながらこの山道を私はやつて來たぞよ。

〔句法〕この歌は句法嚴正にして後世の歌範とせるものなり。左に圖解して示す。

みよしののみゝがのみねに　ときなくぞ雪はふりける。
　　ひまなくぞ雨はふりける。
　　その雪の時なきが如、
　　その雨のひまなきが如、　隈もおちず
　　思ひつゝぞ來し、
　　その山道を。

天皇幸于吉野宮時、御製歌

淑人乃良跡吉見而好常言師芳野吉見與、良人四來三。

〔訓讀〕四來三の訓方に數說あり、ヨキ人ヨ、キミ、と訓むもの、ヨキ人ヨクミツと訓むもの、ヨキ人ヨクミと訓むものあり。此處にはヨクミ適すべし。

〔語釋〕淑人、賢人とか君士人とかいふに當るべし。何ノ某と定めていふにはあらで、ただ大概に古人がといふほどの意なり。●良跡、良しと、なり。●吉見而、精しく檢

査して、なり。●好常、好しと、なり、上の良跡と同語なり。同語を二度くりかへしていひたるなり。よき人がよく見てよしといひし、といふことなり。●芳野、吉野なり。その吉野をば、なり。●吉見與、能く注意して見物せよ、見おとさずくはしく見物せよ、なり。●良人四來三、良人よく見つ、をとるとすれば、意は、昔の君士人がよく見た、となりて、上の句の意を打返して再びいひたることゝなる。これはちとおもしろからず、卽ち、適へりと思はれず。良人よ君、をとるとすれば、良人は從駕の人々、大臣侍臣を指していはるゝことになりて、大臣侍臣等よ諸君、といふことになる。これもちとおもしろからず、適へりとも思はれず。良人、能く見、を取ることとすれば、意は大臣侍臣等よ、能く〳〵見よ、見物せよ、といふことになる。是が最もよからんとおもふ。

〔歌意〕昔の賢人等がよく見て、いい處であるといつたこの吉野をば能く見よ、君子等よ、能く見よ。

〔附記〕この歌、歌としては名歌といふにはあらねど、ヨク、ヨシ、ヨキ、といふ語を數多用ゐたるかどにて有名なれば、採れり。

藤原宮御宇天皇

〔解釋〕持統天皇文武天皇二代の御代のことなり。こゝにては持統天皇の御代のことなり。今より千二百十餘年前なり。

天皇御製歌

〔解釋〕持統天皇の御歌なり。

春過而夏來良之。白妙能衣乾有。天之香來山。

〔解釋〕天之香來山、天香具山のことなり、先の三山の歌にいへり。

〔語釋〕來良之、來たらしい、なつたらしい、なり。●白妙能、白き布の、なり。多くは衣といひ出す爲の枕詞とすれど、こゝにては實の白き布なり。●乾有、衣が干してある、なり。

〔歌意〕春がすぎて、もう夏になつたらしい。それは、今、天香具山を望むと、あそこに白布の衣がほしてある。これによりて見ると、時はまだ春なりと思ひの外、既に夏になつたと見えるよ。

〔附記〕小倉百人一首には、定家卿、この歌を、春すぎて夏來にけらし白妙の衣ほすてふ天香具山、と改めて入れたり。にけらしはよし。ほすてふにては原の意全く聞こえず。餘計なことをしたるものなり。

柿本朝臣人麿過近江荒都作歌

〔文字〕作歌の上に時の字落ちたり。

〔解釋〕近江荒都は天智天皇の大津の皇居の趾をいふなり。此時既に荒廢してあとかたもなかりしと見えたり。

玉手次畝火之山乃、橿原乃日知之御世從、阿禮座師神之書、樛木乃彌繼嗣爾、天下所知食之乎、天爾滿倭乎置而青丹吉平山乎越、何方御念食可、天離夷者雖有、石走淡海國乃、樂浪乃大津宮爾、天下所知食兼、天皇之神之御言能、大宮者此間等雖聞、大殿者此間等雖云、春草之茂生有、霞立春日之霧流、百磯城之大宮處見者悲毛。

反歌

樂浪之思賀乃辛崎、雖幸有、大宮人之船麻知兼津。

左散難彌乃志我能大和太與杼、六友、昔人二亦母相目八毛。

〔文字〕神之書は神之盡の誤なり。本歌には割注數箇所あり。是はその上の句、他の傳へにはかくありといふ意なり。第三、第四、第五の注などは本文よりも勝れり。

〔訓讀〕石走、イハバシルと訓むをよしとす。

〔語釋〕玉手次、畝火にそふ枕詞。●橿原、畝火山の下に在り。●日知之御世、聖代の字をあて度く思はる。されど、それは漢文にひかれたる考にて、正しく、日本風にいはんにはやはり日知りの御代なり、天照大神日の神として太陽を支配したまふ、これより天照大神の御子孫を日知の命と申す、こゝにては神武天皇を指し奉るといふ。誠に然るべし。●從、テニヲハにてよりに同じ。又、用ともいふ。古語なり。萬葉以後には見えず。●阿禮座師、アレは生れの古言なり。生れましゝ、といふことなり。●神之盡、神の盡く、盡くの神、といふことなり。古きいひかたなり。●樛木、いやつぎ〳〵に添ひたる枕詞なり。つがの葉はつぎ〳〵になりをるより、いひ出でたるなり。●彌繼、嗣爾、ツギ〳〵は御子孫代々繼々になり、イヤはつぎ〳〵の意をつよむる丈の副詞。●天爾滿、大和に添ふ枕詞。普通にはソラミツといひて、ソラニミツといはず。割注に虛見とある方まさるべし。●倭、大和の國のことなり。●置而、後にのこしおきて、なり。●青丹吉、奈良に添ふ枕詞。●平山、奈良山なり。●何方、如何樣に、何と、なり。●御念食可、おもほしめせばか、といふことなり、それをばを省きて、おもほしめせか、といふなり。何とお思ひなさる

からなのか、といふことなり。是にては、現在のことゝなる。然るに、こゝにては過去のことをいふべき場合なれば、これは適せず。割注のおもほしけめか、の方、おぼしめしたのであらうか、といふことにて、此處には適へり。●天離、ひなにそふ枕詞。天遠く放る(遠ざかる)ひなと續くなり。●夷者雖有、『古義』にはまづひなといふ語は一般に信ずるが如く邊鄙なる處、田舍、などの義にはあらで、播磨四國以西の地方、並に越中地方をのみいふ語なりと說き、さて、此處は、さやうなる邊鄙なる地方にはあらねど、とせざるべからず、と說けり。ひなの說の當否は別問題として、こゝはあらねどとある方適ふべきか。●石走、近江に添ふ枕詞、●樂浪乃、大津、志賀、等に添ふ枕詞。●所知食兼、知ろしめしけるといふときは餘りに確定せることゝなりすぐる故に仄めかしてけんといひたるなり、けんは過去のことを推量する意の語なるが、亦、かやうに漠然といふ場合にも常にいふ。●神之御言、神の命なり、天皇のことを尊びて敬語をそへたるまでなり。●春草之云々、春草の繁く生ひたるのか、春草が餘りに多く繁りたる爲に、御殿のかくれて見えぬなるか、なり。●霞立春日之云々、霞立は春日の目前の有樣をいへるもの。霧れるは、古き語にて、霞めると同し意義の語なり。霞マ、霞ミ、霞ム、霞メ、と活用する動詞より

カスミといふ名詞が出來たると同じく、古くは霧ラ、霧リ、霧ル、霧レ、と活用する動詞ありて、これよりキリといふ名詞が出來たるなり。而して、今は春立つ水蒸氣を霞といひ、秋立つ水蒸氣を霧といへど、昔はさる嚴重なる區別はなかりしが如し。されば、同じ時候に霞むとも霧るともいひしが如し。さて、此處のキレルはこのキルの變化したるものなり、卽ち、霞むの霞めるとなり、降るの降れるとなり、讀むの讀めるとなり、遊ぶの遊べるとなるが如く、霧るの霧れると活用したるものなり、卽ち、此處の意義は、霞める春の日が霧(卽ち、霞)立ちて、夫で御殿が見えぬなるか、といふことなり。上の句にも下の句にもかの字なければ、そへて聞くべし。春草之の之、春日之の之共に歟。の誤ならんといふ說あり。然るべし。割注には、此の二句を「霞立つ春日か霧れる、夏草か繁くなりぬる、」とせり。春日かのか、夏草かのか、皆疑のかなり。霞立つ春日が霞んでゐるのか、又は夏草が繁くなつたのか、といへり。この方、景物の取り方、句の作り方、ともにまされり。●百磯城之、大宮に添ふ枕詞。●悲毛、毛は感動詞、悲しや、なり。●雖幸有、丈夫でゐるけれど、昔のまゝで變りなくしてゐるけれど、なり。●大宮人、朝廷の人々のこと、大津宮の盛なりし頃は此等の人々、此邊にて盛に船遊などせしなるべし。●麻知兼津待

ちかねたり、待ちても待ち得ず、なり。つは強めていひたる丈のものなり。●和太湖海の灣入して水の静止せる處をいふ。●與杼六友、淀むとも、なり。昔のまに静かに、浪立たず、大宮人の來り遊ばんを待つとも、といふ意なり。●昔人、大宮人をさしていふ。●亦母、復も、再び、なり。●相目八毛、遇はんやも、なり。やもは反語のテニヲハなり。遇はんや、遇ふまじ、なり。

〔歌意〕畝火の山の橿原の御代、(即ち、神武天皇)より以來、お生れ遊ばしたる天皇の、代々、大和國に於て天下を御支配遊ばし來りしものを、天智天皇はいか樣に思召しけるにか、その大和國を後にして、奈良山を越えて、夷ではあるが(又は、夷ではないが)、近江の國の大津の宮に移りたまひて、此處にて天下を御支配遊ばした、その天皇(即ち、天智天皇)の大宮はこゝなりと聞けど、大殿は此の邊なりといへど、今我が來りて見れば、春草が茂りて爲に見えざるなるか、春日が霞みて爲に見えざるなるか、さしも壯麗なりし宮殿の殘れるものは一つもなくて、あはれ、昔のあとを見れば悲しきかなや。

志賀の辛崎は昔のまゝに無事にあれども、大宮人の遊びに來給はんを待ちうることと到底出來ず。

志賀の大和田、静にして待ち居ても、昔の人に再び遇はんことの出來ようか、出來じ。

〔句法〕何方御念食可の句は本來天下所知食之乎の下に入るべきなり。習慣により て、今は、今のまゝにて甚しき不都合を感せねど、正しくは上に移るべきものなり。

●倭乎置而、青丹吉平山乎越、と上にいふからには、樂浪の大津宮爾の下に天降り、いましいてとか、移りたまひてとか、やうにいはざるべからず、然るに、然いはで、上よりの文脈は忘れたるさまにて、直ちに天下所知食兼天皇之と續けたるは、文脈の混合したるものにて、不可なり。この句法古來の長歌に多し。一種の句法と見得れども、これは病的の句法なり、習ふべからず。

〔附記〕この歌は高潔壯嚴なるものとして古來有名なり。

幸于吉野宮之時、柿本朝臣人麿作歌

安見知之吾大王、神長柄神佐備世須登、芳野川多藝津河内爾、高殿乎高知座而、上立國見乎爲波、疊有青垣山、山神乃奉御調等、春部者花挿頭持、秋立者黄葉頭刺理、遊副川之神母、大御食爾仕奉等、上瀬

爾鵜川乎立、下瀬爾小網刺渡、山河母依氏奉流、神乃御代鴨。

反歌

山川毛因而奉流、神柄、多藝津河内爾、船出爲加母。

〔解釋〕安見知之、又、八隅知之とも書く、吾大王に添ふ枕詞。●神長柄、神ながら、神隨、なり。神にて入らせらるゝまゝに、神にて入らせられながら、神として、などの意なり。又、單にその類の漠然たる意味をいひそへたるまでのものと見てもよし。●神佐備世須登、神さびなさるとて、なり。神さびは神たる所行をすると、神樣然たる行爲をすると、神々しき振舞をすると、なり。さらば、如何なる行爲が神さぶる行爲ぞといふに、これ〳〵の行爲が神さぶる行爲なりと、一寸、辯じ難し。されば、この、神ながら神さびせすと、の一句は形式のみにて、內容なきものなりと見ても、さしつかへなし。たゞ何となく、さやうなる類の意をいひそへをるものと見ておきてよろし。●多藝津河內爾、瀧つ河の內に、といふとなり。タキツは水の激し流るゝさま、または、水のにえかへるさまをいふ動詞なり、湯に沸えたぎるといふ、そのたぎると同語なり。されば、こゝにては吉野川の激流の取りまけるところ、

といふことになるなり。●高殿、高き御殿なり。●高知座面、高く知りますとなり。高くは、こゝにては、たゞ尊稱、美稱などいふ類の語にて、別に高低の高の意味あるにあらず。所に依りては、高の代りに太をつかひて、ふとしりましてなどもいへり。知りますは御承知なさるが本の義なるが、此處にては直ちにお造らせなさつてと意譯する方、理解し易からん。●上立、その御殿に上り立ちて、なり。●國見乎爲波、先に既にいへり。茲にては、あちこちを御眺望なさると、位に見るべし。すればにては敬語にならず。何とかいひかたをかへざれば、不可なり。●疊有、疊まり重つてゐる、なり。●青垣山、山の名にあらず。樹木の青々と繁りたる山々が、此の御殿の垣であるかの如くに、御殿の周圍をとりまきをるところより、その山々を總稱して青垣山といひたるなり。●山神、その山の神なり。●御調、御貢物、御供物、獻上物、なり。天皇の此の離宮にお出でありたるに依りて、山神が獻上物をするなり。●等、として、なり、御供物として、なり。勿論、人麿の見立なり。●春部、春のことなり。春頃、ぐらゐの意なり。べは範圍をひろくいふ爲にそふる接尾語なり。●花挿頭持、山に種々の花の咲くを、山神が頭上高く捧げ持ち來て奉ると見立てたるなり。●秋立者、秋になると、なり。●黃葉、モミヂなり。

黄色になりたるをいふと見ず、廣く紅葉せるものをいふと見てよからん。●頭刺理、かざすをつよくいひたるいひ方なり。こゝは割注に加射之とある、そのいひかたの方、適せり。●遊副川、これは川の名なり。御殿の近所にある川なり。●神母川の神も、也。●大御食、大は美稱、みは尊稱、けは食饌、たべもの、天皇のめし上る御膳といふことなり。●仕奉等、お仕へ申すとて、なり。めし上るべきお肴等をお供へ申すとて、なり。是も無論人麿の見立なり。●鵜川、鵜をして魚を捕らしむる方法をいふ。●立、その方法を以て魚を捕るを立つといふなり。●小網、今もいふさでなり。●刺渡、さでをおきて之に魚を追ひ入れなどして捕るをさしわたすといふべし。●上つ瀨、下つ瀨、とわけていひたるは、たゞ對句を作る便によりたるまでなり。上つ瀨にて云々、下つ瀨にて云々、と限りたるにはあらず。●春くれば梢に花さき秋立てば木の葉の紅葉する自然の顯象をも山の神の心を込めたる故意の所行と見、漁夫等の鵜川を立てゝ魚を捕ふる無風流なる所行をも川の神の貢物を奉らんとする誠意の行爲と見る、凡てその見立方の壯快にして活動あり、且つ、熱誠のこもれるところ、是人麿の獨得のところなり。注意して味ひ見るべし。●此次に、かの如くにして、などの語を含めて、聞くべし。山川

母、山の神も川の神も、なり。近邊の人民どもは擧げていふまでもなきなり。含めて聞くべし。●依氏奉流、賴り來り、なつき來りて、仕へ奉る、なり。●神、持統天皇をさしていふ。●鴨、かなに同じ、歎美していへる感動詞なり。

〔歌意〕天皇が芳野の離宮に御出かけになつて、高殿にお上りになつて四方を御眺望になると、周圍に重なりあつてゐる山々の神どもは、何がなして天皇の御心をなぐさめ奉らんものとて、春は花をさし上げて來り、秋は紅葉をさし上げて來る。すると、遊副川の神も我も劣らじと、天皇の御膳の料にもとて、川の上の方にも下の方にも鵜川を立てさでを渡しなどして魚を取りて奉る。あゝ我君の御代は此の如く山の神河の神までも力の限り仕へ奉る難有き貴き御代にてあるよ。山の神も川の神もより來つて仕へ奉る此の離宮に於て、天皇はまた船を出して侍人どもと遊びたまふよ。

なほ、之をいひかふれば

天皇がこの芳野の離宮に御出かけになつて、御殿よりあちらこちらと御覽になると、周圍の山々には春は花さき秋は紅葉かゞやき、遊副川にては、漁夫ども鵜を以て魚をとりをるのが見えて、四時朝暮の眺めが誠におもしろい。かやうなお

もしろい眺めを、お伴して、ともに眺めうるこの太平の御代は誠に貴く有り難いことである。

〔句法〕この長歌も、句法よく整ひたり。左に圖にして示す。

やすみしし吾が大君の神ながら神さびせすと、
吉野川たぎつ河内に高殿を高知りまして上り立ち國見なすれば、
たゝなはる青垣山、
山つ祇のまつるみづきと、
春べは花かざし持ち、
秋立てば紅葉かざし、
遊副川の神も
大御食に仕へ奉ると、
上つ瀬に鵜川を立て、
下つ瀬にさでさしわたし、
山川もよりて仕ふる神の御代から。

〔遊副川の神も〕字數足らず。脱語あるべきか。

反歌の句法はわろし。神長柄の句は下の船出爲加母の上に移して聞くべし。

初二句は多藝津河内に添へる添詞句なりと知るべし。この句法、習ふべからず。

藤原宮之役民作歌

〔文字〕萬葉集古義には藤原宮の上に營の字を補ひて、營藤原宮之役民作歌と訓みたれど、然か改むるにも及ぶまじ。

〔解釋〕藤原宮は持統天皇の朱鳥八年に新に造らせ給ひて、明日香宮より遷らせ給ひし宮なり。所は藤原の地にして、今の大和國高市郡鴨公村なり。東に香具山あり、北に耳梨山あり、西に畝火山あり。

八隅知之吾大王、高照日之皇子、荒妙乃藤原我宇倍爾、食國乎賣之賜牟登、都宮者高所知武等、神長柄所念奈戸二、天地毛縁而有許曾、磐走淡海乃國之、衣手能田上山之、眞木佐苦檜乃嬬手乎、物乃布能八十氏河爾、玉藻成浮倍流禮、其乎取登散和久御民毛、家忘身毛多奈不知、鴨自物水爾浮居而、吾作日之御門爾、不知國依巨勢道從、我國者常世爾成牟、圖負留神龜毛、新代登泉乃河爾、持越流眞水乃都麻手乎、百不足五十日太爾作、泝須良牟、伊蘇波久見者、神隨爾有之。

〔訓讀〕都宮者オホミヤハと訓む說あり。いづれにてもよし。●磐走、イハバシルと訓む方よし。●身毛多奈不知、ミモタナシラニと訓む說あり。いづれにてもよし。

〔語釋〕八隅知之、下の大王にそふ枕詞、天下を御支配遊ばす、とやうの意の語。●吾大王、こゝにては持統天皇をさして申す。●高照、高き大空にて照り輝くの意。日の修飾語。●日之皇子、天照大神の御子孫といふこと。こゝにては持統天皇をさして申す。●荒妙乃、藤原にそふ枕詞。藤の纖維を取りて荒妙(荒き布)を織るよりそへていふ例となりたり。●宇倍、廣き場所をいふ。●食國、御支配遊ばす國といふこと、日本國をさしていふ。●賣之賜、治め給ふ、なり。●都宮、御殿のこと。●者乎(テバ)者の乎を略きたるこゝろもち。●高所知武、高く立派に御建てなさらんとの意。●神長柄、神にて入らせらるゝまゝに、といふこと。されど、この語、用例を見るに、いつも殆んど無意味なり。●所念奈戸二、おぼしめすまゝに、おぼしめしたところを、などの意の語。●天地毛、天神地祇もの意。●緣而有、贊成して、助力する、の意。●有許曾、あればこそ云々の意。●磐走、近江にそふ枕詞。●衣手之、田上山にそふ枕詞。●眞木佐苦、檜(ヒの木)にそふ枕詞。檜は鋸にて挽かず、割りさきてつかふが常なれば、檜(ヒ)にそへていひならはしたるなり。マは文法上にて接頭語といひ、たゞ木にそへたるまでのもの、意義なし。●嬬手、材木のこと、木の端に取手などつきをる材木のこと。●物乃布能、八十氏にそふ枕詞。●八十氏河、宇治川といふべきを、語を飾りて、八十氏と聞かるゝやうにし、なほ、其八十氏に物乃布能といふ枕詞をもそへて、モノヽフノヤソウヂガハといひたるなり。●玉藻成、玉は藻にそへたる美稱(ホメコトバ)。丸きといふ意味にてはなし。成はノ如クといふこと。●浮倍流禮、材木を浮べ流したれば、といふこと、ナガセレの下にバをそへてきくべし。これは萬葉集中にて一種の格なり。●其乎取登、その流してよこす材木をとるとて、なり。●御民、たゞの民なり、此役に仕はるゝ民をいふなり。●身毛多奈不知、自分の身體のことを全く忘れて、の意。多奈は、殆んど、全く、只管、などの意の副詞。●鴨自物、鴨のなすが如く、の意。自物といふ語は鵜自物、鹿(シシ)自物、鳥(トリ)自物などいふときは、鵜のなすが如く、鹿のなすが如く、鳥のなすが如く、と解して、意義よく當れど、男(ヲトコ)自物などいふときは、男のなすが如くと解してはやゝおちつかず。今の語にていへば、鴨的に、鵜的に、鹿的に、男的になどいふべきものか。●日之御門、御所をいふ。●不知國依巨勢道從、シラヌ國ヨリ、コセヂ

知ラヌ國ヨリ、コセヂヨリ、の方をとる時は、五七調破れて七五調となりて、おもしろからず。知ラヌ國、ヨリコセヂの をとる時は、このことなし。さて、この方をとる時は、この句は、「知ラヌ國寄り來」といふ語句と「巨勢路ヨリ」といふ語句との懸詞法にて續きたるものなりと見るなり。而してこの場合には、上の「日之御門」を「我が國」「本朝」などの意にもとることとせざるべからず即ち、「名も知らぬ外國も我が國の德化を慕ひて依り來る」といふ意の語句を、巨勢といふ地名にいひ續けたるものと見るなり

ヨリ、と切りて讀む。(知ラヌ國、ヨリコセヂ、ヨリ、と切りて讀む說あれど、とらず。)知らぬ國(卽ち、他國)よりも巨勢路よりも、といふこと。巨勢は藤原の地より西南南葛城郡の東南の邊なり。●常世、永久榮えて衰ふることなき世の中、の意。●圖負留神龜、甲に圖ある龜、昔禹の代に出でたりといふ。めでたき世の祥瑞とせり。●新代登泉乃河、新な御代なりとて出づる、といふ文句を、懸詞にて泉河といふにつゞけたり。泉河は今の木津川なり。●持越流、運搬するなり。●眞木、マは美稱の語なり。上にいへる檜の木の材木をいふなり。●百不足、百の數に足らぬ、といふこと。五十(イ)に添ふ枕詞。●五十日太、筏なり。●泝須、筏に作りて河上に漕ぎ上す、なり。●良牟、推量の意の助動詞。●伊蘇波久、一生懸命に勞動するところ、勤勞する有樣。●神隨爾有之、我が天皇が神にて御座しますが爲に天神地祇を始めとして人民までがかく我が身のことをば打ち忘れて大宮造營に勤勞するなるべし、との意。

〔歌意〕大要は「此度我が大君が、藤原の地に御殿を立派に御造らせにならんとせさせられたところが、これを天神も地祇も御賛成申し上げて、御助力申上ぐるところから、巨勢路よりもその他の地方よりも材木を運び來る中に、また、近江の國の田

上山の檜の木を伐り出だして、之を宇治川に流す。その流れ來る材木を、人民どもが河の中に待ち受けをりて、取りあつめて、筏に作りて上ぼして、御造營地の藤原に運ぶ。この勤勞するさまを見ると、全く我が大君の神に御座しますが故なるべしと仰がるゝよ、といふことなり。我國は常世(トコヨ)にならんといふことと、圖負へる神龜も新代として出づるといふこと、とは、御代を祝ふ爲の祝言にて、事實をいひたるにはあらず。

〔批評〕さて、大意は右の如くなるが、仔細に地理を考へ文脈(ブンミヤク)をたどりてゆくときは、此歌頗る解し難きものとなる。まづ、八隅知之……天地毛緣而有許曾、これまでは事明白なり。磐走淡海乃國……玉藻成浮流禮、田上山の材木を宇治川に流したれば、といふにて、これもまづ明白なり。其乎取登……水爾浮居而、人民どものする事がらは明白なるが、さて、これらをするは何處ぞ。宇治の邊か、伏見の邊か、又は、山崎の邊か。此處までの文にては、宇治川に沿へる處ならば何處にてもさしつかへなしと見えたり。吾作……巨勢道從、吾が造營する御殿に知らぬ地方より又巨勢路より材木を運び來るといふことゝ見えたり。語不足にて稍不明瞭なり。(知ラヌ國、ヨリコセヂヨリ、と切りて讀む方を採るときは、事態甚だ錯雜し

知ラヌ國、依リコセ、の方を採る時は、前に追記したるが如く、まづ、上の「日之御門」を「本朝」などの意にとりて、さて、此の句を「外國が我國を慕ひて依り來る」意にとらざるべからず。然るにこの「日之御門」はその上に「吾作」といふ語ありて、「御所」の意なること、動くべからず。さすれば、この二句は「吾が御造營申上る御所に外國が慕ひ依り來る」といふことになりて事理いかにもをかし。加之、下の巨勢路ヨリの語全く離れものになりて處分に窮す。されば、前後の續き方なほ考ふる時は、「知ラヌ國依リコセ」の方は採り難し、されども、亦、下の「我國ハ常世ニナラム圖負ヘル神龜モ新代トイヅ」といふ祝言を考ふるときは、こゝも外國の慕ひ依り來る。意を述べたるものと見たき心地す。是に由りて、こゝは、御門の音に「本朝」の意をよせ得るところより之を利用して、下も「巨勢路ヨリ知ラヌ國ヨリ」といふべきを、殊に顚倒して、こゝに「外國も依り來る」といふ意をよせたるものなりとも見ておかんか。何れにもせよ、語足らず句法亂れたれば、明には解し難し。

來る故に、とらず。）我國者常世爾成牟、祝言なり、事實に關係なし。圖負留……新代登イヅ、これも祝言なり、同じく、事實に關係なし、と見るべし。泉河爾持越流、泉河は木津川なり。木津川に何處より持越しゝなるか。運搬せし路は陸路か、水路か。持越すといふ語によりて見れば、陸路を運搬せしが如し。さらは、宇治川筋にて材木を陸揚せしは宇治の邊か。木津川に運搬し來りし處は木津の邊か。眞木乃都麻手乎……五十日太爾作、これは木津にてのことか。泉須良牟、木津にてのことか。さらば、木津よりいづこへ上すなるか。木津より上さんは甕原の宮御造營等にこそは適せめ、藤原宮の御造營には何等の詮（セン）もなかるべし。解すべからず。又、宇治より木津に運ばんには、宇治川を下して山崎に至り、夫より木津川を上りて木津に來らん方、便ならずやと、今ならば、思はるれど、昔は宇治にて取り上げ、さて陸路を木津に運ぶこと、例なりしにや。疑はし。

「代匠記」には田上より宇治に流し、宇治より淀に流し、淀より泉川を上す、といひ、「考」には宇治にて筏に作り、淀より泉川を泝らせて、藤原へいたらすといへり。本居宣長說には、田上山より伐出したる材木を宇治川を流し下して、これを宇治の邊にて取り上げ陸路を木津まで運搬し、こゝにて筏に作り、木津川を漕ぎ下して、大阪灣に出で、南して、紀州に至り、吉野川を泝りて五條邊の適當なる地にて陸揚し、夫より巨勢路にかゝりて藤原の地に運搬せしものならん。この歌の作者は、吾作日之御門ともいひ、泝須良牟ともいへれば、自からは藤原の御造營の地にありて材木を流し下すところ、泝すところ等は見ず車などにて曳き來りたるところを見てよめるものならんといへり。されど、この說如何あらん。假りにこれに從ふとすれば、この文、五十日太爾使の下に「泉河ヲ下シテ難波ノ海ニ出デ南シテ紀ノ川ニ入リ、紀ノ川ヲ泝須良牟」とやうに數多の語を補はでは、意聞こゆべからず。又、假りに、かくの如き路を取りたりとせんに、さらば何の必要ありて、宇治より木津へは運搬したるぞ。此の如き手數をかけずとも、宇治をまつすぐに下して難波の海に出でたらば、如何に。況んや、この水路迂回甚しきをや。かく考へ來れば、この歌は事理頗る解すべからざるものとなるべし。依りて、考ふるに、此の歌の作者は藤原の地にありて、皇居御造營の爲に諸地方より（巨勢路よりも他の知らぬ地方よりも）盛に材木を運搬し來るを目擊しつゝ、さて、近江の國田上山より切り出して運び來る材木の途中の有樣をば想像して詠みたるものなるべし。勿論、材木は田上山より宇治川を下し、八幡山崎邊にて、とりあつめ

木津より佐保までは僅に二里ばかり路は極めて易し。佐保より佐保川を下りて吐田に來りここより寺川又は初瀬川を上りて櫻井近傍まで來ること、水流の有樣今のやうにては到底叶ひ難きことならんが、當時は水量多くて、この水路を利用せしこと常のことなりきと見えたり。そは、藤原の都に住みし者の初瀬川を下り佐保川を上りて奈良に至りたること、この卷の末に在る長歌に見え、又、吉備(志賀)津采女の遺骸を近江へ送り返すに、初瀬川か寺川かによりたりと思ぼしきこと第二卷の末にある人麿の歌によりて

て筏に作り、夫より木津川を上りて、木津に來り、こゝにて陸揚して、奈良坂を越えて佐保に來り、佐保より佐保川を下りて寺川を上りて藤原に運搬し來りたるものなるべけれども、委しきことは目擊せざれば、もとより知らず、又、地理なども十分には知らで、たゞその役民等について聞きえたるところをもととして、夫れに己が想像を加へ祝言をもそへて大凡に連ねいひたるものなるべし。

かく解釋するを最も當をえたるものとすべし。然るに、『古義』には「此の歌巧のことに深く、句法のいともたへなるなど、人麻呂の朝臣の長歌の口風にをさ〳〵立おくれたるすぢなきを思へば、役民の意に擬へて、さばかり上手の作なるべし。さてこそ訓のつゞきのこよなくまぎらはしくきこゆるふしの多かるをよくあぢはふれば、意味明白にして、まぎるゝすぢなく、いともすぐれてめでたき歌になんありける」と歎美せり。曲庇といふべし。思ふに、この歌の萬葉集中にて特に有名なるは句法の妙なる等の爲にはあらで、全く作者の役民といふがめづらしければなるべし。餘の人なりせばかく名高くはならざらまし。

藤原宮御井歌

〔解釋〕藤原の宮の傍によき井あり、之を歎美してよみたるものなり。

知られたればなり。されば、この時の田上よりの材木も必ず右の如くにして藤原に運搬せしに相違なしと思はる。

さて、批評中にいへる「途中」は何處ぞと考へ見るに、材木を八幡邊にて取集めて、そこにて筏に組みたりとすれば、そは八幡邊なりと見るを至當とすべく、「持越す」を陸上を運搬することと見る時は、材木は宇治にて取集め、木津まで陸路を運び來り更に夫より佐保まで運ひ來り、佐保にて筏に作りて宮地へ上すと見て、そを佐保の邊なりと見るも可なるべし。尙ほ、佐保川につきて見れば、

八隅知之和期大王、高照日之皇子、麗妙乃藤井我原爾、大御門始賜而、埴安乃堤上爾、在立之見之賜者、日本乃青香具山者、日經乃大御門爾、春山路之美佐備立有。畝火乃此美豆山者、日緯能大御門爾、彌豆山跡山佐備伊座。耳高之青菅山者、背友乃大御門爾、宜名倍神佐備立有。名細吉野乃山者、影友乃大御門從、雲居爾曾遠久有家留。高知也天之御蔭、天知也日御影乃、水許曾波常爾有米、御井之清水。

短歌

藤原之大宮都加倍安禮衝哉處女之友者之吉召賀聞。

〔文字〕春山路は青山跡の誤。●耳高之は耳無之の誤。●日御影は日之御影の誤。●常爾有米、常磐爾有米の誤なりといふ說あり。いづれにても可ならん。●之吉召は乏吉呂の誤なりといふ說あり。然るべし。從ふべし。

〔訓讀〕春山路、青山跡と改め、アヲヤマトと訓む。●緯、ヨコと訓む說あり。いづれにても可ならん。●神佐備、カンサビと訓むが例なり。●常爾有米、常磐爾有米と改めば、トキハニアラメと訓むべし。●安禮衝、アレツクヤと訓む說あり。從ふ

下すといふべきなれど、宮地へ運ぶなれば、上すといふて差支なし。又、此の歌、少しく無理なるを忍べば、強ひて藤原に居て途中の様を想像して詠みたるものとせずして、八幡邊又は佐保邊に居て目前の様を詠みたるものと解することをも得べし

べし。●之吉召、乏吉呂と改めて、トモシキロと訓む説あり。之に従ふべし。

〔語釋〕八隅知之、大王にそふ枕詞。●和期大王、我が大君、なり。ワガオと音續くよりガのゴに轉じたるまでなり。●高照日之皇子、天照大神の御子孫といふこと、即ち、天皇のこと。委しくは前にいへり。●麁妙乃、藤にそふ枕詞。このことも既に前にいへり。●藤井我原、藤原の内の地名なるべし。そこに井ありしにより て然か呼びしなるべし。●大御門始賜、御殿を御新築遊ばして、なり。●埴安、有名なる埴安の池なり。香具山の北麓にありしなり。●在立之、アリには殆んど意味なし。文法上接頭語と見るべし。タヽシはお立ち遊ばして、なり。●見之賜者、御覽になれば、なり。●日本乃、字は日本のと書けれど、無論大和の、なり。●青香具山、樹木茂りて青々とせるによりて、青き香具山といへるなり。●日經、東西を日ノタテといひ、南北を日ノヨコといふ。こゝにては東方をいふ。●大御門、御門のこと。●青山跡、青々としたる山として、青々としたる山となつて、なり。●之美佐備立有、之美は繁みなり。佐備は文法上にていふ接尾語にて今の語にはいひかふべき適當なるものなし。繁茂して立つてゐるといふことなり。●此美豆山、此は木ノ、なり。美豆はみづ〳〵しき、稚々しき、つや〳〵したる、いきいきしたる、なり。木のうるはしく青々としたる山といふなり。●日緯、實は南北のことなれど、こゝにては西方のことにいひたり。西方は正しくは日の經といふべきなるが、さいひては前のと重複になる故に、他語を借りてかくはいひたるなり。●彌豆山、上の美豆山と同じ。●山佐備伊座、山然として坐つてゐる、とも譯すべきか。チャントしてゐるなどいふ方、寧ろ適すべきか。●青菅山、青は青々としたる、なり。菅は借字にて清々しき意なり。木々の青々と茂りて打ち見たるところのすが〳〵しく、せい〳〵としたる故に、かくいひたるなるべし。●背友、背津面なり、北方のことなり。山の陽をカゲトモといひ、山の陰をソトモといふなり。●宜名倍、宜し並べ、なり。よろしく足りとゝのひて、なり。●神佐備立有、神樣然として立つてゐる、神々しく立つてゐる、なり。●名細、クハシはよき、うるはしき、立派なる、等の意味の語なり。名クハシは名のうるはしき、なり。こゝにては名高き、有名なる、などの意にとりて可なるべし。●影友、影津面なり、南方のことなり。●從、ヨリなり、より眺むると、の意なり。●雲居、雲の居るあたりといふことにて、大空のことなり。●高知也、高き所に於て知ろしめす、なり。こゝには、高き所に在る、位の意に見ておきて、よし。下の天にそひたる修飾語なり。

也は感動詞なり。口合ひのヤともいふ、意味なし。●天之御蔭、掩ひかくして天の蔭となるもの、卽ち、こゝにては天皇の御殿のことなり。●天知也、天を知ろしめす、なり。下の日にそひたる修飾語なり。也は感動詞。●日之御影、日の御蔭なり、掩ひかくして太陽の蔭となるもの、卽ち、こゝにては天皇の御殿をいふなり。以上の二句は語をかへたるのみにて、同じく天皇の御殿をいへるなり。●水、御殿の井の水なり。●許曾、波、二つともテニヲハなり。●常爾有米、永久かるゝなどのことなかるべし、なり。●御井之清水、この御井の眞清水よ、といふことなり。●藤原之大宮都加倍、藤原の大宮を御造營申し上げて、なり。●安禮衝哉、お仕へ申す、なり。哉は口合のヤともいふ、感動詞にて、意味なし。●處女之友、女官の連中、なり。●乏吉呂賀聞、乏しきは類少き、珍らしき、結構なる、夫より轉じて、羨ましき、等の意の語なり。こゝにては羨ましき、なり。呂は是ヲ見ロ、彼ヲシロ、などのロと同じく感動詞にて、意味なし。賀聞はカナと同義なる感動詞なり。

〔歌意〕持統天皇が藤井の原に御殿を御造らせになりて、埴安の池の堤に、お立ち遊ばして、四方を御覽になると、まづ、天の香具山は東の御門の方に青々として立ちてをり、畝火山は西の御門の方に青々として坐つてをり、耳梨山は北の御門の方に

ちゃんとしてをり、吉野の山は南の御門の方に遠く見えてゐる。此の如き眺望のよき御殿の水は永久かはることがあるまい。此の如き結構なる御殿に奉仕する女官連は、まことにうらやましき身分なるよと、まづ御殿をほめ、次に井戸をほめ、終りに、此處に奉仕する女官連の幸福をうらやみたるものなり。

〔句法〕この歌、句法甚だ嚴格なり。例に依りて圖にして示せば、次の如し。

入隅しし我大君
高光る日の御子、
荒妙の藤井が原に　大御門始め給ひて、
埴安の堤の上に　ありたゝしめし給へば、
大和の青香具山は　日のたての大御門に　青山としみさび立てり、
畝火の木のみづ山は　日のよこの大御門に　みづ山とやまさびいます、
耳梨の青すが山は　そともの大御門に　よろしなべ神さびたてり、
なぐはし吉野の山は　かげともの大御門に　雲居にぞ遠くありける。
高知るや天の御蔭
天知るや日の御蔭の水こそは　とこしへならめ。
御井の眞清水。

大寶元年辛丑秋九月太上天皇幸于紀伊國時歌

〔文子〕大寶元年辛丑秋九月の九字は誤つて入りしもの、紀伊國は吉野宮の誤なるべきこと、『古義』にいへり。從ふべし。

〔解釋〕こゝに太上天皇といへるは持統天皇の御事なり。天皇は十一年に御位を文武天皇に讓りたまひ、それより太上天皇とたゝへられたまへりしなり。

巨勢山乃列列椿、都良都良爾見乍思奈、許湍乃春野乎。

右一首坂門人足

〔訓讀〕思奈、シヌバナと訓むべし。

〔場合〕太上天皇の吉野宮に行幸ありし時に、御車駕の御伴せし坂門人足が巨勢を通りし時に詠みしものなり。時節は春にして、巨勢山には椿咲きたりしなるべし。

〔語釋〕巨勢は今の高市郡の西部、巨勢山はその南に在りて南葛城郡吉野郡にも誇る。●列列椿、つらをなして、連なつて、咲いてゐる椿といふこと。●都良都良爾、熟々なり、よく、なり、十分に、なり。●見乍、見つゝ、見ながら、なり。●思奈、歎賞せん、なり。ナは意味をつよくいふ感動詞。

〔歌意〕巨勢の春野は非常によき眺望のところなる故、この野を十分に眺めて歎賞して行かん、となり。「巨勢山のつら〳〵椿」は時の景物なる故に引き出したるには相違なけれど、句法の上より見れば、たゞ「つら〳〵、に」のツラツラといふ音を引き出す爲の語句にて、所謂序詞(序歌ともいふ)なり。されば、ツラ〳〵といふ音を引き出せば、この句の用は既に濟みたるにて、以下の語句に對しては全く不用のものなり。

〔批評〕この歌、さしてよき歌といふにはあらねど、巨勢山のツラツラ椿ツラツラニと續きたるが、めづらしく、おもしろくて、後世の歌にも屢々引用せらるゝ故に、殊に擧げたるなり。

二年壬寅、太上天皇幸于參河國時歌

引馬野爾保布榛原、入亂衣爾保波勢、多鼻能知師爾。

右一首長忌寸奥麿

〔訓讀〕榛原、ハリ。ハラと訓む方よろしといふ說あり。

〔語釋〕引馬野、今の遠江の濱松のあたりなり。●爾保布、咲き匂つてゐる、なり。●榛原、萩のさいてゐる原なり。榛は普通にいふハンノ木なり。こゝにてはハンノ木にては適はず。依つて舊說のまゝハギと見ておく。●入亂、入り亂れに同じ。(亂りは四段活用、古格)。萩の咲いてゐる中に亂れ入りて、なり。●爾保波勢、ニホ

ハセヨなり、命令のいひかたなり。ニホハスはこゝにてはぼうッと染むること
なり。元來ニホフには二種あり。花などのよき香を出して香りゐる、これ一の
ニホフにて、普通にいふニホフは卽ちこれなり。いま一は霞、霧、又は、色彩、などの
ボウットシテキルをいふ。(色彩にてはボケテキルボカシテアルといふ。鎧の
縅の色に、紫裾濃といふのあるに對して、紫匂といふのあるをも考へ合はすべし)
こゝのニホフは後者なり。又、凡て花をとりて白き布にこすりつけて花の色汁
にて布を染むるを花ずりといひ、然して染めたる衣を花ずり衣といふ。こゝに
ては萩の花の咲ける中を歩きまはりて、衣の裾に花の色のつきて自然に衣の染
まるやうにせよ、といふなれば、こゝのニホフはボウット染マル、位に見ておくが
よかるべし。●多鼻能知師爾、旅の印に、旅に來た證據に、なり。

〔歌意〕今この引馬野に來て見るに、こゝに此の如くに花の咲き匂つてゐる萩の原が
ある。諸君、一つ、この萩の原にはひって、あちこち歩きまはって、旅に來た印に、萩
の花にて諸君の衣をぼうッと染めて行き給へよ。

〔場合〕持統太上天皇の參河國へ行幸ありし時に、從駕の者どもの引馬野邊まで遊び
に來し時に、長奥麿の同遊者に向つていひしものなるべし。

山上臣憶良在大唐時憶本鄕歌。

〔文字〕歌の上に作の字おちたり。作歌とあるべし。

去來子等、早日本邊。大伴乃御津乃濱松、待戀奴良武。

〔訓讀〕早日本邊、ハヤクヤマトヘと訓む說もあり。日本はヒノモトは不可、ヤマトと訓むをよしとす。
マトヘニと訓む說もあり。日本はヒノモトは不可、ヤマトと訓むをよしとす。
邊はへともへニとも訓むべし。されど、こゝをヤマトヘニといふことおもしろ
からず。ハヤモヤマトヘと訓むこと、句調大によけれど、ハヤモと訓まんには、字
は早毛又は早母とあるべきかとおもはる。ハヤクヤマトヘ、句調はよからざれ
ど、他に例もあれば、今はこれをよしとすべし。

〔語釋〕去來、イザ、サア〳〵、なり。人を誘ふ意、人をせき立つる意の感動詞なり。●子
等、目下の人々を親愛的にかくはいひたるなり。●早日本邊、早く本國のヤマト
(日本國)へ歸らん、なり。への下に歸らんといふ語を略したるなり。●大伴、大伴
鄕、今の大阪南區島の内の邊。●御津乃濱松、御津の濱にある松、なり。故鄕にゐ
る父母妻子故舊等をたとふ。御津の濱は上の大伴鄕の内の船つきの場所にて、
今の長堀、道頓堀邊なりといふ。●待戀奴良武、奴はナ、ニ、ヌ、ヌル、ヌレ、ネ、と活用す

る助動詞にて確定せる意をいひそふる語なり。副詞に譯して「必ず」「きっと」に當ることあり。良武、現在の有樣を推量する意の助動詞なり。

〔歌意〕サア〳〵諸君、早く日本へ歸らう。大伴の御津の濱松(故郷の者ども)がきっと我々の歸るのを待ちこがれてゐるであらうカラ。

大行天皇幸于吉野宮時歌。

〔語釋〕大行天皇、天皇崩じたまひて、いまだ御謚を奉らざる間、その天皇をさして大行天皇と申し奉る。

〔解釋〕大行天皇は此處にては文武天皇の御事なり。文武天皇の御事をこゝに殊に大行天皇といへるは、聊かいぶかしきやうに思はるゝならんが、これは、天皇の慶雲四年六月に崩じたまひて、その十一月に御謚を奉りたるなるが、そのいまだ御謚なかりし間に、時の人の然か端書して書き置きたりし歌を、そのまゝ此處に載せたるが爲に、かくは大行天皇といふ語の此處にあらはれたるなるべし。

宇治間山朝風寒之。旅爾師手衣應借妹毛有勿久爾。

右一首長屋王。

〔語釋〕宇治間山、大和吉野郡池田千俣村に在りといふ。●旅爾師手、旅に於て、なり。●衣應借、衣を貸してくれるべき、なり。昔は女の着物を男の借りて着しこと常にありしなり。●妹、妻、なり。●有勿久爾、普通にアラヌニの延びたるものなりといふ。又、常に譯してナイノニとし、且つ、意味は「……ナイノニ……」と他の文句に接續するものとす。されども、之をナイノニとのみ譯する時は、時々適當せざることあり。たゞナイとのみいひてはいまだ意味の不十分なる時、もつと意味を強くいひ、もしくは、餘情を含めていはんとする場合に、アラナクニといふ、と心得て、此處の如き場合には大方誤ることなし。

〔歌意〕宇治間山、われ今此の山の下あたりを、とほり來れば、朝風甚だ寒し。然かも、今我は旅にあることとて、風がかく寒いからとて、衣を貸してもらふ妻もなし。あゝ、いかにせん。困りたることかな。

萬葉集卷第二

相聞（シタシミウタ）（ソーモン）

〔解釋〕相聞、シタシミウタと訓む。親子、兄弟、姉妹、夫婦、朋友、君臣、男女の相思ふ情を抒べたる歌をすべていふ。古今集以下の歌集に見えたる戀歌と云ふものも、この內に入る。相聞といふ語は、もと、支那の語にて我が國の往來、贈答の文、などいふに當り、且つ、古本萬葉集にはサウモムと假字をつけたるがありといふ。さらば、是はシタシミウタと訓むよりも音にてソーモンと訓む方優るべし。

難波高津宮御宇天皇代（ナニハノタカツノミヤニアメノシタシロシメシスメラミコトノミヨ）

〔解釋〕仁德天皇の御代のことなり。今より千五百餘年乃至千六百年以前なり。

磐姫（イハノヒメノ）皇后思天皇（キサキノシヌビタマヒテスメラミコトヲモヒマセルミウタヨ）御作歌四首（ツ）

〔文字〕磐姫の二字、後人の書入なり、削るべし。四首は三首とあるべし。後人のさかしらなりといふ。俱に從ふべし。

〔解釋〕右にいふ四首は、卷頭の「君之行氣長成奴」の歌の、もと輕太郎女の御歌なるを、後人の過つて此處に注したるより、誤りて四となりたるなりといふ。之に從ふべし。

〔場合〕天皇の遠くいでまして久しく還りたまはぬを、待ちわびて、詠み出でたまひしものと見えたり。

如此許戀乍不有者、高山之磐根四卷手、死奈麻死物乎。（カクバカリコヒツツアラズハ、タカヤマノイハネシマキテ、シナマシモノヲ。）

〔語釋〕如此許、コレホドニ、コンナニ、なり。●戀乍不有者、こひつゝをらんよりは寧ろ、といふ意なり。不有者はアラズハと訓む、アランヨリハといふ意なり。このいひかた萬葉集には常なれど、古今集以後には見えず注意すべし。●磐根四卷手、磐を枕にして、なり。磐根は磐の根、たゞ磐といふとさしたる差なし。四は意味を強めていふ意のテニヲハなり、ぞなんこそと同樣の語なり。卷手、枕にすることと、枕にして寢ぬることにいふ。●死奈麻死物乎、死んでしまはうものを、なり。死奈麻死、死んでしまはう、なり、死なんことを欲す、と決意をあらはしたるいひかたなり。物乎、こゝにては、強き感情をあらはすいひかたと見ておくが最もよかるべし。反語の意をあらはすやうに見るは、適はず。

〔歌意〕こんなに我君を戀ひをらんよりは寧ろ山の磐でも枕にして死んでしまはう。こんなに君を戀ひて苦しむよりはのたれ死でもしてしまつた方がよほど

ました。

在管裳、君乎者將待。打靡吾黑髮爾霜乃置萬代日。

〔語釋〕在管裳、カウシテサテなり、此の如にしてゐて、なり。生き永らへて、の意に取るべき場合もあれど、こゝにては前の如き意にとる方、適へり。●打靡、ウチは所謂接頭語にて意なし。風に吹かれ、又は、起ち居につれてなびき動く、なり。下の黒髮の樣をいひたる語なり。●霜乃置萬代日、霜の、物の上にかゝること、結ぶことを、霜がおくといふ。即ち、我が黒髮の上に霜のかゝるまで、霜の結ぶまで、なり。さて、この霜は、實の霜をさしていはれたるなるか、又は、年老い白髮になる意をかくいひあらはされたるなるか、一考を要すべし。賀茂眞淵は白髮になる意と定めて、さて、さやうにいひなすことは上代の歌にはなし、古歌の樣を心得ぬものゝ書き誤れるものなり、とて、「吾黑髮の白くなるまでに」と直したり。これ適當なる議論なるか。一考を要す。黑髮に實の霜の結ぶことと見んとするには、皇后の御殿より外にいでたまひて、夜半過ぐるまで立ちつくして天皇の御還を待ち給ふやうなることを要すべし。在管裳は、語意漠然としてをるが故に、無論然る場合の樣を述べられたるものとも解釋し得れども、(左記の或本歌は初句居明して」

とありて、正にその意味、即ち「かやうに寒き夜、夜の更け行きて、我が黒髮に霜のおくをも意とせずして、屋外に立ちつくしつゝ、君をば待たん」の意になりをり。注意すべし)、また、一首の意を「いつまでも、かうやってゐて、君の御還をまたうよ」の意に解して、月日の多く經過する意とも解することを得。此の第二の意に解する時は、下の霜のおくは、無論實の霜のおくにはあらで、黑髮の白髮になることと解すべきなり。されば、霜は、語句の上にては、實の霜とも見られ、白髮になることとも見らる。眞淵說に從つて、當時はいまだ此の如き譬喩法はあらざりき、とすれば、「在管裳」を「月日を多く經過する」意にとる說は、自から消滅すべきものなり。

〔歌意〕句を一三四五二の順におきかへて見て、悟るべし。此の歌かくおきかへても聊かもかはることなし。

秋之田穗上爾霧相朝霞何時邊乃方二我戀將息。

〔語釋〕穗上、稻の穗の上なり、即ち田の上なり。●霧相、キリアフなり。霧のおりてゐることなり。霧るといふ語は素と水蒸氣の空に立ちてボーットしてゐる樣をいふ動詞なり。後には、春の場合にはカスムといひ、秋の場合には霧がオリルといふやうになりたれども、古くは春にも秋にもさる場合にはキルといひたるなり。

●朝霞、霞も霧と同樣に、古くは春秋の差別なかりしなり。こゝにては秋に霞といへり。●何時邊、不明の方角をさす語、いづれの方、といふことなり。●將息、消滅せん、なくならん、なり。

〔歌意〕秋の田の稻の上に下りあつてボーッとしてゐる朝霞、卽ち、秋の田の上に果もなくたちこめてゐる朝霧(こゝまでは、我が君を戀ふる思の我が胸を覆ふ樣の、秋の田の上に立ちこめたる霧の如くなるより、まづ、かくいひ出でゝ、思想の上の序(ジョ)としたり。)この朝霧はどの方面に於ても限がないやうであるが、我が戀は、どの方面に於て限があるであらうか、息む時、停止する時があるであらうか。我が戀も正しくかの霧と同樣に、到底限はあるまい、息む時はあるまい。

近江大津宮御宇天皇代(アフミノオホツノミヤニアメノシタシロシメシスメラミコトノミヨ)

〔解釋〕天智天皇の御代のことなり。今より千二百四十餘年前なり。

内大臣藤原卿娶采女安見兒時作歌一首(ウチノナホマヘツキミフヂハラノマヘツキミノエタルウネベ ヤスミコ トキニヨメルウタ ヒトツ)

〔解釋〕内大臣藤原卿は藤原鎌足のことなり。●采女は諸國郡の役人の姉妹子女の風采のよきものを擇んで奉り、宮中に奉仕せしむるその女をいふ。●安見兒、采女の名なり。

吾者毛也、安見兒得有。皆人乃、得難爾爲云、安見兒衣多利。(ワレハモヤ ヤスミコエタリ ミナヒトノ エガタニストフ ヤスミコエタリ)

〔語釋〕毛也、感動詞。先に第一卷にありし籠毛與のモヨと同じ。●得難爾爲云、えがたきことにしてゐるといふ、他人は得んとしてえられず、彼をえんことは難しと評判になりをるといふの意。當時、采女に對して亂なる行などあらんには、忽ちに重き罪に處せらるゝ定なりしかば、かくはとり沙汰せしものなるべし。

〔歌意〕我は世間の人の得難しと評判してゐる安見子をえたるぞや、えたるぞや。

〔批評〕鎌足公大得意の狀貌目の前に見えたり。終の句に第二の句をくりかへしたるが、一にはその喜の情の强きことをあらはし、一にはこの歌に活躍せる生氣を與へたり。此の句法、萬葉集中に少からず散見す。覺えおくべし。

藤原宮御宇天皇代(フヂハラノミヤニアメノシタシロシメシスメラミコトノミヨ)

〔解釋〕持統天皇、文武天皇の御代のことなり。今より千二百二十四年乃至千二百八年前なり。

大津皇子竊下於伊勢神宮上來時、大伯皇女御作歌(オホツノミコノシヌビテクダリテ ニノボリキマストキニ オホクノヒメミコノヨミマセルミウタ)

〔解釋〕大津皇子も大伯皇女も俱に天武天皇の御子にて、大伯皇女は御姉なり。大津皇子は幼き頃より才學あり、特に文筆に長じたまひて、我國に於て詩賦の興りしは

この皇子に始れりともいはれたまふほどなり。されば、幼かりし時より大に天智天皇に愛せられたまひ、天武天皇の十年よりは、この皇子をして朝政をさへ聽かしめたまひたりしほどなりき。然るに、禍つ神の禍事にて、新羅の僧の言に唆かされたまひて反を謀りたまひたりしが、事顯はれて、朱鳥元年十月に死を給はりたまひき。こゝに竊かに伊勢神宮に下りて云々とあるは、この志望の達せんことを神宮に祈願したまはんが爲め、且つは、當時齋宮にて伊勢におはしゝ御姉大伯皇女に委細をあかしたまひて、もし事成らざらん時は再び對面したまはんこともかなはざるべく、此の世の御別れなど豫て聞こえ上げおかせ給はんが爲に、下りたまひしものなるべし。皇女の御歌の特に悲しく聞こゆるは、委細を聞き知りたまひて、さて、皇子の御行末を覺束なみ悲しみたまへるに依るなるべし。

吾勢枯乎倭邊遣登佐夜深而鷄鳴露爾吾立所霑之。

〔語釋〕勢枯、もと女より兄、又は、夫を、親しみていふ語なるが、こゝにては弟皇子にいはれたり。●倭邊、倭の方へ、なり。●遣登、還しやるとて、なり。●鷄鳴露、曉におく露、なり。

〔歌意〕吾が弟の皇子を倭へ還しやるとて、吾が弟の皇子の倭の方へ還るのを見送るとて、夜の更るまで外に立ちてゐて、曉の露にぬれたるぞや。吾立所霑之は、我が立ちぬれしぞ、などいはん程の意なり。

二人行杼去過難寸秋山乎、如何君之獨越武。

〔訓讀〕如何、舊訓皆イカデカと訓みたれど、こゝはイカニカと讀みたき心地す。

〔語釋〕越武、コエナムはコエムといふ越の未來をいふ語に、已了の助辭のナニ、ヌ、ヌル、ヌレのナの加はりたるものなり。越の未來をつよく、心持を含めていひたるものなり。

〔歌意〕兄弟二人にて行きても、なほ寂しくして越えがたかるべき秋山を、如何なる樣にて、如何なる心持にて、弟皇子が獨りにて越え行かれるであらうぞ。定めて、寂しく、恐ろしく、悲しくあるならん。

大津皇子贈石川郎女御歌一首

〔解釋〕石川郎女、未詳。これは前條の事のありし時よりも久しき以前にありしことなるべし。

足日木乃山之四付二、妹待跡、吾立所沾。山之四附二。

〔語釋〕足日木乃、山にかゝる枕詞。●山之四付、山の木の葉よりおつる滴、露のことなり。

●妹、男より目下の女を親みてよぶ語。妻にもつかふ。●待跡、待つとて、なり。

〔歌意〕もう來るか來るかと思って、お前の來るのを待つとて、山路に出でゝ立って待って居たので、我は木の葉より落つる滴にぬれたるぞよ。

〔句法〕この歌も、先の内大臣藤原卿の歌と同じく、第五句に第二の句をくりかへしたり。かくて、感情をつよくいひあらはしたり。

石川郎女奉レ和歌一首

〔語釋〕奉和歌、奉る和歌の意にあらず、和は唱和、和韻などいふ和と同じく、先の詩歌をよめるに應じて此方のよむことなり。

吾乎待跡、君之沾計武、足日木能山之四附二成益物乎。

〔語釋〕吾、ワ、ワレに同じ。やさしく、先方を親しみて、あまえたるやうの心持にて、いふ時にいふ。●計武、過去のことを漠然といふ意の助辭。●成益物乎、なりたかりしものを、なり。物乎、こゝにても、先の死奈麻死物乎の物乎と同じく、たゞ感をつよくいひあらはしたるもの、なりたかつたことよナア、位のものに見ておきて、よかるべし。なりたかりしものをならずして、さて〳〵殘念なことをしたり、とまで見るには及ぶまじ。

〔歌意〕私をお待ち下さる爲にあなたのおぬれになったとかいふその山の滴に私はなりたう御座いましたこと！

〔批評〕以上二首、如何に、も調子のよき歌なり。

舍人皇子御歌一首

〔文字〕舍人皇子の下に贈舍人娘子の五文字おちたるか。

〔語釋〕舍人皇子は天武天皇の皇子にて、かの勅命を奉じて日本書紀を撰じたまひし有名なる舍人親王のことなり。

丈夫哉片戀將爲跡、嘆友、鬼乃益ト雄、尙戀二家里。

〔文字〕丈夫、大夫の誤植。●鬼、醜の字を略して旁のみ書きたるか。

〔語釋〕哉、反語の意のテニヲハ。下のセムの下に移してきくべし。●片戀、先方の此方を左程にも思はぬに、此方よりのみ先方を戀ふるをいふ。●鬼、凡て見苦きものの、きたなきもの、穢はしきもの、を罵りていふ語。クソヂヂイ、クソババア、などのクソと同樣の語なり。●益ト雄、マス、ウラ、ヲ。宛字にて大夫のことなり。●尙、ヤッパリ、云々と思ひ返して見ても、以前に變らずヤッパリ、なり。●二家里、歎息の意をあらはしたるいひかたなり。過去の意は少しもなし。

〔歌意〕大丈夫たるもの豈に片戀などせんや、と嘆息して、斷念せんとつとめて見ても、このクソ丈夫、どうしても斷念しきれず、以前と同じくやっぱり戀しいワイ、さて〳〵慨嘆の至なるかな。

〔批評〕いかにも丈夫らしき歌なり。熱情直ちに我等の肺腑をつく。

舍人娘子奉和歌一首

歎管、丈夫之戀亂許曾、吾髮結乃漬而奴禮計禮。

〔文字〕丈夫、大夫の誤植。●戀亂許曾の亂は禮の誤なり。●髮結、モトユヒと訓む說あり。然か訓まんには字ならびはかくてもよけれども、ユフカミと訓まんには字ならびは結髮となるべし。

〔語釋〕丈夫、マスラヲノコ、益荒男の子の意にて、マスラヲと同じ。●戀禮許曾、戀ればこそ、なり。ばといふテニヲハを略きたるなり。これは萬葉集に常にあるいひかたなり。心得おくべし。●漬而、水にぬるゝことなり。●奴禮計禮、奴禮はヌケルことなり、自然に結髮の解け下ることなり。

〔歌意〕丈夫の歎きながら私を戀ひらるゝが故に、私の結髮がぬれてひとりでにとけるよ、となり。他人に戀ひらるゝ時は、その人の髮がぬれて自然に解くといふ諺の當時ありし故に、かくはいへるなるべし。

〔批評〕戀れこそと斷定的にいへるは如何あらん。戀れば。や……ぬれける、と疑の意を含めていふべきところなるべし。

柿本朝臣人麿從石見國別妻上來時歌一首幷短歌

〔解釋〕『考』にこれは人麿が朝集使などにて京へ上りし時に詠めるものなるべし、官會は十一月一日なれば、石見を立ちしは九月の末か、十月の初頃かなるべし、歌の中に紅葉の散るをよめるがあるを見て知るべし、といへり。然るべし。此妻は人麿の嫡妻にはあらず石見にて通ひそめし女なり。

石見乃海、角乃浦回乎、浦無等、人社見良目、滷無等、人社見良目。能嘆八師、浦者無友、縱畫屋師、滷者無鞆、鯨魚取海邊乎、指而、和多豆乃荒磯乃上爾、香青生玉藻息津藻、朝羽振風社依米、夕羽振流浪社來緣。浪之共彼緣此依、玉藻成依宿之妹乎、露霜乃置而之來者、此道乃八十隈毎、萬段顧爲騰、彌遠爾里者放奴、益高爾山毛越來奴。夏草之念之奈要而志怒布良武妹之門將見、靡此山。

反歌

石見乃也高角山之木際從、我振袖乎、妹見都良武香。
小竹之葉者三山毛清爾亂友、吾者妹思、別來禮婆。

〔文字〕能●八師、嘆は唉の誤。●夕羽振流、流は不用、ありても差支はなし。
〔訓讀〕浦回、ウラマと訓む説あり。ウラミと訓む説あり。今卒かに決しがたし。●無友、無鞆、ナケレドモと訓む説あり、今とらず。●海邊、ウミベと訓むべし。●和多豆乃、ワタヅノと訓むべしと本居宣長いへり。從ふべし。●羽振、ハ、フルなり。●此依、カクヨルと訓む。●露霜、ツユジモと訓む。
〔語釋〕角乃浦回、浦回は浦の灣入せるところをいふ。ツヌノウラは今の石見國那賀郡都農の邊なり。江川の河口の西南に在り。●浦無、舟の寄り來るに適當せる浦なし、の意と見るべし。●人社見良目、人見るらむ、なり。上にこそある故、下、らめと結べり。●滷無、これも適當なる、又は、おもしろき潟なし、との意と見るべし。●能書八師、假りに縱す意の副詞なり。よしや、といふ同じ。エもヤも感動詞なり、シは强め辭なり。●鯨取、海にそふ枕詞。●和多豆、今の石見國、那賀郡、渡津村なり。江川の河口に在り。●香青生、カは意義なし。文法上にては發語といふ。カ弱きのカと同じもの、マッシロ、マッカなどのマと同じ種類の語なり。こゝはマッサヲナルといふことなり。●玉藻、たゞ藻をほめていひたるまでなり。玉の如き、丸き、などの意あるにはあらず。●息津藻、沖つ藻なり。(岸邊近くにはえたるは邊つ藻といふ)。されども、こゝにては、單に玉藻に對して語をかへていへるまでにて、あながちに沖の方にはえてゐる藻といふ意にはあらず。●羽振、鳥の羽を振ることなり。夫より意義を廣めて、風の吹くにも浪の寄り來るにもつかひたり。●風社依米、浪社來緣、風にこそ玉藻沖つ藻は寄り來るべけれ、浪にこそ玉藻沖つ藻は寄り來れ、なり。但し、此處ににのテニヲハ略してありと見んはやゝ無理なる心地す。然らば、依米をヨセメ、と訓み、來緣をキヨセと訓みて、風こそ玉藻沖津藻を寄すべけれ、浪こそ玉藻沖つ藻をよせくれ、と取るべきか。上にヨラメ、又は、ヨセメと未來のいひかたをし、下にキヨレ、又は、キヨセと現在のいひかたをせんは前後不整ひにてよろしからず、『古義』の説に從ひて(下はキヨセと訓み)上も來依と改むる方可なるが如くも見ゆれど、然せんには語調あまりに堅くなりて却りておもしろからずなりぬべし。こゝは、暫くこの整はざるまゝにて

可なりとしておくべきか。初の石見の海よりこゝ迄の十句は次の句をいひ出す爲の序(ジョ)なり。序は序歌ともいふ。凡て一の事(又は、一の音)をいひ出さんとして、まづ是を導き出すべき他の事(又は、他の音)を述ぶる、その部分を、そのいひ出さんとする事(又は、音)に對して序といふなり。ナカノ〳〵ニといはんとして、まづ、東路ノサヤノナカヤマといひ出すが如きも、その例なり。●共(ムタ)ト共ニ、又は、ノ隨(マニマ)ニ、といふことなり。●彼緣此依、あつちへより、こつちへよる、なり、藻の浪のまにまに動くさまをいふ。●玉藻成、ナスは凡て、ノ如ク、なり。玉藻のなよやかにより つくが如く、といふことなり。●依宿之妹、人麿によりそひて寢し妻、なり。●露霜乃、オクといふ動詞にそふ枕詞なり。露霜、露と霜とのことにあらず、たゞ露のことなり。●置而之來者、後(アト)においてくれば、なり。●此道乃、大和へ上り來る道中の、なり。●八十隈、澤山の曲り處、なり。●萬段、萬度なり、頗る度數の多きことをいふ。●彌遠爾、いよ〳〵遠く、甚だ遠く、なり。●放奴、里を遠ざかってしまった、なり。●益高爾、いよ〳〵高く、甚だ高く、なり。●夏草之、思ヒ萎ェ、にそふ枕詞。夏草のつよき日に萎るゝさまより、人の悲しみ萎るゝ樣にうつしいひたるなり。●念之奈要而、思ひしほれて、なり。●志努布良武、戀しがり思ふであらう、なり。

妻の今の有樣をいへるなり。ラムは現在のことを推量する意の助動詞なり。●妹之門、妻の家の門、なり。かやうなる場合には家といはずして門とか軒とかいふこと歌の常なり。●靡、命令のいひかたなり、靡き伏してしまへ、なり、陷沒してしまへ、なり。●此山、目の前に横はり、邪魔せる山々をさしていへるなり。●石見乃也、ヤは感動詞なり。たゞ石見ノといふに同じ。●高角山、都農より渡津に來る邊に在るなるべし。●我振袖、當時戀しき心をあらはすには着物の袖をふりたるなり。●見都良武香、見タラウカ、見たであらうか、なり。されど、見タラウカ、にてはこゝには適はず、見ルダラウカの意を強くいひたるものと見ておくべきか。されども、また、左記の或本歌を見るに、結句は見ケンカモとあり。ケンは過去のことを、推量して、又は、漠然と云ふ意の助動詞なり。さらば、尙ほ、もとのままに見タラウカの方を取らざるべからざらんか。●三山毛、ミには意味なし、たゞ山といふに異ならず。三山毛はこゝにては山中(ヤマヂウ)といふほどの意なり。●清爾、サヤサヤト、なり。竹の葉の風に鳴る音をいふ。●亂友、サヤゲドモと訓む方まさるべし。竹の葉のさやゝと音立つるをいふ。

〔歌意〕石見の海の角の浦を人は見て、よき浦なしおもしろき潟なしと見るべし。よ

「潟はなくとも」、此にて讀切るべし。人は浦もなく、潟もなしと見みとも、吾がためには故郷にして、妻とたぐひて住めば、浦なし、潟なし、とも思はず、住よしとなり」と『代匠記』にいへり。『古義』は全くこれを承け『考』も大方是によれりされども、是等皆非なり。語勢、然るところにあらず。下に説けるが如くにとらざるべからず。

し、よき浦はなくとも、又、おもしろき潟はなくとも、ま青なる海藻が、朝な夕な、風に吹かれ浪にゆられて、沖より海岸をさして渡津の荒磯の處により來るよ。（朝吹く風こそ海藻を寄せ來れ、夕によせくる浪こそ海藻をうちよせ來れ、の意味にとる時は、風、浪が文法上主格となりて、上の玉藻沖つ藻は依縁、の目的物とならざるべからず、〔尤も予の説く文章法にては、提部といふ格を設けおきて、こゝの玉藻沖つ藻の如きもその一例と見る故に、強て目的物と見る必要もなけれど、夫にしても〕、然か見るときは、勢滯りて面白からざる心地す。これを忍ばんよりは、風にこそ浪にこそとにを補ひて聞かん方、寧ろ不快の度少きやうなれば、風、浪を主格と見る方をば捨てゝ取らず。）その浪と共により來る海藻のなよやかになびき寄るが如く、我によりそひて寢し妻を、その里に殘しおきて我が出立し來れば、その妻の戀しくて、たどりくる道の曲り手ごとに千度も萬度も振りかへり見、振りかへり見して見れど、段々に里は遠くなりてしまひ、山もいくつも〳〵越えて來てしまひて、いくら見ても、いくら見ても、見えず。あゝ、戀し、あゝ、戀し。妻は今いかにしてゐるならん。定めて、我を戀ひて、萎れてゐるならん。あゝ、その萎れて我を思ひゐる妻の見度きことよ。いでその妻の門を見む。この山々よ、なびいて、

なくなってしまへ。

戀しさにたへずして、我が今石見の高角の山に於いて振る袖を、妻は木の間より透して見るであらうか。

さゝの葉は吹く風に山ぢうさやぐ〳〵とする位に鳴って頗る物すごいが、我は妻に別れてくれば、妻が戀しくて〳〵、そんなさゝのすごい音も耳には入らず、妻のことのみ思ひつゞくるよ。

〔句法〕例に依りて圖解して示さん。

石見の海角の浦回を　浦なしと人こそ見らめ
潟なしと人こそ見らめ
よしゑやし浦はなくとも
よしゑやし潟はなくとも、
いさなとり海べをさして　わたづのありその上に
かあをなる玉藻
沖つ藻
朝はふる風こそよらめ
夕はふる浪こそきよれ」

涙の共かより
かくよる玉藻なす寄りねし妹を露霜のおきてし來れば
この道の八十隈ごとに萬度かへり見すれど、
いや遠に里はさかりぬ
いや高に山も越えきぬ」。
夏草の思ひ萎えて偲ぶらん妹が門見ん。
なびけ、此山。

〔批評〕さすがに人麿の名作、句法といひ、調勢といひ、如何にも堂々たるものなり。殊に、結句の強さ、正に千鈞の弩を發すともいふべし。誠に長歌の模範的名作なり。此の熱情ありて始めて此作あるべし。古今獨歩の名を縱にするも宜なる哉。

柿本朝臣人麿妻依羅娘子與人麿相別歌一首

〔文字〕相別の下に時の字おちたるか。

〔解釋〕依羅娘子は人麿の嫡妻なり。大和に住めりしなり。此歌は人麿の朝集使にて大和に上り來り、又、石見國に下らんとせし時に、妻のよみしものなるべし。

勿念跡君者雖言、相時何時跡知而加、吾不戀有乎。

〔文字〕不戀有乎は不戀有牟の誤なり。

〔訓讀〕雖言、イヘドモと訓む方適せん。

〔歌意〕おれのことは心配するなと、あなたは仰せらるれど此次ぎ御目にかゝる時をいつと知りて、戀ひずにをりませうぞ。お目にかゝる時がいつとわからぬ故、即ち、いつまたお目にかゝられるやら、わからぬ故、かやうに心配し、戀ひまゐらするなり。イツトシリテカのカは反語の意をあらはすカなり。

挽歌

〔解釋〕哀傷歌といふに同じ。挽歌といふ字は、古、支那にて送葬の時に柩をのせたる車を挽く者の喪歌を歌ひながらひく禮あり、その歌を挽歌といへり。我が國にては然る禮ありしにはあらざれど、悲傷の情を述ぶることの等しきより、その名目を借りたるなり。音にてベンカト訓む方可なるべきか。

後崗本宮御宇天皇代

〔解釋〕齊明天皇の御代のことなり。今より千二百五六十年前なり。

有間皇子自傷結松枝歌二首

〔文字〕歌の上に御の字おちたり。

〔解釋〕有間皇子は孝德天皇の皇子なり。齊明天皇の四年十月に、天皇の紀伊の溫泉に幸ありし間に謀反を企てられしが、顯はれて十一月九日に捕へられて紀伊國に送られたまひ、十一日に藤白ノ坂(藤代)にて絞られたまひき。この御歌は、その十日に岩代の濱にて御食奉りし時に、詠みたまひしものなり。

磐白乃濱松之枝乎引結眞幸有者、亦還見武。

〔語釋〕松之枝乎引結、松の枝を木綿の類にて結びて、神に祈願をかくる印とするなり。●眞幸、マは所謂發語にて、格別なる意味なし。サキク恙なく、平安に、なり。●還見武、還りきて再びこの結びたる松を見ん、となり。

〔歌意〕磐白の濱の松が枝をかやうに引結びて、さて、我が身平安にあらば、また來りて之を見む、となり。死刑に行はるゝならんとは思ぼしながら、尙ほ、事の始末を陳述し、近臣等の執成すものもあらば、或ひは一命だけは助かることもあらんか、と思ぼされて、この歌をば詠みたまひしものと見えたり。いたましくあはれなり。

家有者、笥爾盛飯手、草枕旅爾之有者、椎之葉爾盛。

〔語釋〕笥、飯を盛る器なり。●草枕、旅にかゝる枕詞。旅に於ては寢るに適當なる枕などもあらず、草を結びて枕になどするより、旅といふ語をいひ出す爲の枕詞となれり。●旅爾之有者、旅であるから、なり。シは强め辭なり。●椎之葉爾盛、葉繁き椎の折枝を重ねて、その上に飯を盛りて、供へたるを、いひたまひたるなり。飯を盛りて奉るに適當なる器なかりし故に、固より罪人におはせば待遇も無論薄くて、椎の葉に盛りて奉りき、と見えたり。

〔歌意〕いまこゝに供へくれたる飯は、家に於てならば、無論飯笥に盛りて供へくるべきものなるに、こゝは旅なるが故に、椎の葉に盛りて供へくれたるよ、となり。

〔批評〕ありのまゝをうちいでたまへるなるが、御心を察し奉れば、誠にあはれなり。

近江大津宮御宇天皇代

〔解釋〕天智天皇の御代のことなり。今より千二百四十餘年前なり。

天皇聖躬不豫之時、大后奉御歌一首

〔文字〕奉の下に獻の字おちたるか、といふ說あり。從ふべし。

〔語釋〕聖躬、天皇の御身體をいふ語。●不豫、安んぜずといふことにて、天皇の疾病あることにいふ語なり。●大后、嫡后のことなり。后幾人もおはして、その內の第一の后なるを大后といふなり。こゝにては倭姬皇后をさして申しゝなり。

天原振放見者大王乃御壽者長久天足有。

〔語釋〕天原、大空のこと。●振放見、遠く遠方を見ること。●天足、天の圓滿なるが如くに滿足せりといふ祝の語なり。

〔歌意〕大空を遠く仰ぎて見れば、我大君の御命は天の如く長へに、天の如く圓滿具足せり、となり。祝言なり。

天皇崩御之時、倭大后御作歌一首

〔文字〕倭大后の倭の字、衍なり、といふ說あり。從ふべし。

人者縱念息登毛、玉纏影爾所見乍、不所忘鴨。

〔訓讀〕縱、イサはわろし、ヨシと改むべし。

〔語釋〕念息、悲歎の念の去ること。●玉纏、玉をつけたるかづらなり。懸影、にかゝる枕詞なり。●影爾所見、おもかげに見ゆること、髣髴として目の前に見ゆることなり。●不所忘、わすれられぬなり。●鴨、かなに同じ。こゝにては歎息の意をあらはしたり。

〔歌意〕他人は、よしや、天皇の崩御を悲しむ念のやみ失せようとも、私は天皇の御姿のおもかげにちら〳〵と見えて、忘れようとしても忘れられぬよ、となり。

天皇大殯之時歌二首

〔文字〕二首は四首と改むべし。次の石川夫人の歌まで數へて四首とするなり。

〔訓讀〕大殯、古くはオホミアガリと訓みたれども、オホアラキと訓むべき由、古事記傳に委しくいへり。從ふべし。

〔語釋〕大殯は天皇崩御ありて、山陵を造るまでの間、別殿に安置し奉る。この別殿を殯宮といふ。先年の明治天皇の御大喪には、宮城の正殿を殯宮に宛てられ、八月十三日に靈柩を此處に移し奉られたり。靈柩の殯宮にある間を「殯宮の時」又は「大殯の時」といふ。

如是有乃豫知勢婆、大御船泊之登萬里人標結麻思乎。

〔文字〕乃は刀の誤なり。●官本、拾穗本等には、この歌の作者を額田王と注せり。ある方よかるべし。額田王は天智天皇の妃にて、後に天武天皇の妃になりたまひし人なり。

〔語釋〕如是有刀、カクアラントにて、天皇の崩御ましますことのあらんと、なり。●豫、前以て、以前に、なり。●知勢婆、事實は知らざりしことなるを、もし知ってゐたならば、と、假設していふ時のいひかたなり。●泊之、碇泊せし、なり。●登萬里、碇泊地

なり。●標、シメ、シメ縄、シリクメ縄、なり。標縄は今は神聖なる地域の境界を表示する一種の記標となりをれども、古は然らず。天岩屋戸の處にて、手力男命が天照大神の御手をとりて岩屋より引出し奉りたる時、布刀玉命は直ちにシリクメ縄をこの御後方にひきわたして、こゝより内(岩屋の内)に還り入りたまふな、と申し上げたることあり。即ち、古は、交通遮斷の意味にて引きわたしたるなり。こゝもその意味を以て見るべし。●結麻思乎、ゆふべきでありたものを、結ふ筈であったに、さて〳〵殘念なことをしたよ、の意なり。上の知りせばのりせばとこのまし。を。と相應して、是にて、事實然せざりしことを、さうすべきであったのに、然せずして殘念な事をしたよ、と殘念がる意を、明らかにあらはしたり。

〔歌意〕天皇の今頃かやうに崩御遊ばすことを、前々から承知してゐたならば、かの御遊覽遊ばされし節に大御船の碇泊した處に標縄を張って、天皇をそこより外へはお出し申さなかったであらうに、かやうなことにならうとは夢にも知らざりし故に、さやうなことをもせず、爲に大君は遂々天へお上りになったり。誠に〳〵殘念至極なことをしたり。

八隅知之吾期大王乃大御船、待可將戀、四賀乃辛崎。

〔文字〕官本、拾穗本等には此歌の作者を舍人吉年と注せり。ある方よかるべし。吉年は宮女なるべし。

〔語釋〕八隅知之、大王にかゝる枕詞なり。天下を御支配遊ばす、といふやうなる意の語なり。●吾期、ワガなり。そのガの、次のオホのオに引かれて、ゴとなりたるなり。意味には變なし。●待可將戀、可は疑のテニヲハなり。下へ移して待將戀可といふと、意同じ。口調の爲に間に入りたるまでなり。待ち戀ふるならんか、といふことなり。

〔歌意〕我が天皇の御船を待戀ふるならんか、志賀の辛崎は、なり。天智天皇は大津に宮居したまひし故、志賀、辛崎、あの邊を時々船を浮べて御遊覽ありしものと見ゆ。依って、我々は天皇既に昇天ましましたりとて歎き悲めども、辛崎などは、人間ならねばそれをば知らずして、尙ほ今も平安におはしますものと思ひて、その御遊覽船の來んをば今や〳〵と待ち戀ふるならん、といへるなり。

大后御歌一首

鯨魚取淡海乃海乎、奥放而榜來船、邊附而榜來船、奥津加伊痛勿波禰曾、邊津加伊痛莫波禰曾。若草乃嬬之念鳥立。

〔文字〕末句、嬬之の下に命之の二字落ちたり。補ふべし。

〔語釋〕鯨魚取、海に添ふ枕詞。イサナは鯨の古名にて、イサナトリはもと鯨を捕る、といふことなり。されば、この枕詞は大海にこそ適せめ、琵琶湖などには適すべくもあらず。されど、こゝはアフミノウミとある故に、おほまかにそれに添へて言たるなり。かやうなるつかひざまが、實は、枕詞たるところなり。●奥放而、沖の方に遠ざかりて、なり。●邊附而、岸邊の方につきてなり、岸の方近く、なり。●奥津加伊、沖の方の櫂なり。●痛勿波禰曾、イタクはつよく、きつく、はげしく、なり。ナハネソはは、ぬることなかれ、なり。ナと上にいひて下にソと承く。これ禁止の意をあらはす普通の形式なり。●邊津加伊、岸邊の方の櫂、なり。●若草乃、ツマに添ふ枕詞。この枕詞も、實は春の若草のなよ〳〵としたるが如くなよやかなる妻、といひつゞくるところより妻にそふ枕詞となりたるにて、正しくは、夫にそふべきものにあらず。されど、こゝも、上の海と同じく、うちまかせてツマに添へて用ゐたるなり。●念、愛して居給へりし、の意なり。●鳥立、鳥が櫂の音に驚恐れて、飛び立ち去るよ、といふことなり。この鳥は、天皇の以前に愛飼したまひたりしを、崩御の後、放たれたるが、なほ湖水に浮びて遊び居たりしなるべし。

〔歌意〕近江の海(琵琶湖)を沖の方を漕いで行く船よ、又、岸の方を漕いで行く船よ。汝等、櫂を烈しくはぬるなよ。汝等が櫂を烈しくはぬるときは、その音に驚きて我が夫の命の愛して居させられし鳥どもが飛び立ち去るべきぞ。我は、今は、この鳥の以前にかはらず遊びをるを見るがせめてものなぐさめなれば、汝等心して櫂をつかひて、はげしくつよくはぬるなよ。

〔句法〕この歌、長歌の一種の句法に從ひたるものなり。例に依りて、左に圖解す。

いさなとり近江の海を　沖さけてこぎくる舟、
へつきてこぎくる舟。」
沖つかいいたくなはねそ、
へつかいいたくなはねそ」
わかくさのつまの命の思ふ鳥立つ。

この句法によりたるもの集中になほいくつもあり。注意して見るべし。

石川夫人歌一首

〔解釋〕石川夫人、傳詳かならず。

神樂浪乃大山守者爲誰可山爾標結君毛不有國。

〔訓讀〕不有國、アラナクニは敬意なし。敬意を含めて、マサナクニとすべし。

〔語釋〕神樂浪は大津、志賀、幸崎邊一帶の總名也。大山守、大は敬意をあらはす爲にそへたる語、山守は山番なり。天皇の御遊覽あらん爲に、或は、御狩あらん爲に、他人をその山に入れじと番をする、その山番をいふなり。●標結、先にいへるが如く、他人を入れじ、とて、繩張をするなり。●不有國、入らせられないのに、なり。入らせられないのに誰が爲に山にしめを結ふ、と見てもよし。又、入らせられない、といふを感情つよくいひあらはしたるものと見てもよし。

〔歌意〕あの大山守は誰人の爲に山に標を引きはりて番をなしをるぞ。天皇は既に崩御なされて、此世にはおはしまさぬものを。天皇の御爲にとて繩を張りて番をなしをるならんが、その天皇は既に崩御遊ばしたるぞや。

藤原宮御宇天皇代

〔解釋〕持統天皇文武天皇、兩朝の御代のことなり。今より凡千二百二十餘年前より千二百餘年前までなり。

日並皇子尊殯宮之時、柿本人麿作歌一首幷短歌

〔文字〕柿本の下に朝臣の二字おちたり。補ふべし。

〔訓讀〕日並皇子、續日本紀には日並知皇子とあり、他の書には日並所知皇子とあり。

天武天皇の皇子草壁皇子のことなり。皇太子となり給ひて天皇と共に萬機を見たまひしかば、時人、日ニ並ビテ天下ヲ知ロシメス皇子といふ意にてヒナミシラスノミコと尊稱し奉り、又、之を略してヒナミシノミコ、若しくは、ヒナミノミコと申し、文字の方もまた、略して日並知尊とも日並尊とも書きたり。而して、本集には凡て日並皇子と書きたり。されば、之をヒナミシノ皇子と訓むべきか、又は、ヒナミノ皇子と訓むべきかは、これのみにては決しがたし。然るに、本集卷一に「日雙斯皇子命乃馬副而云々」といふ歌あり。是によれば、日並は正しくはヒナミシと訓むべきものと見えたり。

〔解釋〕日並皇子は、右にいへるが如く、天武天皇の皇太子草壁皇子(文武天皇の御父)の事なり。皇子は引續き持統天皇の皇太子として萬機を攝したまひたりしが、持統天皇の三年に薨じたまひき。

〔語釋〕殯宮、この語の、もと天皇につかふべきものなること、既にいへるが如し。されども、この語、その後は、流用して、たゞ崩御、薨去などと同じ意味につかひたりと見えたり。こゝもその一つと見るべし。

天地之初時之、久堅之天河原爾、八百萬千萬神之、神集集座而、神分

分之時爾、天照日女之命、天乎波所知食登、葦原之水穗之國乎、天地之依相之極所知行、神之命等、天雲之八重掻別而、神下座奉之、高照日之皇子波、飛鳥之淨之宮爾、神隨太布座而、天皇之敷座國等、天原石門乎開、神上上座奴。吾王皇子之命乃、天下所知食世者、春花之貴在等、望月乃滿波之計武跡、天下四方之人乃、大船之思憑而、天水仰而待爾、何方爾御念食可、由縁母無眞弓乃崗爾、宮柱太布座、御在香乎高知座而、明言爾御言不御問、日月之數多成塗、其故、皇子之宮人行方不知毛。

反歌二首

久堅久天見如久仰見之皇子乃御門之荒巻惜毛。

茜刺日者雖照有、烏玉之夜渡月之隱良久惜毛。

或本云以件歌爲後皇子尊殯宮之時反歌也

〔訓讀〕神分分之時「古義」にはカムアガチ、アガチシトキとよめり。アガッは部署を定めて派遣する意の語にて、此處によく適へれども、こゝは寧ろ祝詞に神漏伎神漏美能命以氐天之高市爾八百萬神等乎神集集給比神議議給氐我皇孫之尊波豐葦原能水穗之國乎安國止平氣久所知食止天之磐座放氐天之八重雲乎伊頭之千別支爾千別氐天降所寄奉などあるをとりたるものとせん方よかるべく、卽ちカムハカリ〳〵シの方よかるべし。●御在香、歌學全書本にはミアリカとあれど、此本の原本と見る木版の略解にも、又、その他の本にも「皆ミアラカ」とあれば、アリカを誤植と見て、直しおきたり。●日月、漢字はヒ、ツキと排列してあれども、我國にては、ヒツキとはいはずして、ツキヒといふこと常なり。されば、こゝも、文字にかゝはらず、ツキヒと訓むべきなり。「考」「古義」等皆然か訓めり。●數多成塗、マネクナリヌル、こゝは、心持の一度切れて(言葉はつゞきをりながら)、直ちに下につゞくいひかたならんを要するところなり。本集にては、さやうなる場合には、いつも、何々ぬれ、何々たれ、何々せ、などいへり。されば、こゝも、その例によりて、ナリヌレと訓まん方まさるべし。〔語釋〕天地之初時、天地開闢の時の意。●之、は意を強むる意のテニヲハなり。●久堅之、天にかゝる枕詞。轉じて、空、月、星、日の光の意の光、などにもいひかく。●天河原、高天原にある天の安の河原。●八百萬千萬神、數多の神々といふこと。●神集

集座而神は神の所作なるが故に神とつけたれども、なくてもよき語なり。下の語に勢を添へんが爲につけたるものと見ておきてよし。神集ひ集ひいまして、かく同一の語を重ねたる、之を疊語といふ。語に勢をつくる爲に疊めるなり。下の神分分之も同樣の意趣よりいでたり。●天照日女之命、天照大神宮なり。●天乎波所知食登、天をば御支配なさると議定し、なり。「議定し」「又は「確定し」、又は「定り」などの語を補ひて見るべし。●葦原乃水穗國、日本國のこと。●天地之依相之極、天地開闢にて離れたる天と地とが、又、何千萬億年かの後に、合する時ありとして、その天と地との依りあふ時まで、依りあふ限りの時まで、なり。●所知行、御支配なさる、なり。●神之命、天照大神は神、その御孫瓊々杵尊も御神なれば、神之命といへり。の命はたゞそへたるまでの語なり。●登、トシテの意。●天雲之八重、七重八重十重二十重になりたる天雲の意。八重は彌重といふ意にて、澤山に厚く重なりゐる意なり。ものゝ重複せるを凡てヤヘテキルといふ。齒の二本重なりてはえたるをヤヘ齒といふ。そのヤヘの意なり。●神下、高天原より此の日本國へお下りになりしをいふ。神は先にいへる神と等しく、神の所行なる故にそへたるまでにて、いはゞ、勢をつくるまでの語なり。●座奉之、お下らせ、申、

し、上、げ、たといふと。●高照、タカヒカルと訓む。日にかゝる枕詞。●日之皇子、天孫瓊々杵尊をいふ。◎發端の天地之初時よりこゝまでは、日之皇子、卽ち天孫瓊々杵尊のことをいひたるなり。日之皇子の上に長々しき修飾語つきたるなり。さて、日之皇子はこゝまでのところにては、無論瓊々杵尊のことなるが、

日之皇子 尊……神武天皇……天武天皇

なるに依りて、この日、之、皇、子、の二語の間に於て、我々は我々の考を瓊々杵尊よりして一躍天武天皇にまで移し、こゝより以下に向ひては、この日、之、皇、子、をば天武天皇のことゝ見ざるべからず。此の句法は人麿の作に常に甚だ多し。辯護する人は如何にもいへ。予には首肯することの出來ざるいひかたなり。●飛鳥之淨之宮、飛鳥淨見原宮のこと、天武天皇の御所なり。●神隨、神にて入らせられながら、神にて入らせらるゝまゝに、といふことなれど、先にも既にいひし如く、この語、勢をつくるまでのものといふより外に、明瞭に今の語にうつしがたし。●太布座而太く布き給ひて、といふこと。太く、は、しつかりと、立派に、盛りになどの意。布き給ふは、天下を支配し給ふこと、命令を布き給ふこと、恩澤を布きたまふこと、なり。●天皇之敷座國等、天皇の御支配なさる國なりとして、なり。今までは、日本國を御支配遊ばされたるが、此度は高天原を御支配なさる

べきなりとて、なり。天皇は天武天皇を指していふ。「考」「古義」何れもこの說なり。「略解」の說は半ば採り難し。」されども、この說非なり。この天皇、天武天皇の御事ならんには、こゝに新に天皇といひいでゝ他を驚かす要なし。なほ又、この天皇、天武天皇の御事ならんには、此句全く贅物なり。飛鳥之淨之宮爾神隨太布座而、天原石門乎開、神上上座奴、にて條理の亂るゝこともなく、事がらいとよく聞こえたり。(元來、こゝ、神隨太布座而、の下の處、語句不足なり、冒頭の長きに比して、語句あまりに短く、思想の變化餘りに急激にして、我々は送迎に暇なからんとす。されども、此の如きはこの作者の句法なりとして、暫く之を忍びて見んに、)則ち天皇之敷座國等の一句は無用有害なるものなり。然して、是は皆天皇を天武天皇の御事とするより起る失なり。若しこの天皇をば天武天皇の御事と見ずば、如何。無用有害のもの、轉じて有用不可缺のものとならんも知るべからず。思ふに、この天皇は次で天位をふませたまふべき新天皇のことなるべし。敷座國は高天原にあらずして此の日本國のことなるべし。たゞ、當時、天武天皇は尙ほ御在位なり、天武天皇より皇太子草壁皇子を指して天皇と仰せられんこと(若しくは、人麿より皇太子を指して直ちに天皇と申さんこと)少しく如何なれど、前說の不條理なるには優りぬべし。依りて、今はこゝの文句をこの意によりて、進むべし。

即ち、此の日本國をば我皇太子、新天皇の御支配なさるべき國なりとして、御自分は此の國を去りて、なり。國登の下に語を補ひて聞くべし。◉天原石門乎開、形容の語なり。天の雲霧をひらきて、といふことなり。實際にある石の門を實際に開く意にはあらず。◉神上上座奴。カムノボリノボリイマシヌ、と「考」にはよめり、而して右には神下りといひ、こゝには神上りといへり、といへり。「古義」は是を受けて、ノボリと訓むべきよしをくはしくいへり。されども、崩御、薨去のことをアガリといふこと、古の常にて、これは「古義」にも既に委しく說けることなれば、こゝも、その意味にて、神アガリと訓むがよかるべし、前の下りに對して强てノボリと訓まんは、餘りに拘泥にすぎたるべし。こゝにて一段落なり。實は第二段落なるべきなるが、先の第一段落、語句の混合の爲に不完全に終りたれば、こゝを一段落とすべし。◉吾王、これは日並知皇子を尊敬していひたるまでにて、實の吾王の意にはあらず。◉皇子之命、日並知皇子のことなり。之命は例の添へたる語なり。日並知皇子は天武天皇の皇太子にして、天武天皇崩御の後、御母後に持統天皇の朝に臨みて政を聞こしめしたりし間も、尙ほ皇太子として、その朝政にあづか

り給ひしかば、以下にこの事をいふ。●天下所知食世者、天下を御支配遊ばしたなら、なり。食世者食佐者と同じ意味につかひたり。●春花之、春の花の咲き滿ちたるは麗はしく立派なるものなるが故に、下に貴しといはんとして、まづいひ出だしたるなり。普通にはたふとしにそふ枕詞とす。之をばノ如クの意のものと解釋せば極めて簡便なるべし。●貴在等、貴しはめでたし、結構なり、などと同じ意の語なり。凡て世の中のめでたく結構ならんをいふ。等は下の滿波之計武跡の跡と、相對して、事物を列擧する意のテニヲハなり。「あれと＝これと＝」「君」と「僕と＝＝と」のと＝＝と同じものなり。●望月之、滿月は圓滿にして缺けたるところなきものなれば、下のタヽハシ(足はし)をいふ爲にまづいへる語なり。前の(春花の)と全く同じ遣ひざまの語なり。是もまた、普通には、だゝはしにそふ枕詞とす。之をノ如クと解して都合よきこと前の「春花のの＝の如し。●滿波之計武、足はしくあらん、なり。滿足ならん、といふことなり。以上二句對句。●大船之、下の思憑にかゝる枕詞なり。大船にのりたるは、今も「大船に乘った樣な氣がする」「大船に乘った氣でゐる」などつかふが如く、頗る安心のゆくものなれば、頼みにするといふ意の思憑にかけてつかふなり。●天水、旱に當りて雨の降らんことを人々の待つ

『考』に、貴は賞の誤にてメデタカラントなりといへり。捨て難し。

意より天つ水仰ぎて待つ、といひつゞけたり。こゝにては、實際に雨のふるを待つにはあらで、皇太子の天下を御支配遊ばさるゝ時の來んを待つ意なれば、こゝの天水は、たゞ下の仰いで待つといふ語をいふ爲に、出したるまでのものと知るべし。此の如き用方に用ゐたる語句を凡て序詞といひ、その内、語の五字、又は、四字、又は、六字なるを特に枕詞といふなり。●何方爾御念食可、如何さまにおもほしめせばか、なり。如何樣にお思ひ遊ばした故か知らん、なり。●由緣母無、依り頼むべきものもなき緣もゆかりもなき、なり。●眞弓乃崗、大和國高市郡の中央のやゝ西、に在り。●宮柱太布座、宮柱を太くしっかりとお造りになり、なり。布座、こゝにては御建設になるぐらゐの意なり。●御在香乎高知座而、御在香は御在所にて、御住の御殿なり。高知座は高く立派に御建築になることなり。言葉遣は二つとも御自分に御建てになるやうにいひてあれど、實は夫々の匠に御建てさせになり、の意なること、勿論なり。以上二句對句なり。御殿を御造らせになり、そこへ御入りになりて、なり、(實は、皇子の薨去になりたる爲に、眞弓の岡に御陵を立派に御造り申上げて、此處へ御埋葬申し上げたることなり。御陵なる故に御殿など御造り申上ること素よりあるべくもなし。されば、この二句は御陵を

立派に御造り申上げたることを形容していひたるまでのものと知るべし。）●明言爾、朝毎に、なり。毎朝々々、なり。漢字は當（アテ）にすべからず。●御言不御問、言（コト）問（トフ）はものを仰せらるゝことなり。何事も仰せられざるなり。薨去なりたること故、御言をかけらるゝことのなきは固よりのことなるが然か薨去になりたるやうにせずして、いまだ御存生中なるやうにして、かくはいひなせるなり。●日月之數多成塗、月日が數多經過したり、といふことなり。こゝにては、いまだ然程とも思はぬに、早御墓づかへする日數の終りて、退散すべき日の來りたるをいふなり。マネクはアマネクなり、數多くなり。成塗（ナリヌレ）は、ナリヌレバ、なり。意切れて、語切れざる、例のつかひざまなり。ヌレは助動詞にて、事の確定、已然、已了をいふ意のものなり。●其故、ソレユヱニといはず、毎にソコユヱニといふ。●皇子之宮人、委しくは皇子之宮人といふべきか。皇子の御殿にお仕へ申せる人々なり。舍人（わ）どものことなり。●行方不知毛、皆々の退散する行方がわからず、なり。散り〳〵バラ〳〵に行くへもわからず退散してしまふ、なり。毛は歎息の感動詞なり。こゝにては、舍人どものわかれ〳〵に散じ行くを見て、そを嘆きて行方知らずもといへるなり。

久堅乃、天にそふ枕詞。●御門、御殿（ゴテン）のことなり。御門（ゴモン）と見るも可ならん。人麿は、この時、この皇子の舍人にてありしやうなれば、御殿をいふと見ん方まさるべきか。●荒巻惜毛、荒れんことが惜し、殘念なり、なり。毛は歎息の意の感動詞。茜刺、アカネの赤き色のさすといふ意にて、下の日を修飾したる語なり。普通には日にかゝる枕詞とす。●烏玉之、黑き、夜、等にかゝる枕詞なり。烏玉は烏扇檜扇ともいふ）の實なり。形小さく丸く、色眞黑なり。依りて、黑といはん爲にぬば玉の（如き）といひて、枕詞にしたるなり。●夜渡、夜東より西へ空を渡りて行くことなり。●隱良久、隱るゝこと、なり。

〔歌意〕天地開闢の時に、天の安の川原に、數多の神々集り給ひて、御相談ありし時に、天照大神は天を御支配なさることゝ定り、（この日本國は天照大神の御子孫の御支配なさるべきことに定りたれば）この日本國を未來永劫萬代無窮に御支配なさるべき御方なりとして、天のやへ雲をかきわけて天降りおさせ申したりし天照大神の御裔（天孫瓊々杵尊）……天照大神の御裔たる天武天皇は、飛鳥の淨見原の宮に於て天下を御支配、遊ばして入らせられたるが、今度は新天皇の此の日本國をば御支配遊ばすべきものなりと思召して、御自身は石門を開いて天上に上り

給ひぬ(崩御遊ばされぬ)。(天皇は崩御遊ばしたれど、)我が皇太子日並知の皇子おはしませば、この皇子の天下を御支配遊ばしたらば、天下はめでたく榮え、御惠は海内至らぬ隈なくしき及ぶならん(早く天位に御卽きあれよかし)と、天下の者ども皆憑みにし、その日の至らんを待ちゐたるに、皇子は如何に思召しめしたるにか、たよりになるべきものもなく、緣もなき眞弓の岡に御殿を立派に御造りになりて、(御陵を御造りになりて)、こゝへ入らせたまひて、毎朝々々(吾々は侍ひて、御仕へ申上げをれど)物を仰せらるゝことともなくて、徒らに月日が多く經過したり(御墓づかへすべき日限もはや來れり。)これによりて、御殿の人たちも(御仕へ申しをること叶はずして、ちり〳〵ばら〳〵に退散して、その)行方がわからなくなりてしまふことよ。

天を仰ぎて見るが如くに毎日〳〵仰ぎ見てゐたる皇子の御殿の荒廢し行かんことの口惜しきことよ。

太陽は天に在りて照してをれども、夜照る月の雲に隱れ行くことの口惜しく、殘念なることよ。此歌、太陽は天皇をさしていひ、月は日並知皇子をさしていへるなるべし。然るに、此當時、天武天皇は既に崩じ給ひて、皇后(後に持統天皇)制を稱したまへれど、未だ天位に卽きたまはず。されば、此の時には正しく太陽にあつべき御方入らせられざるなり。左注には、一本には後皇子尊(高市皇子)の薨去の時の歌の反歌として擧げたりといへり。高市皇子は持統天皇御卽位後七年に薨じたまひし御方なれば、如何にも、その場合の歌とせん方適へり。須らく、此處より削りて彼處へ移すべきなり。

〔句法〕例に依りて、句法を明瞭にせん爲に、左に圖解す。

天地の初の時し、久堅の天の河原に、
八百萬
千　萬神の神集ひ
集ひいまして、
神はかり
はかりし　時に、
天照すひるめの命、天をば知ろしめすと、
葦原の水穗の國を天地の依合の極み知ろしめす神の命と、
天雲の八重かき別けて神下りいませまつりし高光る日の皇子……
日の皇子は、飛鳥の淨見の宮に、神ながら太しきまして、
すめろきのしきます國と、
天の原石門を開き　神上り

吾が大王皇子の尊の天下知しめしせば、　上りいましぬ。

春花のたふとからんと、
望月のたゝはしけんと、
天の下四方の人の　大船の思ひ憑みて
天つ水あふぎて待つに、

いかさまにおもほしめせか、
つれもなき眞弓の岡に宮柱太しきまし、
みあらかな高しりまして、
朝毎に御言問はさず、
月日のまねくなりぬれ、
そこゆゑに
皇子の宮人行方知らずも。

皇子尊宮舍人慟傷作歌二十三首の内の三首

島宮上池有放鳥荒備勿行君不座十方

〔文字〕上池は池上の誤なり。

〔解釋〕島宮、日並知皇子の住ませられし御殿なり。

〔語釋〕池上有。島宮のそばに池あり、勾の池といふ。その池水の上に、浮いてゐるといふこと。●放鳥、放したる鳥なり。皇子御存生のほど飼ひおかれし鳥をこの池の邊に放たれしが、今も池の上に遊びゐると見えたり。●荒備勿行、あらび行くなかれ、なり。人に馴れゐたりしものが、あらくなり、人のゐる邊をさけ、又は、飛去りなどするやうになることなかれ、となり。

〔歌意〕島の宮の池の上に遊んでゐる放鳥よ。汝等を飼ひたまひたりし皇子の尊はいまさずなりたれども、汝等は急にあらび行くなよ。（我々はせめて、汝等を見て、御存生中のことどもをしのぶたよりにせんぞ。）

外爾見之檀乃岡毛、君座者、常者御門跡侍宿爲鴨。

〔解釋〕檀乃岡、皇子を葬りし岡なり。

〔語釋〕外爾見之、外のものとして見てゐし、縁もゆかりもなきものと見てゐし、なり。●常都御門、永久の御所、いつまでも御座す御殿。●侍宿爲、御殿に出でゝ御用のあるのを待ち、侍りゐること。

〔歌意〕今まではよそのものと見てをりし檀の岡も、今日からは、我君が御住居遊ばす

からこゝをば永久の御殿と心得て、御勤務申上ることよナア。

東乃多藝能御門爾雖伺侍、昨日毛今日毛召言毛無、

〔解釋〕多藝能御門、勾の池に瀧ありて、その瀧の近傍に在る御門を瀧の御門といはれしと見ゆ。東乃は東の方にあるより然かいへるならん。

〔歌意〕自分は相變らず、毎日參りて、この瀧の御門に侍らひてゐるけれども、何故かきのふ今日も、一向にお召し遊ばすことがない。(考へて見れば、ない筈。皇子は既に御他界遊ばされたるにあらずや。あゝ。)

明日香皇女木瓱殯宮之時柿本朝臣人麿作歌一首幷短歌。

〔解釋〕明日香皇女は天智天皇の皇女なり。●木瓱、また、城上とも書く、大和國北葛城郡中央、馬見村に在り。

飛鳥明日香乃河之上瀨石橋渡、下瀨打橋渡、石橋生靡留玉藻毛叙絶者生流、打橋生乎爲禮流川藻毛叙干者波由流。何然毛、吾王乃、立者玉藻之如、許呂臥者川藻之如久、靡相之宜君之朝宮乎忘賜哉、夕宮乎背賜哉。宇都曾臣跡念之時、春部者花折挿頭、秋立者黃葉挿頭、敷妙之袖携、鏡成雖見不厭三五月之益目頻染所念之君與、時時幸而遊賜之、御食向木瓱之宮乎常宮跡定賜、味澤相目辭毛絶奴。所已乎之毛綾爾憐、宿兄鳥之片戀爲乍、朝鳥往來爲君之、夏草乃念之萎而、夕星之彼往此去、大船猶預不定見者、遣悶流情毛不在。其故爲便知之也。音耳母名耳毛不絶、天地之彌遠長久、思將往、御名爾懸世流明日香河、及萬代、早布屋師吾王乃形見何、此焉。

短歌二首

明日香川四我良美渡之塞益者、進留水母能抒爾賀有萬思。

明日香川、明日谷將見等念、八方、吾王御名忘世奴。

〔文字〕打橋生乎爲禮流の爲は鳥の誤。●本文には然有鴨綾爾憐とあれども然有鴨は採らず、注の一云の方を採れり。●又本文には宿兄鳥之片戀嬬とあれども、嬬は採らず、注の一云の方を採れり。●其故爲便知之也、此の邊文字の誤れるところあるべし。●形見何の何は荷の誤なり。●明日谷の谷、說によりては一本の

左倍をとるべし。

〔語釋〕飛鳥、明日香にそふ枕詞。●明日香乃河、高市郡の東部を西北に流るゝ川。●上瀨、上流のこと。●石橋、イハバシと訓む。川の中に適當なる石を並べて、この上をとび渡り行くやうにしたる橋をいふ。●下瀨、下流のこと。●打橋、岸より岸に渡したる簡單な橋のこと。●上瀨、下瀨といひ、石橋、打橋、といふ、これらはたゞ語をいひかへて、文句を飾りたるまでなり。事實に必ず上流、下流、石橋、打橋、なるにはあらず。●生靡留、はえて流のまゝに動き靡きてゐる、なり。●玉藻、玉は美稱の語なり、たゞの藻をほめてかくいへるなり。圓き、玉の如き、などいふ意はなし。●生乎烏體流、はえて流のまに〳〵なびきゐるさまをいふなり。●何然毛、何しかマアなり。何故にかマア、なにとてかマア、なり。●吾王乃、吾王は明日香皇女をさしていふなり。乃は、こゝにては、主格を示す。●立者、敬意を含めてタタセバと訓む、お立ちなさればなり。●許呂臥者、許呂はころがる(轉る)のころにて、臥に勢を添ふる位のものなり。●靡相之靡き合ひしなり、明日香皇女が夫君忍坂部皇子と靡きあはれしをいふなり。●宜君之、宜は完全無缺なるなり。君は夫の君、忍坂部皇子のことなり。之は夫君の住みたまへる、の意。●朝宮乎

忘賜哉、朝は下に夕宮乎といひて、朝夕、と語を對せしめたる迄にて、何の意もなし。裝飾用のものと知るべし。忘賜哉、忘れて歸り來たまはざるか、なり。●夕宮、上の朝に對せしめたるものにして、たゞ御殿のこと。●背賜哉、背き捨てゝ去りたまふぞや、なり。上の何しかもの詰問の副詞、こゝの忘れたまふや背きたまふやへ呼應し來る。●宇都曾臣、現身なり、ウツシミなり、ウツセミともいふ。現在の身、この生きてゐる身、なり。●宇都曾臣跡念之時、ウツソミノトキといふ事なり。ト、オモヒシは殆んど意味なし。恰かも今の語の「人間といふものは頼みにならないものだ」に於けるといふものの、殆んど意味なきが如し。●春部者、春あたりは、春ごろは、なり。たゞ春は、と見ても大差なし。●花折挿頭、咲ける花を手折りて頭にさすなり。●秋立者、秋がくると、なり。●敷妙之、袖にかゝる枕詞。●袖携、袖を連ぬること、なり。携りは携ふの所謂自動詞にて、袖のふれあふ、ぐらゐの意の語なり。●鏡成、鏡の如く、なり。鏡に向ふが如く、の意なり。●雖見不厭、いくら見てもあかない、なり。●三五月之、十五夜の月の如く、なり。滿月は人々觀て賞翫するものなれば、下のめづらし、みにかけていふ。枕詞なり。●益目頻染所念、いよ〳〵めづらしく思はるゝなり、いよ〳〵相愛せらるゝさまなり。皇女

の思召なり。●君、こゝにては夫君、忍坂部の皇子の御事なり。この歌、明日香皇女を主として我大君などいひたれば、忍坂部皇子のことは單に君とのみいふ。●幸而遊賜之、散歩、又は、遊覽に出でたまひしなり。●御食向、キといふ音にかゝる枕詞なり。●常宮、永久の御殿なり、卽ち、御墓なり。●味澤相、目にそふ枕詞。●目辭、相會ひて見るが目相談るが辭、なり。相見ることも、相談ることもなり。●絶奴、たえてしまひたり、なり。●所已乎之毛、そこのところを、なり。その相見、相談ることの絶えたるを、なり。●綾爾憐、非常に悲みて、なり。●宿兄鳥之、片戀しつゝにそふ枕詞。之は、のするが如く、といふ意。●朝鳥、かよふにそふ枕詞。ハは上の之と同じく、のするが如くの意。●往來爲君之、お通ひ遊ばす君が、なり。かよはすはかよふに尊敬の意を含めたるいひかたなり。夫君の皇女の御墓に參らるゝを見ていひたるなり。君は夫君忍坂部皇子なり。之は所謂主格を示すテニヲハなり。●夏草乃、萎えにそふ枕詞。●念之萎而、心の萎れて、なり。うなだれて活氣なきさまをいふなり。●夕星之、かゆきかくゆきにそふ枕詞。ゆふづゝは所謂よひの明星、あけの明星、なり。よひには西に見え、あけには東に見ゆるより、アッチヘユキコッチヘユクといふ意の語にそふ枕詞となれるなり。

之は、上に說けるが如く、のするが如くの意なり。●彼往此去、かう行きあゝゆく、なり、あつちへ行きこつちへ行き、なり。●大船、たゆたふにそふ枕詞。●猶預不定見者、たゆたふのを見れば、なり。たゆたふは、大船のたゆたふといふ時は、船の浪にゆられてゆら〳〵とするところをいふ語なれど、こゝにては、皇子の御心の何となく進まざるさまをいふものと見る方よからん。●遣悶流情毛不在、なぐさむ心もなし、なり。●其故爲便知之也、此句脫字あるべし。其故爲便知(末)之也、か、又は、其故爲便(不)知之也、か、なんぞなるべし。然るに、此句、前後の句に對して甚だ容易ならざるものなるが如し。まづ、此歌は、此前の句なぐさむる心もあらずにて切るゝものなるか、又は、此句其故に爲便知之也にて切るるものなるか、これ第一の疑なり。「代匠記」は前の句にて一度切れ、また次の句にて重ねて切れたり、と認めたるが如し。「考」も是と同說なるやうなり。「古義」はいふところ前後一致せず、不明なり。此の句、後の句につゞくべきものならば、そこゆゑにすべしらましやと訓むは適せず、「古義」の如く、卽ち、宣長說に從ひて、そこゆゑにせんすべしらに、と訓むべし。この場合には、そこゆゑには、前を承けて下終までの句を起す、所謂副詞的の接續詞と見るべきなり。また、此句は前に續きて、爲便知之也にて切

るゝものと見んか。訓み方はそこゆゑにせんすべしらに、にては不適當なり、そこゆゑにすべしらましや、などいはざるべからず。然るに、此の漢字の書きぶりを見るに、爲便(スベ)〇知之也(シリヤ)とありて、爲便不知之也(シラヌシリヤ)の意をあらはせるものの如く見え、しらましやなど反語的にいひたるものとは見えず。されば、此の句、或は、ソコユエニセンスベシラズ、など訓むべきか。されども、かくては、之を上の句と並べ見るに語勢甚だ弱くして、極めておもしろからざるを感ず。されども、今別に思ひあてたる名案もなし。されば、今暫くかくと定めて、後の考をまたん。さて、かく解釋する場合には、其故は上のなぐさむる心もあらずを承くることとして、此の句をば夫故にせん(之をなぐさめん)方法を知らず、の意に取らざるべからず。予は、この意味にとりおく方、歌の勢の上より見て可なりと思ふ。今は暫くかく定めて進むべし。●音耳母名耳毛、音も名もあり、アスカといふ音も明日香といふ御名も、なり。實は同一物を語をかへていひたるまでなり。のみはつよめていひたるにて、せめて御名だけにても、の意をあらはせるテニヲハなり。●天地之、之は例の如くの意ののなり。天地の絶ゆることなく盡くることなきが如く、いや遠長く、なり。●彌遠長久、いよ〳〵遠く長く、なり、末來、永劫、いつまでも、なり。

●思將往、心に思ひ行かん、心に懸けて忘るゝことなく思ひ出し〳〵行かん、なり。後の句より此語に、心持、かへり來て續く。●御名爾懸世流、御名につけて入らせらるゝ、なり。明日香皇女とて、アスカといふ名を御自分の御名につけて入らせらるゝ、なり。●及萬代、上の思將往にかへりてつゞく。●早布屋師、美はしき、なり。彼方をほめていふ意の語なり。ハシキヨシともいふ。ハシキが美しき、なり、ヤシもヨシも共に感動詞なり。●形見何此焉、こゝ(明日香川)をかたみに、萬代までにしぬびゆかん、なり。

●四我良美、ものをからませて留むるもの、川中に杙など數多打ちて流を留むるなどをいふ。●渡之、しがらみをうちわたして、なり。●寒益者、とめたならば、なり。●能杼爾、のどかに、緩に、なり。●賀、疑の意のテニヲハ。●有萬思、あらん、なり。假設的のことをいふ時は、上にませばなどいひて、下に必ずましと受く。●左倍、も亦、の意。●念八方、念へばにやマア、念ふか知らん、の意ともとられ、念はうや、念ひはしない、と、反語のいひ方にもとらる。この二の内、いづれを採るべきか。後にいふを見るべし。

〔歌意〕明日香の川の上流や下流に石橋や打橋をわたす。その石橋や打橋にはえて

ゐる藻は枯るれば、またはえる。（これまでは、下に玉藻の如く、川藻の如くといひ出す爲の序にして、兼ねて又、明日香皇女の一度かくれ給ひて、再びかへりきたまはぬことをいはんとする伏線なり。）然るに、何故に吾大君（明日香皇女）は夫君（立ちても居ても相共に玉藻の如く川藻の如く親み靡きあひたまひし、その夫の君忍坂部皇子）の御殿を捨て去り給ふぞや。皇女のいまだ此の世に入らせられし時は、春は花を折りてかざし、秋は黄葉を折りてかざしたまひて、（いくら見ても厭くことなく、愈〻相愛したまひし）夫の君と袖を連ねて、時々遊覽遊ばしたる、木瓜の宮を、永久の御殿と定め給ひて、あひたまふこともものいひたまふことも絶え果てたまへり。されば、是を非常に悲しみ給ひて、失せ給ひし皇女を戀ひ給ひつゝ、毎朝御墓に詣で給ふ夫の君の甚しく萎れかへりて左へよろめき右へよろめきて、はか〴〵しくも進みえたまはざるを見奉りては、我胸もつとふさがりて、之をはらさんことも叶はず。（甲説）（それ故に、しかたがないので。）（乙説）（さらばといつて、その爲に如何にすべきか、すべを知りをらんや、否、知らず。）（丙説）（又、その爲に取るべき方法も知らず。）されば、御名につけて入らせらるゝ明日香川、こゝを萬年の後までも我大君の形見として、せめては御名前だけでも永久に思ひ出し、しのび奉りてゆかん。

明日香川、こゝにしがらみをわたして、水をとめたならば、流るゝ水も止まつて綏かになるであらう。（然るに、皇女のかくれたまふを我々は止めんすべもなし。あゝ、悲しきことなるかな。）

明日香川、明日香といふ名を御名につけてゐ給ふ皇女を明日見んと思ふが故にやあらん、吾は吾が大王明日香皇女の御名を忘れぬことよ。（然か、御名を忘れずとも、吾々は最早皇女をば再び見奉ることは叶はざるに、あゝ。）（この意味にとる時は、「明日だに」のだにはたゞ力をつよむるだけのものと見る。又「念八方」を「念へばにやも」、「念ふからにやマア」、「念ふ故にやあらんマア」、「念ふ故に吾が大王の御名を忘れぬのかしらん。マア、」と見る。）

一説にては、「明日だに」のだにを採らず、一書にある左倍をとり、も亦の意にとる。而して、「念八方」のやもをば反語の意のものと見る。即ち、

明日香川をば明日もまた見んと思はうや、否、思はず。なぞと、いはば、明日香川を見ると、皇女の明日香といふ御名が忘られねば、戀しき情いよ〳〵堪へられぬ故になり。

又、一説にては、等念を無意味のものと見、八方を前説と同じく反語の意と見て、明日谷將見等念八方」を明日だに見んやは、見はせじの意にとる。即ち、明日香川、明日香川といふ名をつけてゐ給ふ皇女を吾々は明日だに見奉らんやは、否、見奉らじ。（然らば、吾々は寧ろその明日香といふ御名をば忘れたきほどなるに、）吾々はその御名を忘れ奉らぬことよ。（あゝ、是、却つて悲の種なり。）あゝ。

この二の短歌は主旨を言外にきかせたる趣のものなるが故に、後の歌の如きは、殊に、解釋のしかたによりては、右の如く種々になるなり。是は作者と解釋者と思想の一致せざる場合に起ることにして、止をえざることなるが、極めて好ましからざることなり。

さて、右の三説につきて、こゝにその正否を定むべし。

谷と左倍との適否につきて「考」には「一本に左倍とあるはかなはず」といひ、「略解」もそれに從ひて、かなはず、といへり。（されども「略解」はこの歌の意を十分には了解せず、たゞ師説に盲從して、然かいひたるのみと見えたり。）「古義」は谷をすてゝ左倍を取りたり。予は寧ろさへの方を適せりと認む。その理由は、後にいへるところによりて知るべし。

八方のやは、疑の意の辭と見るべきものなるか、反語の意の辭と見るべきものなるか。「考」は、疑の辭と見、「略解」、「古義」は反語の辭と見、「代匠記」も反語の辭と見たり。歌の意の取りかたによりて、各、適すべし。

明日香川、この句の、この歌に於ける地位如何。「代匠記」は、「水の流るゝ如く過ゆかせたまへる皇女をば、明日香川のあすさへ又も見奉らんと思はんや思はぬものを云々」といひて、明日香川をば寧ろ、下の明日にそひたる序詞と見たり。「考」には明記なけれど、これと同説なるが如し。「略解」は曖昧なり。明瞭なる考なかりしと見えたり。「古義」は之を下の見むの所謂目的格と見たり。予は此の句の、素より川の名をよびあげたるものにはあれど、こゝにては、之を、當然、下の明日を呼び起す爲の序詞と認むべきものなることを主張す。即ち、「代匠記」、「考」等の見方を以て至當なるものとし、「古義」の見方を以て不適當なるものとす。

即ち、予はさへを取り、やもものやを疑の辭なりとして

明日香川、その明日香といふ名を御名につけてゐたまふ皇女を明日もまた見奉らんと思ふが故にやあらん、吾は吾が大王の明日香といふ御名を忘れぬよ。（忘れずとて再び見奉ることも叶はぬ身なるに。忘れざるは却て悲みの種なるに。

あゝ、あゝ。）

かくの如き意味に解せんとす。是、さきの第一説にほゞ同じく「考」の説亦ほゞこれに同じ。

又、予は、やもものやを反語の辭なりとし、（だに、さへ、はいづれにてもよし。強ひて擇ぶ必要を認めず。）とおもふを無意味のものなりとして、

明日香川、その明日香といふ名をつけてゐ給ふ皇女を、吾々は明日見奉らんや。否。見奉ることはあらじ。（然るに、）吾々は明日香といふ、大王の御名を忘れ奉らぬよ。

（あゝ、是却て悲の種なり。寧ろ忘れたきほどなるに。あゝ。）

かくの如くも解せんとす。而して、是、さきの第三説に同じく、又「代匠記」の説も、また、（恐らくは「略解」の説も、これに同じ。

さきの第二の説は「古義」の説なるが、これ寧ろ無法なる解釋なり。上三句の解は暫くよしとして、その下の「なぞといはゞ……故に、となり。」とある、そのなぞといはゞ……故には此の歌の何處よりひき出したる考なるぞ。此の如き考は、この歌のいづこにもひそみをらず、また、省略してもなきやうなり。思ふに、著者の勝手なる加筆なるべし。採るべからず從ふべからず。

右の如くにて、歌の意は、やもものやを疑の意の辭なりとすると、によりて二樣となる。而して、作者の意のこのいづれなりしかは、今推定すること能はず。然れども、予は私に前者を以て作者の意に擬す。

〔句法〕例によりて左に圖解す。

飛鳥の明日香の河の（上つ瀬に石橋わたし、下つ瀬に打橋わたし、）
何にしかも吾が大王の（石橋におひ靡けるる打橋におひたれる）
うつそみとおもひし時に、（玉藻もぞ絶ゆれば生ふる。川藻もぞかるれば生ゆる。」）
春べは花折りかざし、（立たせば玉藻の如く）
秋立てば黄葉かざし、（ころぶせば川藻の如く）
敷妙の袖たづさはり、（なびかひしよろしき君が朝宮を忘れ給ふや。夕宮を背き給ふや。」）
鏡なす見れども厭かず
もち月のいやめづらしみ
おもほしゝ君と
時々出でまして
遊び給ひし
御食向ふ木庭の常宮を常宮と定め給ひて、

そこしなも綾にかなしみ。
ぬえどりの片戀しつゝ
朝鳥のかよはす君が　夏草の念しなえて
夕づゝのかくゆき
大船のたゆたふ　見れば、
なぐさむる心もあらず
そこゆゑにせんすべ知らず。」(丙)
(そこゆゑにすべしらましや)(乙)

(そこ故にせんすべ知らに)、(甲)
音のみも
名のみも
絶えず
天地のいやとほ長く
しぬび行かん、
御名にかゝせる明日香河、
萬代までに、
はしきやし我が大王の形見に、
こゝを。

あぢさはふ目辭もたえぬ。」

〔批評〕熱情ほとばしり、又、句法も正しき歌なり。

高市皇子尊城上殯宮之時、柿本朝臣人麿作歌一首並短歌。

〔解釋〕高市皇子は天武天皇の御子なり。天皇の大友皇子を討ち給ふに當りて、皇子將卒を統監して近江軍にむかひ給ひて、大功あり。持統天皇四年に太政大臣に任ぜられ、大政を總監し給ふ。十年七月薨じたまへり。

挂文忌之伎鴨言久母綾爾畏伎、明日香乃眞神之原爾久堅能天津御門乎懼母定賜而神佐扶跡磐隱座、八隅知之吾大王乃所聞見爲背友乃國之眞木立不破山越而、狛劍和射見我原乃行宮爾安母理座而、天下治賜食國乎定賜等、鳥之鳴吾妻乃國之御軍士乎喚賜而、千磐破人乎和爲跡、不奉仕國乎治跡、皇子隨任賜者、大御身爾大刀取帶之、大御手爾弓取持之、御軍士乎安騰毛比賜、齊流鼓之音者、雷之聲登聞麻低、吹響流笛乃音波、敵見有虎可叫吼登諸人之協流麻低爾、指擧有幡之靡者、冬木成春野燒火乃風之共靡如久、取持流弓波受乃騷、三雪落冬乃林爾飄可毛伊巻渡等念麻低聞之恐久、引放箭繁計久、大雪乃亂而來禮、不奉仕立向之毛、露霜之消者消倍久去

鳥乃相競端爾、渡會乃齋宮從神風爾伊吹惑之、天雲乎日之目毛不令見常闇爾覆賜而、定之水穗之國乎神隨太敷座而八隅知之吾大王之天下申賑者、萬代然之毛將有登、木綿花乃榮時爾、吾大王皇子之御門乎神宮爾裝束奉而、遣使御門之人毛白妙乃麻衣著、埴安乃御門之原爾赤根刺日之盡鹿、自物伊波比伏管、烏玉能暮爾至者大殿乎振放見乍、鶉成伊波比廻雖侍候、佐母良比不得者、春鳥之佐麻欲比奴禮者、嘆毛未過爾、憶毛未盡者、言左敝久百濟之原從神葬葬伊座而、朝毛吉木上宮乎常宮等高之奉而、神隨安定座奴。雖然吾大王之萬代跡所念食而作良志之香山之宮、萬代爾過牟登念哉。天之如振放見乍、玉手次懸而將偲、恐有騰文。

短歌二首

久堅之天所知流君故爾、日月毛不知戀渡鴨。

埴安乃池之堤之隱沼乃去方乎不知舍人者迷惑。

〔文字〕小角乃音母、小角、おもしろからず。大角ならばかやうなる折に適すべし。小角にては如何あらん。小角の音が虎のほゆるやうに聞こゆといふこと、普通の人には必ず異樣の感を起さしむべし。且つ、こゝはおほらかに、笛ならば、笛、とのみいひおきてよきところなり。小角大角の區別にまで立ち入る必要なきところなり。但し、小角をたゞフエと訓み、漢字はたゞの宛字なりと見んには、字は小角にても可なるべし。音母のモ、不適當なり。こゝは、皷ノ音ハ……笛ノ音ハ……幡ノ靡ハ……と並べ擧ぐる場合なれば、須らくハとあるべきところなり。此の一句、この二の難あり。然るに、一本の方は笛之音波とありて、この二の難なし。この方採るべし。依りて、今は此の一本の方を採れり。●春去來者野毎著而有火之、此の歌、此の句に至りて調頓にたるみて、甚だ慊ず。「考」に「著きて有る火てふ言、人まろのよめることばとも聞えず」とあり。我が意にあへり。依りて、之を捨てゝ、一本の春野燒火乃を採れり。これにて勢調大にひきしまれり。●太敷座而、この而の字、衍字なりといふ說あり、後にいふべし。●佐母良比不得者の者は而の誤なり。●高之奉、定奉の誤ならんといふ宣長の說、從ふべし。

〔訓讀〕安母理、ヤスモリといふ語、適せず、アモリと訓むべし。●喚賜而、而をツツと訓

むこと、餘りにその時の時代語に拘泥したる訓なり。昔しのまゝにテと訓むべし。●國乎治、こゝは、上句の人ヲヤハセに對する句なる故に、上と同じく命令の形にいひて、クニヲヲサメと訓むべし。●皷之音、ツヾミノオトと訓むべし。●靡如久、ナビクガゴトクと訓むべし。●飄可毛、ツムジカモと訓むべし。●齋宮、イハヒノミヤと訓むべし。●神隨、カミノマニと訓むこと極めて非なり。カムナガラと訓むべきこと勿論なり。以上皆本文につきて改めおきたり。

〔語釋〕挂文、言葉にかけて申さんことも、なり。●忌々之伎鴨、恐多く憚らるゝことかな、なり。ユユシはえらいといふ語にほゞ似たり。●言久母、口に出していはんことも、なり。●綾爾、甚だ、なり。以上二句は次の明日香乃より八隅知之吾大王に至る五句(卽ち、天武天皇)をいひ出すにつきていへる冒頭樣の修飾語なり。●明日香乃眞神之原、大和國高市郡の東部に在り。●久堅能、天にそふ枕詞。●天津御門、御陵のことなり。人死ぬる時は魂天に昇る。よりて、御陵を天にある御殿にたとへていへるなり。●懼母、恐多くも、なり、下の定賜にそふ副詞。●定賜、臣下より御造營申上ぐなること勿論なれども、暫く天皇が御造らせになりたる、御造りになりたる、やうにいひなしたるなり。●神佐扶跡、例の、神樣然となさるとて、なり。●磐隱座、磐の中へ深く御隱れ遊ばして入らせらるゝ、なり。明日香乃よりこゝまでは下の吾大王にそふ修飾語なり。●八隅知之、大王にそふ枕詞。●吾大王、天武天皇の御事なり。是より以下天皇御在世の頃の事を述ぶ。●所聞見爲、御支配遊ばす、なり。●背友乃國、背面(ソツモ)の國にて、北の方の國の事なり。ここにては美濃國のことをいふ。●眞木立、眞木は青々と繁りたる常磐木のことなり。常磐木の並び立ち生茂れる、なり。不破山の修飾語なり。●越而、天武天皇が越えて、なり。●狛劍、高麗劍、なり。高麗劍にはつかの頭に大きなる輪あり。これによりてワといひ出す爲の枕詞となれり。●和射見我原、不破郡に在り。●安母理座而、天降(アマオリ)いまして、なり。天皇の宮所より邊僻なる行宮に御出かけになるを、天より下界に降りたまふにたとへて、いへり。●治賜、天下を平安にせんとてなり。下の句の等につきて、平安にせんとて、の意になる。●食國、天皇の御領國、天皇の支配なさる國、なり、卽ち、日本國なり。●定賜等、平定したまはんとて、の意なり、此句上の句と、對句になりをり。●鳥之鳴、アヅマにそふ枕詞。●吾妻乃國、關東の國、なり。●御軍士、漢字にて書ける通、軍兵の意なり。●喚賜、召し賜ひて、なり。●千磐破人、勢猛きものども、の意なり。此處は天皇に服從せざる人々

をさしていふなり。◉和爲跡、やはらかにせよと、なり。暴れ狂ふものどもをなだめすかして和ぎ親ませよと、なり。跡はとてのとなり。◉不奉仕、服從し奉らぬ、なり。◉治跡、平定せよと、なり。この二句は對句にて、天武天皇の高市皇子に命じたまひし御命令なり。◉皇子隨、隨、例の、今の語にては說明しがたき語。◉任賜者、天皇が皇子に御任じになつたので、なり。そこで皇子はと言葉を下に補なひて聞くべし。◉大御身、皇子の御身、なり。大は美稱語なり。◉取帶之、取り、は勢をそふるだけの語、お帶びになり、なり。◉安騰毛比賜、御引率遊ばして、なり。以下五件、不整の對句となりをり。◉齊流、一整に拍子をそろへて打ち鳴す、なり。◉雷之聲登聞麻低、雷の鳴るのかと思ふ位に、なり。◉吹響流、吹き鳴らせる、なり。◉敵見有、敵を見たる、なり。所謂敵愾心を起したる、なり。「古義」には敵見有は寇而有なり、寇んだると云ふが如し、敵を見たるといふにはあらずといへれど、是れ徒らに辯を好みたる言なり。つまりは同じことに落つるなり。◉虎可叫吼登、カは疑のテニヲハ、虎がほゆるかと、なり。◉指擧有、指し擧げてもちて行く、なり。兵の多きことを示し、敵をおどし御方を勵す爲に、旗を數多立て行きたるなり。◉靡、旗のひら〳〵としてゐるところをいふ。◉冬木成、春にそふ枕詞。◉春野

燒火、春、畑の枯草などを燒きて一には畑を作る爲にし、一には肥料にするなり。普通に野火といふ。◉風之共、風の吹くまに〳〵、なり。◉弓波受乃驟、弓の端に角又は骨にて作りたるものあり、之を弭といふ。弓を動す爲に、この弭の鳴る樣に作りたるを鳴り弭といふ。敵をおどす爲に鳴るやうにしたりと見ゆ。驟はその弭の鳴る音のさわがしきをいふなり。驟の下にハといふテニヲハをそへて聞くべし。ハをそへずして、驟を主格ぞと心得てよめば、よろし。◉三雪落、冬の修飾語、なり。三は借字にて、たゞの發語なり。◉飄可毛、伊卷渡等念麻低、つむじが卷き渡れるかと思ふまで、なり。カは疑のテニヲハ、モは感動詞、イは發語にて意味なし。旋風が枯木林に卷き渡り來るかと思はるゝ程、なり。◉聞之恐久、きくことが恐ろしき、なり。その音をきくことが恐しきなり。◉箭繁計久、箭の繁きことは、なり。繁計久、主格なり。◉大雪乃、このノ、例のノ如クと解してよきノなり。正しくは「大雪の亂れて來るが如く」といふべきなり。◉亂而來禮、矢が亂れて來る、なり。來禮、キタレバといふ意になるなり。キタノデソコデ、といふ意になる。語、意、共に半切れて半續くやうのいひかたなり。萬葉に常にある語法なり。◉立向之毛、立向ひし者等も、なり。◉露霜之、消にそふ枕詞なり。露霜

は露になりたる霜といふことにて、とけたる霜、卽ち、所謂氷霜のことなり、消えやすきものなるが故に、消(キエ)の枕詞となるなり。●消者消倍久消えなば消えぬべしといふ勢にて、と譯すべきか。死ぬものならば死んでしまはうといふ意氣込にて、の意なり。●去鳥之、あらそふにかゝる枕詞なり。立ち行く鳥の我先きにと飛び行くより、爭ひて行くことをいふ語の枕詞となれるなり。●相競端爾、互に先鋒を競ひて進み來る程に、なり。はしには間にの意なり。●渡會乃齋宮從、伊勢國渡會郡にまします天照大神の宮より、なり。齋宮は大神に仕へたまふ皇女を申すがつねなれど、こゝにては直に太神の御殿をさしていふなり。宮從宮の方より、の意にとる。●神風、神のおこしたまふ風をいふ。爾、にて、で、で以て、なり。●伊吹惑之、伊は所謂發語にて、たゞ勢をそふるまでのもの、吹惑は下の天雲を吹きちらす、なり。●日之目毛不令見、太陽の顏も見せず、太陽の光も見せず、なり。●常闇爾、常は永久なり、永久の闇に、眞暗やみに、なり。●覆賜而、天照太神が神風にて吹き惑はし給ひたる天雲を以て日の光も見えぬやうに眞暗闇に天一面に覆ひ賜ひて、なり。語の順序、テニヲハのつかひざまに、少し無理あれど、まづ、この意味にとるべし。●定之、平定したるなり。誰が平定したるか。前文の續け方にては天照大神が定められしやうになれども、こゝは正に天武天皇がなるべし。然らば、言葉遣、餘りに疎なり。常闇に覆ひ賜ひしは天照大神なれば、「常闇に覆ひ賜ひなどして、御加勢ありたれば、天皇の軍大に奮ひ起りて勇戰し、終に近江方の軍を亡ぼして、かくして、定めてし」といふやうなる語を補なひて解くべし。歌とはいひながら、無理はいづこまでも無理なり。●水穗之國、この日本國なり。●神隨、天皇は身を現はして居たまふ神、(現津御神(アキツミカミ)といふ)なるが故に、神ながらといふ。ながらは例のながらにて、適當なる解釋語なし。●太敷座而、しつかりと御治め遊ばして、なり。さてこの句から「太敷きまして、八隅知之吾大王の天下申賜へば、」とつゞきては、太敷座も申賜ふも同一人のすること、卽ち、高市皇子のしたまふことゝなりて、不都合なり。高市皇子のしたまふことは吾大王の天下を申賜ふことにして、水穗國を神ながら太敷き座すことは天武天皇のしたまふことならざるべからず。それには太敷座而の而字不都合なり。依りて「古義」には而は衍字なるべしといひて、上の三字をフトシキイマスと訓み、直ちに下の吾大王にそふ修飾語としたり。是或は然らん。然かも讀本皆かく座而とありきと見えて此處には一も註なし。されば、之を衍字なりとせんこと、妄りに贊成しがたし。

或は、此處の處、太敷座而八隅知之とつゞく文句にて、八隅知之も本來然か太敷座而等に續くべき適當なる意義を有せる語にはあらざるか。なほ考へて見るべし。よき考のいで來ぬ間は暫く「古義」の說に從ひて、ふとしきいます吾大王とつづくものと心得おくべし。●吾大王、天武天皇のことなり。さて、茲にまた例の不都合あり。高市皇子の天の下申し賜ふやうになりたるは、持統天皇の四年七月に皇子の太政大臣になり給ひし時よりなり。天武天皇の近江朝を亡ぼして天位に卽き給ひし頃は勿論、九年には日並知皇子立ちて皇太子となり給ひて萬機を攝し給ひ、朱鳥元年に天皇の崩じ給ひて皇后(後に持統天皇)の制を稱し給ひし時にも、日並知皇子引續き皇太子として大政を執り給ひしかば、高市皇子は尙ほ大政に與りたまはず、その大政に與りたまひしは、日並知皇子の薨去後、持統天皇の四年より後のことなり。されば下へつゞきて「大王の天下申し賜へば」といふ場合の大王は持統天皇の御事ならざるべからず。卽ち、先の日並知皇子尊殯宮の時の歌の「高照日之皇子」の、上より見れば瓊々杵尊ならざるべからずして、下より見れば、天武天皇ならざるべからざると等しく、こゝの吾大王も上より見る時は天武天皇ならざるべからずして、下より見れば持統天皇ならざるべからざるなり。人麿一流の省略法なりといはゞいへ、贊成することの出來ざる省略法なり。●天下申賜、天下の政事を執りたまふことなり。天子には知ろしめす、聞こしめすといひ、太政大臣には申したまふといふ、大政を天子に申上げたまふといふ、意なり。高市皇子が大政を攝したまふをいふなり。●萬代、萬年の後までもなり。●然之毛將有登、然はさう、しは意を强むる意味のテニヲハ、もは感動詞、將有はあるだらう、なり。卽ち、千年萬年の後までも皇子があゝやつて大政をお執り下さるだらうと、なり。●木綿花、木綿花乃、榮ゆるにそふ枕詞。木綿はモメン、又ワタ。こゝにてはワタなり。木綿花はワタにて造りたる花なり。當時美しと人々賞翫したりと見ゆ。是によりて榮ゆるの枕詞となりたるなり。乃は例のノ如クの意にとり得るノなり。●榮、繁榮の意なり。笑み榮えなどともいひて凡て元氣よく、嬉しげに、樂しげに、滿足してゐる有樣をいへる語なり。さて、こゝの榮ゆるを「考」も「古義」も皆高市皇子の榮え給ふこととせり。二家ともに然か見て、上の句よりの續きざまを了解し得たりと思惟せしにや。皆非なり。こゝは人民どもが、萬代に然かあらんと喜びて、元氣よくくらして行くことをいひたるものと見ざれば、わからざるべきところなり。言語の解、品物の解等につきて

はよく深く委しく考へながら、事がらのすぢにつきてはいと疎かなること、古人の通弊なりとやいはん。諸種の註釋書などを見んもの、よく〳〵注意すべし。

●吾大王皇子之御門乎、吾大王たる皇子の御殿を、なり。高市皇子を尊びて吾大王といひたるなり。●神宮爾裝束奉而、殯宮に飾り直すなり。昨年の御大喪に宮中の正殿を殯宮にしつらはれたるが如くに、從來住み給ひたりし御殿を殯宮に改め飾られたるなるべし。●御門之人、舍人等のことなり。●白妙乃、衣にそふ枕詞。●麻衣、麻にて織りたる素服(しろき)なり。喪服としてきるなり。藤衣、麻表、皆素服にて喪服として着たるなり。●埴安乃御門之原、埴安の池近く御門あり、この前の廣場をかくいひしなるべし。●赤根刺、日(ヒ)にそふ枕詞。●日之盡、日の盡るまで、終日。●鹿自物、鹿的に、などいふべき意の語、はひ伏しにそふ枕詞。●伊波比伏管、伊は例の發語、はひふすは地上にはひ伏す、なり。管、ながらなり。●烏玉能、黑、暮、夕、夜、闇等にそふ枕詞。ぬば玉はカラスアフギ、卽ち、ヒアフギの實なり、ヒアフギの實は色の眞黑なるものなるが故に、ぬば玉のは黑にそふ枕詞となり、それよりうつりて、また夜、闇、暮、夕等にもそふととなりたるなり。●振放見乍、遠く仰ぎ見つゝなり。●鶉成、成はノゴトク。ノ爲ルガ如クの意の語。はひもとほるにかゝる枕詞なり。●伊波比廻、伊は例の發語、波比廻はその邊を徘徊することなり。あつちへゆきこつちへ行きすることなり。●雖侍候、佐母良比不得者、御召があるかと思つて、侍りゐても、一向にお召がなき故に、いつまでも侍りゐるわけにも行かずして、の意なり。●春鳥之、さまよふにそふ枕詞。之は例のノ如クのノにて、春鳥のさまよふが如くさまよふといふ意より枕詞になりたるなり。●佐麻欲比奴禮者、上に記せるさまよふは遊びありく方のさまよふなるが、こゝのさまよふは悲みなげきてさまよふなり。奴禮者はさまよつてゐればといふをつよくいひたる位のものなり。●未過爾、いまだ去らざるに、なり。●憶毛、悲む心も、なり。●未盡者、このいひ方萬葉の一特例なり。訓はいまだつきねばとよみ、意はいまだ盡きないのにといふことになる。●言左敝久、百濟にそふ枕詞。●百濟之原、北葛城郡の東端に在り。●從、よりなり。を通りて、の意なり。●神葬葬伊座而、神はたゞ勢をそふるためにそへたる語。皇子薨して神となりたまひきと見て、この語をそふ。神葬葬、調を調へ勢をつくる爲に同一語をくりかへしたり。かく、くりかへすを重語法といふ。御送葬申して、なり。●朝毛吉、キにそふ枕詞。●常宮、永久の御殿、御墓。●神隨、既に神となり給へる故に神ながら

といふ。●安定座奴、此の御陵の内へおはひり遊ばしてしまへり、なり。奴は已了の意の助動詞といひて、凡て事の落着したる場合につかふ語なり。●吾大王、高市皇子のことなり、萬代跡、萬代までもつゞけと、なり。●作良志之、御作りになりし、なり。●萬代爾、萬代までも、の意なり。●過牟念哉、過は變ることなり。念は例の輕くそへたるものと見て、假りに省きて見るべし。哉は反語の意のヤなり。變り行かうや、否、變り行きはせじ、なり。この語の上の語につゞくつゞき方、少しをかし。下の語を過ぎやうや、否、過ぎまじとしておきて、さて上の語につゞけて、萬代まですぎまじとして見るべし。萬代に過ぎんや、否、過ぎまじとしては解し難し。●天之如、天を仰見るが如く、なり。●玉手次は懸るにそふ枕詞。●懸而は皇子の御事を我心にかけて、なり。●恐有騰文、恐多いことではあるけれども、なり。

●天所知流、天へ上りたまひしといふことなり。薨去遊ばしたることを婉曲にいひたるなり。●君故爾、皇子の爲に、なり。●日月毛不知、月日の經過するのも知らぬ位に、なり。

●隱沼乃、草深くして、水の流れ行く路も見えざるやうなる沼を隱沼といふ。乃、例のノ如クのノなり。此隱沼の水の流れ行く先のわからぬが如く、の意なり。去方乎不知といふ爲の序にしたり。

〔歌意〕我々如き者の口に出して申さんは誠に恐多きことながら、明日香の眞神の原に御陵を定め給ひて、其内に深く鎮り座す天武天皇の、北の國の美濃の國の不破山を越えて、和射見が原の行宮に御進發遊ばされて、天下を平定せんとて、東國の軍兵を召集し給ひ、高市皇子には特に、暴れ狂ふ民どもを鎮撫せよ、歸順せぬ國々を征服せよと命じ給ひしかば、皇子は、乃ち、身親から太刀を佩び弓矢を取り給ひて、軍兵等を引率して、その打ち鳴らす大鼓の音は百雷のおつるかと思はる位、吹き鳴らす笛の音は怒りたける虎の吼ゆるかと人々のおそれおびゆる位、指擧げたる幡の風に動くさまは野火の風のまに〳〵靡き動く樣、持ち行く弓の弭の鳴音は冬枯の林につむじが吹き卷くかと人々のこわがる位、射出す箭の多きことは恰も大雪の空より亂れて降り來る樣なり。されば、從はずして手向ひ來る者どもも、身を捨て命を捨てゝ競ひかゝり來りしほどに、あやしや、伊勢渡會の神宮の方より神風を起して、天雲を吹き亂して、天日をかくし地上をまつ暗闇に覆ひ給ひて、(かやうに御加勢ありしかば、天皇の軍、大に力を得て、奮戰して、遂に、近江方

を打破り、かくして)平定せさせ給ひしこの日本國を、現つ御神として統治し給ふ我大王(天武天皇……持統天皇)我大王の御支配遊ばす天下の大政を、高市皇子の、太政大臣として、執り行ひたまへば、人民どもは大に喜びて、千代萬代までもかくてあらん、かくてあれかしと、喜び勇みて、世の生業を營みをるに、(何事ぞや)、吾皇子の御殿をば神宮に改め裝ひ、使はれたりし人々も白き喪服をきて、埴安の御門の原に終日伏し居り、日暮れて夕になれば、御殿を仰ぎ見つゝ、そのあたりに侍らひをれど、一向に御用も仰出されず、御召しになることもなければ、侍らひをるわけにも行かずして、あちらこちらと迷ひ行くに、(其時になりぬとて)、我々の悲も思もいまだ盡きざるに、夙く御葬送の儀式を調へて、御葬列は百濟の原を通りて、木瓜の御陵に至り、此處に永久の御殿を定めて、御遺骸は此處に鎮まり給ひぬ」。(是に至りて、我々は、最早、我々の朝夕仰ぎ奉り、御奉仕申上げたりし皇子を、再び拜し奉ること叶はざることになりてしまへり。誠に悲しきことなり)。然れども、我が皇子の萬代まで廢頽せじと思召して御造營遊ばしたるかの香具山の宮、かの香具山の宮は、萬代まで廢頽するやうなることあらんや、あらじ、廢頽はせじ。されば、甚だ恐多きことなれども、せめては、この御殿をば皇子の御形見として天を仰ぎ見るが如くに仰ぎ見て、皇子の御事をば心にかけていつまでも偲び奉らんよ。薨去遊ばされたる皇子の爲に、月日の過ぐるも知らざるまでに戀ひをることかな。(いくら戀ひたりとて甲斐もなきことなるに、あゝ。)

埴安の池の堤の邊にある隱沼の以上「行方を知らに」の序水の流れ行く先きのわからぬが如く、いづち行けばよきか、行くべき方わからずして舍人等はまどひをるよ。

〔批評〕「代匠記」に此の歌を評して、「以上百四十九句、集中第一の長篇なり。人麿の獨歩の英才を以て皇子の大功を述べて薨去を奉慟らるれば、誠に不朽を月日に懸けたる歌なり」といへり。適評といふべし。

〔句法〕例に依りて左に圖にして示す。

掛けまくもゆゝしきかも
言はまくもあやにかしこき明日香の眞神の原に久堅の天つ御門をかしこくも定め給ひて神さぶと磐がくります八隅知之吾が大王の
きこしめすそともの國の眞木立つ不破山越えて
こまつろぎわざみの原の行宮にあもりゐまして、
天の下始めたまひ
食國を定めたまふと
鳥が鳴く吾妻の國の御軍を召したまひて、
ちはやぶる人をやはせと
まつろはぬ國を始めと
皇子ながらまけたまへば、
大御身に大刀とりおびし
大御手に弓とり持たし
御軍をあともひたまひ、

とゝのふる鼓の音は雷の聲ときくまで、
吹きなせる笛の音はあだみたる虎かほゆると諸人のおびゆるまでに、
さゝげたる幡の靡きは冬木もり春野やく火の風のむた靡くが如く、
とりもてる弓弭のさわぎみ雪ふる冬の林につむじかもいまき渡ると思ふまで聞きのかしこく
ひきはなつ矢の繁げけく大雪の亂れて來たれ、
まつろはず立向ひしも　露霜のけなばけぬべく　行く鳥のあらそふはしに、
渡會の齋宮ゆ　神風にいふきまどはし　天雪ぢ日の目も見せず　常闇におほひたまひて
定めてし
水穗の國を
神隨ふとしきいます
八隅知之我が大王の天の下申したまへば、
萬代に然かしもあらんと　ゆふ花の榮ゆる時に、
吾が大王皇子の御門を神宮によそひまつりて、
遣はしゝ御門の人も白砂の麻衣きて、
埴安の御門の原に赤根さす日のことゞくししものいはひ伏しつゝ、
ぬば玉の夕になれば、大殿をふりさけ見つゝ、
うづらなすいはひもとほり侍らへど、
侍らひかねて
春鳥のさまよひぬれば。

なげきもいまだ過ぎぬに
憶もいまだつきねば、
ことさへぐ百濟の原ゆ　神はふり
はふりいまして
朝もよしきのへの宮を常宮と定めまつりて
神ながら鎭まりましぬ。
然れども、
吾が大王の萬代と思ほしめして造らしゝ香山の宮、
萬代にすぎんと思へや。
天の如ふりさけ見つゝ
玉だすきかけて偲ばん、
かしこかれども。

柿本朝臣人麿妻死之後泣血哀慟作歌一首幷短歌

〔解釋〕この端詞によりて見る時は同一人の死せし妻を悲しみて二首の長歌幷短歌を作りたるやうに見ゆれども、事實は然らず。この端詞の書き方甚だ惡ろし。歌によりて見るに、妻は二人なり。一人は子なく、一人は子ありしなり。而して子ありし方は正妻なりしが、子なかりし方は正妻にあらずしてかくし妻なりしも。共に大和に住みしものにして、かの石見に住みしものとは別なり。なほ、後

に妻依羅娘子といふがあり。これも正妻なり。されば、人麿には、結局少くとも四人の妻ありしわけになるなり。即ち、一人は正妻にして子あり、大和に住みて人麿に先ちて歿し、一人はかくし妻にして子なく、これも大和に住みて人麿より先きに歿したり。次は、依羅娘子にして、これは正妻なり、大和に住みて、人麿歿後まで長らへ、人麿の石見にて歿したるに依りて寡婦となれり。いま一人は正妻にあらず、石見にて通ひ住みしかくし妻なり。正妻にてもかくし妻にても當時は皆妻といひしなり。その心にて讀み見るべし。

天飛也輕路者、吾妹兒之里爾思有者、懃欲見騰、不止行者人目乎多見、眞根久往者人應知見、狹根葛後毛將相等、大船之思憑而、玉蜻磐垣淵之隱耳戀管在爾、度日乃晩去之如、照月乃雲隱如、奥津藻之名延之妹者、黄葉乃過伊去等、玉梓之使乃言者、梓弓聲爾聞而、將言爲便世武爲便不知爾、聲耳乎聞而有不得者、吾戀千重之一隔毛遣悶流情毛有八等、吾妹子之不止出見之輕市爾吾立聞者、玉手次畝火乃山爾喧鳥之音母不所聞、玉桙道行人毛獨谷似之不去者、爲便乎無見、妹之名喚而、袖曾振鶴。

短歌二首

秋山之黄葉乎茂迷流妹乎將求山道不知母。

黄葉之落去奈倍爾玉梓之使乎見者、相日所念。

〔文字〕梓弓聲爾聞而「考」も「古義」も一本の「聲耳聞而」の方を採れり。予は下の聲耳乎聞而云々を今のまゝにさしおかんには、こゝも今のまゝにてもよかるべしと思ふ。その理由次にいふべし。聲耳乎聞而有不得者、是れ贅物なり、削除すべし。此の歌こゝに至りて調たるみて、甚だ聞きぐるし。削るべし。「考」には辯護めきたる說あれども、從ひ難し。さて、この句を削るとすれば、前の聲爾聞而は聲耳聞而とする方優れり。されども、もし此句をこのまゝに存すとすれば、前の句は重複になりておもしろからず、心持の方より見てもたゞ聲爾聞而とあるを優れりとすべし。

〔訓讀〕晩去之如、クレユクガゴトと訓む方よし、改めたり。●情毛有八等、有八、アリヤと訓む說あり。いづれにても可なり。

〔語釋〕天飛也、カルにそふ枕詞。●輕路、輕は大和國高市郡白橿村の東部に在り。輕路は輕の町、ぐらゐの意なり。●里爾思有者、住める里であるから、なり。爾はニテ、思は强むる意のテニヲハ。●懃、ねんごろに、なり。疎かにの反對、ようく、なり。●欲見騰、見むことが欲しくあれども、なり、見んことを欲すれども、見たくはあれども、なり。●不止行者、輕へ始終行くならばなり。●人目乎多見、人目が多いので、なり。他人が皆目をつけて、かれこれいひたりなどするから、の意。●眞根久、度々なり。間無く、間斷なく、といふ語ならんといふ。●人應知見、人が知りそうなので、知りそうであるから、なり。凡て形容詞の語根にみのそひをる場合には……くてと譯して大抵當るべし。而して、意味は多くの場合に、……さに、……いので……いからなどと解して當るべし、場合によりてはたゞ……くて、そして、と解して適するところもあり。●狹根葛、蔓草にて、俗にビナンカツラといふ。枝多くて、互ひに入りまじるところより、後もあはんといふ語をいふ爲めの枕詞にしたり。●後毛將相等、今より後にもまたあふ機會いくらもあるべしと、なり。

後にははれて夫婦になる時あらんと、など解ける「古義」の說は餘りに行き過ぎたり。●大船之、思憑にそふ枕詞。●玉蜻、磐、石にそふ枕詞。●磐垣淵之、周圍を磐のとりかこめる深き淵の如く、なり。さやうなる淵は人目にもかゝらず隱れこもりをるものなれば、下の隱耳をいはん爲にいへるなり。序詞なり。●耳隱、こもりてのみ、なり。人目にかゝらぬやう、引籠りてばかりゐて、なり。●戀管在爾、戀ひ〳〵して暮してゐる處に、(豈に圖らんや)、なり。●度日、太陽のこと。東より西に大空を渡り行く故に、わたるといふ。●奥津藻之、之、例のノ如クのノなり。なびくの枕詞となれり。●黃葉乃、紅葉の散りすぐといふ意より、過ぎ去りにしにそふ枕詞となれり。●過伊去、こゝにては死せしこと、身まかりしこと、なり。●玉梓之、使にそふ枕詞。古は消息せんとするに文、手紙等固よりなかりし故に、使に梓の木に玉を飾りたるを持たせてやり、夫を使のしるしにせしなるべし。夫より玉梓といへば使、使といへば玉梓、といふ樣なる聯想の離れざるものとなり、遂に玉梓之は使の枕詞となるに至りしものなるべし。而して一方、玉梓は、また音信、文章、手紙、に代はる名稱となりたるなるべしといふ。●梓弓、音にそふ枕詞。鳴弦ありて弓をひく毎に音するより、枕詞となりしなるべし。●聲爾聞而、

使の通知に聞きて、なり。聲耳聞而、をとれば、使の報知だけ聞きて、の意となる、●將言爲便世武爲便不知爾、なんといつてよいか、どうしてよいか、わからなくて、の意。すべは方法、術、なり。●聲耳乎聞而有不得者、報知ばかり聞いてをるわけにいかないから、なり。此句不用なり。いはんすべせんすべしらに、より直ぐに次の句に續きてよし。●千重之一隔毛せめて千分の一でも、の意なり。●遣悶流情毛有八等、心のなぐさむこともあらんか、との意なり。やは疑の意のテニヲハ。●不止出見之、始終出で見しなり。こゝもたゞ度々出て見しぐらゐの意にとりておきてよかるべし。「古義」の如く、人麿の通ひ行くを出て待ち見し、とやうにとらでもよからん。●輕市、輕の大通なるべし。市場の開かれしところなるべし。●吾立聞者、人麿が立ちて近傍を見廻して耳を立てゝ聞けば、なり。●玉手次、畝火にそふ枕詞。●畝火山、輕の市此近處に在るなり。●啼鳴之、音も聞えといひ出す爲の語なり、卽ち玉手次より啼鳥之までは音母云々といふ爲の序詞なり。失せにし妻の聲もせぬ、妻の聲に似たる聲もせぬ、の意なり。●玉桙、道にそふ枕詞。梓の身といふところより、道の枕詞となれるなり。●獨谷、谷は宛字、獨りも、せめて獨でも似てゐるものが行けばいいとおもふに、あいにく一人も、といふ意

なり。●似之不去者、似は他人の亡せたる妻に似て、なり。之は例の強むる意のテニヲハ。不去者、行かないから、なり。●妹之名喚而、亡せにし妻の名を呼びて、なり。●袖曾振鶴、先にもいへりし如く、人の戀しき時にこの戀しき心をあらはす爲に我の袖をふるなり。聞き度き聲も聞かず、見度き姿も見られぬ故に、戀しき心に堪へかねて、妻の名を呼びて袖をふりたり、となり。●黃葉乎茂、黃葉が繁いので、なり。●迷流、妻の山に入りて、出で來る路がわからなくなりたる意。「古義」には妻が紅葉を賞るとて山に入りて、紅葉の繁きに迷ひたるやうにとりをれどもそは餘りなり。そこまで立ち入る必要なし。こゝは妻亡せて山に葬りたるを、妻が自から山に入りて路に迷ひて歸り來ぬ、とやうに見なしたるだけなれば、たゞ山に入りたりと見ておきて、十分なり。迷流は、マドハセルと訓むときは迷つて入らつしやる、又はお迷ひになつて入らつしやる、といふ敬意を含みたる語となる。サマヨヘルと訓めば、たゞ迷つてゐる、といふことになる。●奈倍爾、一方にかういふことあり、それと同時にまたかういふことあり、といふ場合につかふ語なり。ト同時ニなど譯すべきか。云々する折に、など解せば、最

もよくわかるべし。●相日、曾て相逢ひし日、なり。●所念、おもはるゝ、なり。のやうな氣がする、と譯してよし。

〔歌意〕輕の路は我が妻のすめる里であるから、ねんごろに見度い、とは思ふけれども、度々行けば、人目も多く人も知つて、かれこれともいふから、まあ、また後もいくらも逢はれるだらうと、夫を憑みにして、獨り我家に籠りて、私かに彼を戀ひゐたるに(豈に圖らんや)、使が來て、妻は太陽の西山に沒する如く、月の浮雲にかくるゝが如く、はかなく身まかりてしまへりといふに、之を聞いて、おどろきあきれて、何といつてよいか、どうしてよいか、ちつともわからず、たゞ知らせだけ聞いて悲しんでをられないので、又ハ、その知らせを聞いてのみ、はたゞ強めていふだけのものとる、何といつてよいか、どうすればよいか、一切わからないで、せめては我悲しみ戀ふる心の千分の一もなぐさめることが出來るかしらんと思つて、吾が妻がよく出でゝ立ちゐし輕の市に行つて、さて吾が妻に似たるものが通るかしらんと見廻しても、一向妻の聲らしき聲も聞こえないし、一向妻らしき姿した婦人も通らないので、もう、此上はどうしたらいゝか、途方にくれてしまつて、遂に、妻の名を喚びて、袖を振りたるよ。

秋山の黃葉が餘りに繁つてゐるのでつひ路を失つて、歸つて來ることが出來ずに迷つてをらるゝ妻を探しに行きたいと思ふが、その行くべき道を知らない。(あゝ、早く探しあてゝ連れて歸りたいものだ。)〔妻の死して山中に葬りたるを忘れて、妻の山に入りて還りくべき路を失ひてえう還らずにゐるとやうに思ひたるさまによみなしたるなり〕

今紅葉の散り行くを見てゐる折しも、丁度他より使の來たるを見れば、折が折として、曾て妻より來れといひておこして、自分の直に行きて逢ひたりし日のやうな氣がするよ。(紅葉はその折の如く今も紅葉してをり、使もその折の如く、かく我が家に來れるに、妻は、あはれ、かの妻は既に此の世を去りて再び相見んよしもなきにあらずや。あゝ。)

打蟬等念之時爾、取持而、吾二人見之、趨出之堤爾立有、槻木之己知碁智乃枝之春葉之茂之如久、念有之妹者雖有、憑有之兒等爾者雖、世間乎背之不得者蜻火之燎汚荒野爾、白妙之天領巾隱、鳥自物朝立伊麻之豆、入日成隱去之鹿齒、吾妹子之形見爾置有、若兒也乞

泣毎、取與物之無者、烏德自物腋挾持、吾妹子與二人吾宿之枕付孺屋之内爾、晝羽裳、浦不樂晩之、夜者裳、氣衝明之、嘆友、世武爲便不知爾、戀友、相因乎無見、大鳥羽易乃山爾吾戀流妹者伊座等、人之云者、石根左久見手名積來之、吉雲曾無寸、打蟬跡念之妹之珠蜻髣髴谷裳不見、思者。

短歌二首

去年見而之秋乃月夜者雖照、相見之妹者彌年放。

衾道乎引手乃山爾妹乎置而、山徑往者、生跡毛無。

或本歌（三首の内の一首）

家來而、妻屋乎見者、玉床之外向來、妹木枕。

〔文字〕形見爾置の下に有の字落ちたり。いふ「考」の説、從ふべし。又、狹は挾の誤なること明し。●烏德自物腋狹持、烏穗は烏德の誤なりと

誤なること明けし。●吉雲曾無十、十は寸の誤なること明けし。●家來而吾屋乎見者、吾は妻の字にやといふ「考」の考、採るべし。以上皆、今補ひ、又は改めたり。

〔訓讀〕隱去之鹿齒、隱の字、前に天領市隱と訓めり。されば、こゝは、カクリニシカバと訓む方優るべきか。カクレにてもあしきにはあらず。●若兒乃、「古義」にワカキコノと訓むべしといへり。よかるべし。

〔語釋〕打蟬、現身なり。●打蟬等念之時爾、念之は輕くそへたる語なり。即ち、打蟬の時に、なり、生前に、なり。●取持而、手を携へて、なり。手を取りあひて、なり。●見之、出て見し、なり。●趨出之堤、直きそばにある、家より一寸出づれば直きそばにある堤、なり。●己知碁智乃枝之、己知碁智はあちこちなり。彼方へ、又、此方へはつてゐる枝の、なり。●春葉之茂之如久、槻の木の枝に春になれば葉繁くいづるその葉の如く、しんみりと、又は、ねんごろに、の意なり。●念有之、思つてゐた、なり。●憑有之、頼みにしてゐた、なり。●世間乍、無常なり老少不定なり、とやうの定れる規のある世の中を、なり。即ち、この世の中は無常なりといふ規則に、なり。●背之不得者、さやうの規則に違反することが出來ないから、なり。之は例のつよむる意のテニヲハなり。●蜻火、陽炎なり、春又は、秋、野の草の上にちら〳〵と立

ちのぼるやうに見ゆる氣なり。●白砂之、こゝにては白き布のことなり。●天領巾隱、天領巾はもと天人のかくる領布なり。領布といふは幅狹き長き布にてヒラ〳〵とせるものなれば、ヒレといふなり。天人の繪、辨才天の繪などに頸より腕の邊にからまりてひら〳〵とせる細長き布あるべし、それなり。こゝは、そのヒレにかくれて、なり。いふ意は、歩障とて、葬禮の時、柩の左右に立て、柩をかくしつゝ行く布の幕の如きものあり。この歩障を、死して靈の天に昇るといふところより、天人の領巾にたとへ、この歩障にかくれ行くを天領巾がくりといひたるなるべし。歩障を立て行くことは送葬の古圖に屢々見るところなり。●鳥自物、鳥的になり。鳥の朝早く巣を出でて飛び去るより、朝立いましてにそへていへるなり。●朝立伊麻之豆、朝立ちたまひて、なり。送葬を朝行ひしと見えたり。●入日成、成はの如く、なり。入日の山にかくれ行くが如く、なり。●形見爾置有、形見としておいて行つた、なり。●取與物之無者、子供に取りて與ふべきものがなき故に、なり。子供をだましすかして、だまらせんとするに、與ふべきものなきなり。之は例の強むる意のテニヲハなり。●烏德自物、男的に、なり。抱き方かゝへ方の疎暴にて凡て拙き

をいふなり。●枕付、つま屋にそふ枕詞。孀屋は夫婦相寢ぬる處にて、此處に夫妻の枕ならべてすゑつけあるによりて、この語、孀屋にそふ枕詞となれるなり。●晝羽裳、夜者裳、この二つのモ、いづれも感動詞なり。無意味なり。晝は、夜は、といふに同じ。●浦不樂晚之、ウラは心の中のこと、サビはさびしくのさびにて、心浮立たず、憂鬱なること、晚之は日を暮すこと。卽ち、毎日々々なげき悲しみて日を過すことなり。●氣衝明之、ため息をつきなげきつゝ夜をあかすことなり。●相因乎無身、一旦身をかりたる妻なれば、再び逢はん術がなくて、なり。●大鳥、羽といはん爲の枕詞なり。●羽易乃山、奈良の春日山の邊にあるなるべし。●石根左久見手磐の根のある處をサク〳〵と(卽ち、ザク〳〵と、又はガチヤ〳〵と)音立てゝ歩み行くことなり。●名積來之、艱難辛苦して歩み來しことなり。●吉雲曾無寸、よけくは吉き事、詮、甲斐効、なり。モゾ、モもゾもテニヲハ。さやうにして來りし甲斐もなし、となり。●打蟬跡念之、生きてゐると思ひし、又は、生きてゐる筈の、なり。●珠蜻、ほのかにそふ枕詞。●髣髴谷裳、ダニはこゝにては意味を強むるテニヲハ。ほのかにすらも、幽かにすらも、なり。●不見思者、見えざるを思へば、なり。生きてゐるといふ妻の、來て見れば、ほのかにすらも見えざる

を思へば、實にほねををりて、尋ね來し甲斐なかりけり、となり。

●去年見而之、去年見た、なり。テシは過去のことを力を強めていふいひかたの語なり。

●年放、年數多遠放(トホザカ)りゆく、なり。

●衾道乎、二說あり。一說は、衾道を地名と見、乎を感動詞樣のものと見て、衾道の……、衾道に在る……と見る。一說は、衾道乎を衾乳を、と解して、衾の乳を引くといふ意に見て、引手の山にそふ枕詞とす。後說の方勝るべきか。但し、衾道引手山、在り所、今、不明なり。

●玉床之外向來、玉はほめたる語、妻の枕の、妻の床の上に於て、あるべき位置にあらず、傍へ打やられてあらぬ方に向ひをり、といふことなり。●木枕、木にて作りたる枕なり。

〔歌意〕生前に互に手をとりあひて、我々夫婦が出て見たりし、家のそばの堤にはえてゐる槻の木、その槻の木のあちこちの枝の葉は、春は青々と繁くよく茂るが、この春の葉の如くにしみ〴〵と思ひ、又憑にもして居たりし妻なれど、彼も無常といふ世間の定則には背くこと叶はずして、俄に身亡せにしかば、我が妻の、形見として我に殘し行きし子供の乞ひ泣く毎に、やるべきものがなきゆゑに、なれぬ業ながら、せん方なく、その子供を抱きて、晝は孀屋の內にてなげき暮し、夜も亦孀屋の內にてといきをつきつゝ夜を明し、かやうに嘆き悲めども、死したる妻の還りくることなきこととて、せん術もなく、たま〳〵人が、我が戀ふる妻は羽易の山に居らるよと告げ知らせくるゝ者のあるに、或はあふことも出來べきかと喜びて、早速に岩根をふみ苦しき路を凌ぎて來て見たれど、永らへゐると念ひし我が妻の幽かにすら見えざれば、かやうに苦みつゝ尋ね來し甲斐は全くあらざりしよ。去年見たりし秋の月の今年も同じ樣に照してをれど、別れし妻は還り來らずして、愈々年月多く遠ざかり行くよ。

引手の山に妻を一人殘しおきて、山路を還り來れば、悲み愈々切にして、生きてゐる樣の心地もせず。

妻を羽易の山に葬りて我が家に歸り來りて孀屋を見れば、我が妻のしゐたりし木枕はかたへに打やられてあらぬ方に向きてあり。(床上に枕橫りて妻あらず。悲痛の情おさふべけんや。)

〔批評〕幼兒を殘して妻に先たれたる夫の情、洵に此の如くなるべし。殊に、最終の短

詠、讀むものをして腸を斷たしむ。素朴の眞情の然らしむるものなるべし。

吉備津采女死時、柿本朝臣人麿作歌一首幷短歌

〔文字〕吉備は志賀の誤なり、近江の志賀より出でたる采女なれば志賀津采女といひしなりといふ宣長說從ふべし。

秋山下部留妹、奈用竹乃騰遠依子等者、何方爾念居可、梼紲之長命乎、露己曾婆、朝爾置而夕者消等言、霧己曾婆、夕立而明者失等言。梓弓音聞吾母、髣髴見之事悔敷乎、布梼乃手枕纏而、劒刀身二副寐在過去子等我、朝露乃如也、夕霧乃如也。

短歌二首

樂浪之志我津子等何罷道之川瀨道見見不怜毛。

天數凡津子之相日於保爾見敷者今叙悔。

〔文字〕不怜彌可念而寐良武の下に他本によりて悔彌可念戀良武の一句を補へり。

●罷道之は罷邇之の誤、天數の天は左々の誤ならんかと「古義」にいへり。●凡津子之、子の下に等の字落ちたるなるべし。此外誤植二三皆改めたり。

〔訓讀〕何方爾念居可、居を「古義」にはマセと尊敬の意を含める訓に改めたり。元のまゝにてもあしからず。●梼紲、元とタクヅヌと訓みたれども、タクヅヌ梼綱は白キとつゞくべき枕詞にて、長きと續くべき枕詞にあらず。タクナハ梼繩は長キと續く例なれば、こゝは、タクナハと改めたり。●夕者消等言、元はユフベニハキエストイヘとあり、「古義」はユフベハケヌトイヘと訓めり。朝に夕にといふこと普通の例なれば、夕の下に爾なくともニを添へて訓みてよし。現にすぐ下の夕立而の處には爾の字なけれど「古義」もニを添へて訓めるを見ても知るべし。●消、「古義」はケヌと訓みたり。意味を强めていふところと取れば、ケヌといふもよろしけれど、下の明者失等言の處の失をばウスと訓みて、ウセヌと訓まざるを見れば、消も强ひてケヌと訓むにも及ぶまじ、唯だ普通の訓に從ひてキユと訓みておきて可なるべし。●明者、アシタニハと訓む。理由前にいへるに同じ。●髣髴見之、オホニミシと訓む「考」の說從ふべし。今、改めたり。●朝露乃如也、夕霧乃如也、上に時不在過去子等我とあれば、下は朝露ノゴトヤ夕霧ノゴトヤと、「考」に訓

めるが如くに、訓みて差支なし、否、然か訓まん方寧ろ勝れりといふべし。ゴトヤと訓むべからずと說ける宣長の說全く誤れり、之を悟らずして、そのまゝに尊奉せる「古義」の愚、笑ふべし。●天數、左々數の誤にてササナミノと訓むべきかと、古義にいへり、考ふべし。

〔語釋〕秋山下部留妹、顏の色つやの紅く麗はしき妻といふことなり。秋山の、紅葉などにてうつくしくなりゐるを、秋山の下部留といふなり。●奈用竹乃騰遠依子等、奈用竹はなよやかなる竹の意にて、女竹のことなり。騰遠依は撓み依る意なり。卽ち、女竹のなよゝかに撓み寄るが如くに撓み寄る兒等といふことなり。兒等は妹といふをいひかへたるまでの語なり。●何方爾、どう、如何樣に、なり。●念居可、文字通りにては思ツテヲレバニカアラン、思つてゐるからであらうか、なれど、こゝは語を補ひて、思ひたるにか、思うたのか知らん、の意にとりたし。●栲縄、栲の皮にて製りたる縄なり、長きものなるところより長きといふ語の枕詞となれり。●長命乎、長き命なるものを、なり。なるものを補ひてきくべし。采女まだ年若くて、前途壽長かるべきを以ていへるなり。この語句の結尾、下に、別に、なし。下の長き二聯の句を以て聞かせたり。●露己曾婆、こそは共にテニヲハなり、露をとりたてゝいふだけなり。●朝爾置而云々、露には生ずることをおくといふ。露は朝に出來るが、夕にははや消ゆるといふことである、なり。いへは命令の形にあらず、上のコソの係に應じたる結なり。文法上の規定に從ひたるものなり。●霧己曾婆云々、上に同じ。●梓弓、音にそふ枕詞。●音聞吾母、采女のみまかりたりといふことを風聞にきゝたる吾も、なり。●髮髣見之事悔敷乎、ボンヤリと見た事のあるのが悔しきに、なり。一層、一度も見ざりしならばまだしもならんに、吾は一二度、仄かながら見しことのあれば、夫が悲みの種となりて、悔しきに、なり。此下に、況してといふ語を補ひて聞くべし。●布栲乃枕にそふ枕詞。●手枕纏而手枕をして、なり、手枕をしあつての意なり。纏は凡て枕として頭をおくことをいふ。●劍刀、劍の身、大刀の身、といふところより、身體といふにそへていふ枕詞となれり。●身三副寢價牟、采女を自分の身にそへて寢けん、なり。けんは過去のことを推量していふ場合、又は、過去のことを漠然といふ場合につかふ助動詞なり。●若草、ツマに云ふ枕詞。この語、元は妻の意のツマにそふ枕詞たるが、こゝにては、通はして夫の意のツマにそへて用ゐたり。●孀子、夫のこと。●不怜彌可念而寢良武、カは疑のテニヲハなり。さびしく思ひてねるであらうか、なり。●

悔彌可念戀良武、悔しく思ひて戀ひをるであらうか、なり。●時不在過去子等、死ぬべき時にあらぬ時に死にたる妻、なり。●我、普通のガなり、主格たることを示すテニヲハなり。然るに「古義」には「我は香の字などの誤にや、こゝは我といふべきところにあらず、すぎにし子等哉といふにて香は歎息の辭なり」といへり。誤なり、次にいふを見て知れ。●朝霧乃如也、朝露の如くはかなくあることよ、なり。●夕霧乃如也、夕霧の如くはかなくあるよ、なり。●さて、この朝露乃如也、夕霧乃如也は、上にいへるが如く、何々の如く、はかなく、あるよ、といふことにて、上の過ぎにし子等がに對して、文章法上の述部(說明部)なり。殊にいひ出すほどのこともなきものなり。然るに、如何に考へ過ごしたるにか、宣長は「也の字は焉の字の如く、たゞ添へて書けるのみなり、ゴトヤと訓みては、ヤもじとゝのはず、さて此の終の四句は、子等が朝露の如く夕霧の如く時ならず過ぎぬると次第する意なり、かくの如く見ざれば語とゝのはざるなり云々」といへり。實にも、この終の四句の意を然か、子等が朝露の如く夕霧の如く時ならず過ぎにしとやうに解せんには、終二句は、何々ノゴトヤと訓みては語調はざるべし。されど、何故に此の四句の意を然か解せざるべからずとは定めたるぞ。然か定めたるが誤れゝばこそ事もなき、正しき文句が調はざるものとなり了れるにはあらずや。正しき正方形なりとも、凸凹不整の眼鏡をかけて見たらんには、形のゆがめる怪しきものに見えざらんや。予の見解を以てすれば、宣長のこの解釋は無法なり。強て說を立てんとして立て損ひたるものなり。是を眞と心得て繼承せる「古義」は愚の極なり。殊に我をカナの意として香と改めんとするが如きは誠に言語道斷なり。

作者の意「時ならず過ぎにし子等の壽命の朝露の如く夕霧の如く誠にはかなきものなるよ」なること嚴として動すべからず、炳として火を見るが如し。而してこの意に解釋して、宣長の也の字の說に聊も衝突することなきなり。卽ち知る宣長の也字の說は全く無用の辯なることを。

●樂浪之志賀大津等にそふ枕詞。●志我津子等志賀、出身の子等といふこと。子等はこの采女を親愛的にいひたる語なり。●罷道、退參し行く道、こゝにては、遺骸を舟にのせて故郷に送りたりと見ゆれば、その志賀へ行く道のこと。罷邇之ならば退參して行つてしまつたなり。●不怜毛、寂きことよ、なり。毛は感動詞。●天數、凡津にそふ枕詞。●於保爾見、はつきりと見ず、ぼんやりと見ること。

〔歌意〕色美はしく姿なよよかなる子(采女を親愛的にいふ)は、どう思うたのか知らん、

まだし前途壽長かるべき身なるに、……露こそは、實こも、はかなきものにて、朝におきても夕にも消えるし、又、霧も、實にはかなきものにて、夕に立ちても朝にはきえてしまうといふことであるが、露にもあらず霧にもあらぬ然かも年若く前途長かるべきものが、露の如く霧の如くはかな・身亡せたりといふは如何なることぞや。此の如きはあかの他人にも非常に悲みを與ふるものにて、この事を聞きたる我も、實は曾て(采女)をほのかに見しことのあるのが、今は却つてうらめしく悔しく、寧ろ全く見ざりせば、今かく悲しくも感せまじきに、とさへ思ふほどなれば、況して、手枕をかはして、身にそへて共寐しけんかのものゝ夫などは、如何ばかり悲み悔しみ戀ひて寐ることならん。誠に〳〵時ならずして死せし子の命の朝露の如くなることよ、夕霧の如くなることよ。

●志賀の子が暇乞して歸りて行く川道を見れば、誠に寂びしきことよ。

●大津の子の吾に出あひし、(卽ち、我の大津の子にあひし)日に、仄かに見しなりしが、仄かにゝてもかれを見しことが今は却つて悔しくうらめし。(全くあひも見もせざらんには、身まかりたりと話に聞きたりとも今のほど悲しくは感せまじければなり。)

〔批評〕此の歌人麿の歌の中にて最も華麗を極めたるものなり。采女の美貌よく情熱歌人をしてこの千古の佳調をなさしめたるか。

〔句法〕此の歌、句法もまた人麿の歌の中にて最も華麗なるものなり。例に依りて左に圖解す。

秋山のしたべる妹は　如何さまに思ひたれか。
なよ竹のとをよる子等　榜紲のの長き命を。

露こそは朝におきて夕には消ゆといへ。
霧こそは夕に立ちてあしたには失すといへ。

梓弓音聞く吾もおほに見しこと悔しきを、
しきたへの手枕まきて若草のその夫の子は　さぶしみか思ひてぬらん。
つるぎ大刀身にそへ寢けん　くやしみか思ひ戀ふらん。

時ならずすぎにし子等が　朝露のごと。
夕霧のごと。

柿本朝臣人麿在石見國臨死時、自傷作歌一首

〔解釋〕親王及び三位以上の人には薨といひ、五位以上及び、皇親には卒といひ、六位以下庶人に至るまでは死と稱する定なるに、此處には臨死とあれば、人麿の官位は六位以下なりしことを知るべし。(古今集序には「かのおほん時におほきみつの

くらゐ位柿本の人麿なん歌の聖なりけるとあれど、その誤れること是によりて知るべし。

鴨山之磐根之卷有吾乎鴨、不知等、妹之待乍將有。

〔訓讀〕不知等、シラニトと訓む方よろし。

〔解釋〕鴨山、一說には石見國美濃郡高津浦の沖にありて、今は鴨島といひ、そこに人丸大明神の社ありて、木像を安置すといふ。又、一說には、人麿の鴨山の云々の墓所は高角浦の海上に突き出でたる崎山なりしに、萬壽年中洪浪に打破られて、今はなし、又龜山ともいひしとぞ」といへり。而して、又、一說には、此兩說皆後世の附會なり。人麿の終焉の地は那賀郡の、昔の都農鄕、卽ち、今の都農村都農津村、二宮村、川波村、有福村、跡市村の中なりしなるべし。二宮村の內にもと神村といひし村あり、こゝは古は鴨村といひしなるべく、その鴨村の內に在る某の山を鴨山といひしにはあらざるか、と云へり。前に擧げたる從石見國別妻上來時歌を考へ合せ見るに、この第三說の推定當るべく思はる。

〔語釋〕磐根之卷有、岩を枕にしてゐるなり。旅に於て死なんとしてゐるの意なり。之は强むる意のテニヲハなり。●吾乎鴨、カモのカは疑のテニヲハ、モは感動詞なり。但し、こゝのカは歎息の意含められ、疑の意は寧ろ弱し。●不知等、知らずして、の意なり。●妹之、大和に殘してある妻なり。依羅娘子のことなり。●將有、居るならん、なり。

〔歌意〕この鴨山の岩根を枕にして死なんとしてゐる吾を、大和に在る妻はかくありとも知らずして、今日は歸るか、明日は歸るかと待ちてゐるであらう。

〔批評〕いつはりなく飾なく眞情を吐露したる千古の歌聖が臨終の詞、誠に哀とも哀れなり。

柿本朝臣人麿死時、妻依羅娘子作歌二首

且今日且今日、吾待君者、石水、貝爾交而有登、不言八方。

〔文字〕石、水の下に山の字落ちたり、石、水、山とあるべしといふ說あり。おもしろし。是に從へば、貝爾は一書の谷爾の方をとるべし。

〔解釋〕石川、石見國美濃郡高津に在り、今の高津川のことなりといふ。然らば、今の高津川の河口より前に揭げたる第一說にいへる鴨島の邊までは、第二說にいへる萬壽年間に海中に陷沒せしものか。第二說に據りて推せば、所謂鴨山は今の鵜ノ鼻にあらずやと思はるれど、鵜ノ鼻にては餘りに隔りすぎたり。第三說を考

へ合する時は、石川も亦那賀郡の郡濃の近傍にありきとする方勝りたらん。（卽ち、今高津村に在る柿本神社の如きは後世の僞造と見るなり。）

〔語釋〕不言八毛、ヤは詰問の意のテニヲハ、モは感動詞なり。いふではないか、なり。やもに無限の悲痛を托したり。

〔歌意〕けふは歸らるゝか、けふは歸らるゝかと、吾が毎日〳〵御待申してゐる人麿どのは、人の傳ふるところに依れば、（かの地にて身まかり給ひて）石川の貝に交りて（一說に從へば、石見山の山あひの岩石の中に交りて）おはすといふではないか。

（あゝ、何たることぞ。さやうのことゝも知らずして、吾は、御恙なく、けふは歸りたまふか、あすは歸りたまふか、と、毎日〳〵お待ち申してゐたりしものを、あゝ。）

〔批評〕石水を石水山の誤なりと見ることおもしろし。人麿の死去を報じたるものが、石水云々と報じたらんには知らず、然らざらんには、人麿の歌に鴨山の岩根しまけるとあるを、妻が、鴨山のかひに交りてなどいはずして、特に石川の貝に交りてなどといふこと、頗る如何なり。之を石水山と改めて妻のおほよそに石見山峽にまじりてといひたりとせんに、事理誠に適切なり。されば、石水を石川と見て、その川の貝に交りてなりと見んよりは、之を石見山峽に交りてありと見ん方

遙に勝りぬべし。されども、更に一歩を進めて、石見山（凡にいへば石見山、委しくいへば鴨山）の峽を流れゐる川が卽ち、石川なりと考ふれば、石見山の峽に交るといふことゝ、石川の貝に交るといふこととは、事がらはかはれども、事實は一つ事におちぬべし。是も注意すべきことなり。なほ、次の歌にいふところをも見よ。

直相者（タダニアハバ）、相不勝（アヒモカネテム）。石川爾（イシカハニ）、雲立渡禮（クモタチワタレ）。見乍將偲（ミツヽシヌバム）。

〔文字〕前の歌の石水を石水山の誤とせば、こゝの石川爾も石水山などの誤とせざるべからざらん。川と水とは行書體よく似たれば、誤りたりともすべけれど、山と爾とは、爾を極端なる草體にせざれば互に紛ふべくもあらず。されば、石川爾を石水山の誤なりとせんこと稍困難なり。之を困難なりとして、もとの如くにおかんには、前の歌の石水も元のまゝに石水として置ざるべからず。こゝも石水山とある方、實は事理にはよく適へり。

〔訓讀〕直相、タダニアフハと讀む方勝るべし。

〔語釋〕直相、直接に面會せんとすれば、なり。人傳ならで、ぢかにあはんとせば、なり。

愚案の如く、タダニアフハと訓まば、意は直接にあふことはといふことになる。この方よからんと思ふ。●相不勝、あひかぬるなるべし、なり。モは感動詞なり。

〔歌意〕ぢかにあはんとすれば、あふことと難かるべし。（愚案、ぢかにあはんことは、夫は相がたかるべし。）されば、ぢかにはあはずともよし。せめて、石川に、（一説に從へば、石見山に）雲でも立ちわたれよ。それをば、君が形見と見て生前の御事ども偲び奉らん、となり。

〔批評〕前の歌は大和にて詠みしものなること明なれども、この歌は詠みし處不明なり。石見山雲立渡れ、と見んには、なほ大和に在りて詠みたるものとも見らるれども、石川に雲立ち渡れ、と見んには、是非とも、妻は石見に下りて、この歌を詠みたるものと見ざるべからず。石見に下りて詠みたりとせんには、石見山雲立ちわたれは、また、適はず。

寧樂宮御宇天皇代

〔文字〕御宇天皇代の五字おちたり。今補ひたり。

〔解釋〕元明天皇より光仁天皇まで七代の間のことなり。即ち、千二百三十年前より千百三十年前までなり。

靈龜元年歲次乙卯秋九月志貴親王薨時作歌一首

〔文字〕志貴親王は本卷の例によるに、志貴皇子とあるべし。●並短歌の三字、衍字なれば、削除せり。

〔解釋〕志貴親王は天智天皇の御子志貴皇子なるか、天武天皇の御子磯城皇子なるか、不明なり。右の志貴皇子は芝基とも施基とも志紀とも書き、靈龜二年八月に薨したまへり、右の磯城皇子は薨し給へる年月不明なり。又、磯城島を志貴島と書きたる例あり。依りて、この志貴親王は天智天皇の御子の志貴皇子にあらずして、天武天皇の御子の磯城皇子ならんと「古義」にいへり。再考すべし。

梓弓手取持而大夫之得物矢手挿立向高圓山爾、春野燒野火登見左右燎火乎、何如問者、玉桙之道來人乃、泣涙霈霖爾落者、白妙之衣涅漬而、立留、吾爾語久、何鴨本名言、聞者泣耳師所哭、語者心曾痛、天皇之神之御子之御駕之、手火之光曾、幾許照而有。

〔訓讀〕本名言、モトナイフと訓むべし。モトナイヒツル、モトナイヘル、皆非なり。理由後にいふべし。

〔語釋〕得物矢、幸矢の意にて、獵につかふ失なり。●梓弓より立向までは下の高圓山をいひ出す爲の詞なり。立向ふ高的といひつゞくる音よりして高圓山にいひ

かけたるなり。●高圓山、奈良の春日山の内に在り。●玉桙之道にそふ枕詞。●道來人、あちらよりこちらへ來る人、なり。その人に、あの火は何かと問ひたるなり。●霈霖爾落、大雨の如くに落ち、なり。●白妙之、衣にそふ枕詞。●語久、かたるやうは、なり。是より以下の解釋「代匠記」も「考」も「略解」も皆非なり。「古義」の如きも「考」の誤を踏襲して、然かも例の「古義」流のこじつけを試み、句法を無視し攪亂したり。作者もし知るあらば、泣くべし、呪ふべし。●何鴨、何にしに、マア、何とてかマア、何故にかマア、なり。●本名、元無の意か、由無く、いはずともよきことをいふ、とやうの意の副詞なり。●言「考」以下皆、自分(問者)のいひたることをいふことと解したり。さてこそ訓もイヒツル、イヘル、など訓みたるなれ。されども、こゝは、然らず。何鴨以下は先方(道來る人)のいふ言葉なり。先方の自分に對していふ言葉なり。「何故に貴下はさやうのことを、きかずともよきに、きくぞや、」といふことなり。●聞者泣耳師所哭、是は次の語、心曾痛と對句になる句なり。聞と語と語のかはれるは、對句にしたるが爲なり。その心にて見るべし。兩句とも先方(道來る人)のいふ言葉の内なり。先方のいふ處をきゝて我が感じたるところを述べたるものと思ふべからず。そは甚しき誤なり。かの燎る火のいはれを貴下が聞けば、ねのみなかるべし、となり。

●語者心曾痛、その御話を貴下に向つて致せば、吾が悲また新になりて、吾が胸が痛し、となり。この二句は次のことをいはん爲の冒頭なり。●天皇之神之御子、天皇は常に現つ御神と申し上げをる故に、神と、つけていひたるなり、天皇の御子のといふことなり。●御駕、御葬送とあらはにいはず、行啓といひたるなり。●手火、御葬送の時、御葬送は夜行はせらるゝ故に、松明をつけて道を照しつゝ進み行く、之を手火といふなり。この度の御大葬にも舍人の松明を持ちて御行列に加はり居りしを見たるなるべし。●幾許、分量多けれども、そのいくらといふことの不明なる場合に、つかふ數詞なり。●照而有、てりてゐる、なり。「何鴨」よりここまでが、道來る人に問者に向つて答へし言葉なり。引用句は『何鴨……照而有』なり。

〔歌意〕高圓山に於て春野やく野火かと見る程に燃えてゐる火を『あれは何の火ぞ、如何にして、火が燃えてゐるぞ』と、向ふから來た人に問ひたれば、この道來る人立ち留り、涙を大雨の降るが如くにながして、衣もびしよぬれにぬらして、吾れに語るやうは『何とて貴下はさやうなことを問はるるぞ。さらでも悲しくて堪へ難きに、心なくもさやうなことを問はるるよ。御聞きなされば貴下もお泣なさるべく、御話申せば自分も胸が痛みます。（御話申せば貴下も御泣きなさるべく、自分も胸が痛みまする。）あの火は天皇陛下の御子樣志貴の皇子の御葬送の手火があの樣にひどくかがやいてゐるので御座りまする』と。

〔句法〕長歌を正しく解せんとするには、語句の意義を正しく解せざるべからざること勿論なるが、その上に、歌の句法、前後の照應、並に、作者のその時の心的狀態を愼重に考察せざるべからず。然らずして、妄りに解釋を試むる時は、支離滅裂して遂に具眼者には何の事とも解せられざるに至るべし。注意すべきことなり。

此の歌の先輩の解釋、慊らざる所特に多し。例の圖解を以て明瞭ならしめん。

梓弓手に取り持ちて
丈夫の　さつ矢たばさみ　立ち向ふ
高圓山に
春野やく野火と見るまで
燎る火を
『如何に』と問へば、
玉桙の道來る人の　泣く涙ひさめにふれば
白妙の衣ひづちて、
立留り、
吾に語らく
『何にしかも、もとないふ。
聞けば、れのみしなかゆ。
語れば、心ぞ痛き。
天皇の神の御子の出でましの手火の光ぞこゝだ照りたる』

萬葉集卷第二講義 終

315
229

厚文
四/五十六